原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第21集

原の辻遺跡

原の辻遺跡特定調査事業発掘調査報告書Ⅲ
（環濠等状況調査２）

２００１

長崎県教育委員会

原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第21集

原の辻遺跡

原の辻遺跡特定調査事業発掘調査報告書Ⅲ
（環濠等状況調査２）

発刊にあたって

本書は，原の辻遺跡特定調査事業に伴って実施した，平成12年度の原の辻遺跡発掘調査報告書です。

原の辻遺跡は，中国の歴史書『魏志倭人伝』に登場する，「一支國」の「王都」として特定されている遺跡です。『魏志倭人伝』に記された３世紀の日本に存在した国々の中で，国の都がはっきりと特定されているのは唯一原の辻遺跡だけで，全国的にも稀有で貴重な遺跡です。その重要性が認められ，平成９年９月に国史跡，平成12年11月には国特別史跡の指定を受けました。弥生時代の遺跡で特別史跡の指定を受けているのは，静岡県登呂遺跡，佐賀県吉野ヶ里遺跡と原の辻遺跡の３遺跡だけです。

平成10年度・平成11年度に実施した特定調査事業に伴う発掘調査では，遺跡の北西部の状況を詳しく知ることができました。また，中国の前漢時代の「五銖銭」や「三翼鏃」，新時代の「貨泉」，朝鮮半島の楽浪系の「馬車具」（「車輿具」），日本最古の「金鎚」などの大陸伝来の貴重な遺物も発見しました。今年度の調査は，平成11年度に続いて環濠等状況調査として，遺跡の北西部における環濠をはじめ，より詳細な状況の調査を実施しました。その結果，新たな遺構や大陸から伝えられた貴重な遺物を発見しました。

今回の発掘調査の成果を学術的な資料として，また文化財の保護のために役立てていただければ幸いです。

平成13年３月31日

長崎県教育委員会教育長　　木　村　道　夫

例　　言

1．本書は，原の辻遺跡特定調査事業に伴って実施した，平成12年度の原の辻遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書に収録した遺跡の調査地区は，長崎県壱岐郡芦辺町深江鶴亀触字不條・八反に所在する。

3．調査は長崎県教育委員会を主体として，原の辻遺跡調査事務所が担当した。

調査組織	所　　長	田川　　肇	
	課　　長	安楽　　勉	
	主任文化財保護主事	町田利幸	（現場担当）
	文化財保護主事	杉原敦史	（現場担当）
	文化財保護主事	藤村　　誠	（現場担当）

4．本書で使用した遺物と遺構の実測および製図は，原の辻遺跡調査事務所が行った。

5．本書に収録した遺物・図面・写真は，原の辻遺跡調査事務所で保管している。

6．本書の写真は，町田利幸が撮影した。

7．本書の執筆は，Ⅰ.，Ⅱ.，Ⅲ.1．を藤村誠が，それ以外を杉原敦史が担当した。

8．本書の編集は，杉原敦史が行った。

本文目次

Ⅰ．遺跡の立地と環境……1

1．地理的環境……1

2．歴史的環境……2

Ⅱ．調査の経緯……3

Ⅲ．調　　査……7

1．調査概要……7

2．遺　　構……8

3．遺　　物……31

4．まとめ……94

表目次

第1表　これまでの原の辻遺跡の主な調査の経緯と成果……4

第2表　Pit 1 出土小礫分析　……29

挿 図 目 次

第１図　壱岐島および遺跡位置図……1
第２図　平成11年迄の調査成果による主要遺構配置図（１／8,000）……5
第３図　調査区配置図（1/5,000）……6
第４図　主要遺構配置図（1/1,000）……9
第５図　Ａ区・Ｂ区遺構配置図（1/100）……11
第６図　Ｄ区・Ｅ区遺構配置図（1/100）……13
第７図　Ｃ区遺構配置図（1/100）……15
第８図　Ｆ区遺構配置図（1/100）……16
第９図　Ａ区西壁・Ｂ区東壁土層図（1/60）……17
第10図　Ｂ区南壁土層図（1/60）……18
第11図　Ｃ区北壁土層図（1/60）……19
第12図　Ｄ区南壁土層図（1/60）……20
第13図　Ｅ区東壁・南壁土層図（1/60）……21
第14図　Ｆ区南壁土層図（1/60）……22
第15図　濠・溝・集石遺構土層図（1/20，1/40）……23
第16図　１号溝・２号溝遺物出土状況（1/40）……24
第17図　１号・３号・４号・５号土壙実測図・土層図（1/30）……25
第18図　２号・６号土壙実測図・土層図（1/30）……26
第19図　１号旧河道集石遺構実測図（1/40）……28
第20図　Ｄ区１号旧河道Ⅴ層出土土器①（1/4）……32
第21図　Ｄ区１号旧河道Ⅴ層出土土器②（1/4）……33
第22図　Ｄ区１号旧河道Ⅵ層出土土器（1/4，1/6）……34
第23図　Ｅ区２号旧河道出土土器（1/4）……35
第24図　Ｂ区１号濠出土土器，Ｃ区１号濠出土土器①（1/4，1/6）……36
第25図　Ｃ区１号濠出土土器②，Ａ区１号溝出土土器①（1/3，1/4）……37
第26図　Ａ区１号溝出土土器②（1/4）……38
第27図　Ｂ区２号溝出土土器（1/3，1/4）……41
第28図　Ｆ区土器溜Ⅰ層出土土器①（1/4）……42
第29図　Ｆ区土器溜Ⅰ層出土土器②（1/4）……43
第30図　Ｆ区土器溜Ⅰ層出土土器③，Ｆ区土器溜Ⅲ層出土土器①（1/3，1/4）……44
第31図　Ｆ区土器溜Ⅲ層出土土器②（1/3，1/4）……46
第32図　Ｆ区土器溜Ⅳ層出土土器（1/4）……48

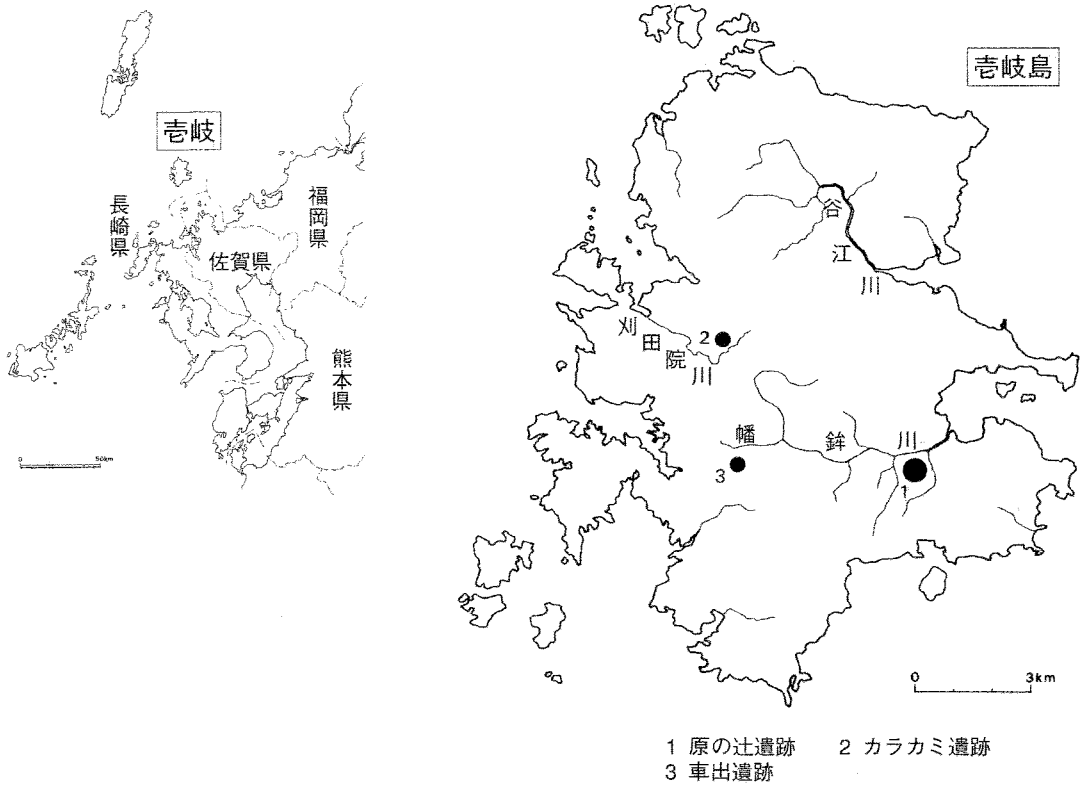
第33図　Ｆ区土器溜Ⅴ層出土土器（1/4，1/6）……49
第34図　Ｆ区土器溜Ⅵ層出土土器①（1/4）……50
第35図　Ｆ区土器溜Ⅵ層出土土器②，Ｆ区土器溜Ⅶ層出土土器（1/4）……51
第36図　Ｃ区落ち込み１出土土器①（1/4）……52
第37図　Ｃ区落ち込み１出土土器②，Ｃ区落ち込み２出土土器（1/3，1/4）……53
第38図　Ｄ区集石遺構試掘壙出土土器（1/4，1/6）……54
第39図　朝鮮半島系出土土器（1/3）……56
第40図　石器・石製品①（2/3）……59
第41図　石器・石製品②（1/2）……60
第42図　石器・石製品③（1/2）……61
第43図　石器・石製品④（1/2）……62
第44図　石器・石製品⑤（1/2，1/3）……63
第45図　石器・石製品⑥（1/3）……64
第46図　石器・石製品⑦（1/3）……65
第47図　石器・石製品⑧（1/3）……66
第48図　石器・石製品⑨（1/3，1/4）……67
第49図　石器・石製品⑩（1/3）……68
第50図　木製品①（1/2，1/4）……70
第51図　木製品②（1/4）……71
第52図　木製品③（1/4）……72
第53図　木製品④（1/4）……73
第54図　木製品⑤（1/4）……75
第55図　木製品⑥（1/4）……76
第56図　木製品⑦（1/4）……77
第57図　木製品⑧（1/4）……78
第58図　木製品⑨（1/4）……79
第59図　木製品⑩（1/4）……81
第60図　木製品⑪（1/4）……83
第61図　木製品⑫（1/6）……85
第62図　木製品⑬（1/8，1/10）……87
第63図　木製品⑭（1/4）……89
第64図　木製品⑮（1/4）……91
第65図　金属製品・骨角器・土製品・装飾品（1/1，1/2）……92
第66図　時期別遺構配置図（1/500）……95

Ⅰ．遺跡の立地と環境

1．地理的環境

玄界灘に飛び石のように浮かぶ壱岐島は東西約15km，南北約17km，面積約139km²，対馬とともに長崎県に属し，人口は約３万５千人の島である。朝鮮半島釜山から対馬までは約52km，対馬から壱岐及び壱岐から福岡県博多までは約67km，壱岐から佐賀県呼子までは約26kmの距離に位置する。長崎県への海上交通アクセスはなく，行政的には長崎県に属するものの文化的・経済的には福岡県との繋がり深い。

島は全体が平坦な溶岩台地で，起伏は少なく最も高い岳の辻でも標高は213mにすぎない。現在の耕地率は32%で険しい山々からなり耕地率も2.7%の対馬とは好対照をなしている。島の基盤は古第三期層で，玄武岩がその表面を覆い，弥生時代以降の箱式石棺や古墳石室の石材として利用されている。島であるがゆえ自然環境の破壊は都市部ほど進まず，歴史・文化の研究フィールドとしてはとても有効な場所である。『魏志倭人伝』には「……耕田猶不足食……」とあるが，島南東部の「深江田原」は県内第２の沖積平野で，有数の穀倉地帯となっている。原の辻遺跡はこの平野の中に舌状に突き出した台地（標高18m）と現在の水田面からなり，現在の遺跡の範囲は約100haである。また遺跡北側には東西に幡鉾川が流れ，約１kmで内海（うちめ）に注いでいる。また，遺跡の位置する「深江田原」は冬になると北西の強風が吹くことでも知られている。



第１図　壱岐島及び遺跡位置図

2．歴史的環境

玄界灘に浮かぶ壱岐島は古くから対馬とともに大陸や朝鮮半島との人的・物的な交流拠点として，また防衛上の要衝として歴史的に重要な役割を担ってきた。

壱岐が初めて歴史に登場するのは３世紀の中国の歴史書『魏志倭人伝』で，その中に「一支国」として記載され，弥生時代終末期の壱岐の状況が紹介されている。「(対馬国から）南に瀚海という海を渡り，千余里行くと，一大国（一支国）に着く。長官は卑狗，副官は卑奴母離と呼ばれている。広さは四方三百里ばかり。竹木・叢林が多く，三千ばかりの家がある。やや田地があるが，食べるには足らない。南北に海を渡って米などを買ってくる。」短いが当時の壱岐を知る貴重な記述である。

現在壱岐では弥生時代の遺跡が60余カ所知られている。その中でも出土遺構・遺物ともに群を抜き，一支国の拠点集落であると考えられているのが原の辻遺跡である。原の辻遺跡は弥生前期末から集落の形成が始まり，弥生中期前半には多重の環濠を巡らし大集落として整備され，古墳前期まで集落が存続したようである。

調査の進展によって台地を環る濠，台地頂上部での集落の中枢部分とみられる高床建物跡の発見，台地西側での船着き場跡の発見など，都市的様相を持つ一支国の王都としての姿を徐々に現してきた。また，大陸系の遺物や高度な建築・土木技術を伺わせる遺構・遺物は，この地で大陸や朝鮮半島の人々との活発な交流が行われていたことを示してくれている。

島内で原の辻遺跡以外の弥生時代の重要な集落遺跡としてはカラカミ遺跡と車出遺跡が知られる。刈田院川の中流北岸に点在する遺跡群の中心がカラカミ遺跡である。原の辻遺跡と同じく弥生時代前期末から集落が形成され，高地に位置するものの環濠が巡っている。朝鮮半島系の瓦質土器や楽浪系の滑石混入土器の出土は大陸との頻繁な交流を物語る。原の辻遺跡との類似性は大きいが，集落の規模が小さく，出土遺物から漁労や交易に従事した集団の基地的な集落であった可能性が強い。

幡鉾川上流の遺跡群の中心が車出遺跡である。ここからも貨泉・卜骨等が出土する。しかし，この地域が原の辻遺跡と同じ水系で直線で約５㎞程上流であること，また集落の形成時期が弥生中期であることから，原の辻遺跡から派生した集団によって集落が営まれた可能性が強いと考えられる。ここにも有力者層が存在し，北から南に深く湾入した半城湾を意識し，島の西側をかためるための拠点集落であった可能性もある。

５世紀後半に築造されたとみられる大塚山古墳は，原の辻遺跡を見下ろす山の上に築かれ，この地の有力者のものと考えられる。その後約１世紀近くの空白を経て巨大な古墳が島の中央部に多く見られるようになる。県内で最大の前方後円墳である双六古墳，石室に線刻が見られる鬼屋窪古墳など巨石で築いた石室墳が壱岐に極端に多い。これは朝鮮半島との交流に関心の深かった中央集権的有力者の存在を伺わせるものである。

律令制下において壱岐・対馬は下国とはいえそれぞれ一つの国として扱われている。これも，壱岐・対馬のもつ大陸との交流拠点・防衛拠点としての重要性からに他ならない。

Ⅱ．調査の経緯

原の辻遺跡の調査は，幡鉾川流域総合整備計画にかかる範囲確認調査及び緊急発掘調査が平成３～６年度に実施され，弥生時代の大規模な環濠が検出されるなど重要な発見があった。

平成５年度の調査は，遺跡の東側一帯の緊急発掘調査と北側から西側一帯の範囲確認調査を実施し，環濠をはじめとする重要な遺構等が検出された。その結果にもとづいて協議を行い，平成５年度の調査箇所を含めた工事区域内の約4.5haについて，非農用地を設定し，遺構の保存を行うことになった。

平成６年度の調査は，遺構の北側一帯の緊急発掘調査を実施し，環濠等の遺構を検出した。また，遺跡の南側の大川地区では農道拡幅工事中に貴重な中国製陶磁器類などの古代の遺物が大量に発見されたために，工事を中断して調査を実施した。

平成７年度には，原の辻遺跡調査指導委員会において，これまでの調査結果に検討が加えられた結果，当該遺跡が『魏志倭人伝』中の「一支国」の王都として特定された。

平成８年度は，遺跡の西部一帯の調査を実施し，弥生時代中期前葉の船着き場跡，それに付属する石組遺構，弥生時代前期末から中期初頭にかけての水田畦畔遺構，弥生時代から古墳時代にかけての旧河道などを確認した。

平成９年度の調査では，幡鉾川の弥生時代中期の旧河道と濠等を確認し，旧河道内から高床建物の部材である床大引材をはじめとする多数の建築部材や100点以上の朝鮮系無文土器等が出土し，低地部分の居住域も確認した。

旧河道の調査は，幡鉾川の河川改修工事に伴って，平成６～８年度にかけて実施した。その結果，幡鉾川の弥生時代前期末から古墳時代前期にかけての旧河道４条，濠２条，溝１条を確認した。

また，これらの開発行為にともなう調査と並行して，台地部分の遺構確認調査を平成６～11年度まで実施し，台地頂上部分とその周辺部の調査で，祭祀用と考えられる高床建物の柱穴群や区画のための台地を東西に切る濠等を検出し，この付近一帯が遺跡の中核的部分であることが判明した。台地北側の高元地区では，竪穴住居跡等を検出し，この地区が居住域であることを確認した。

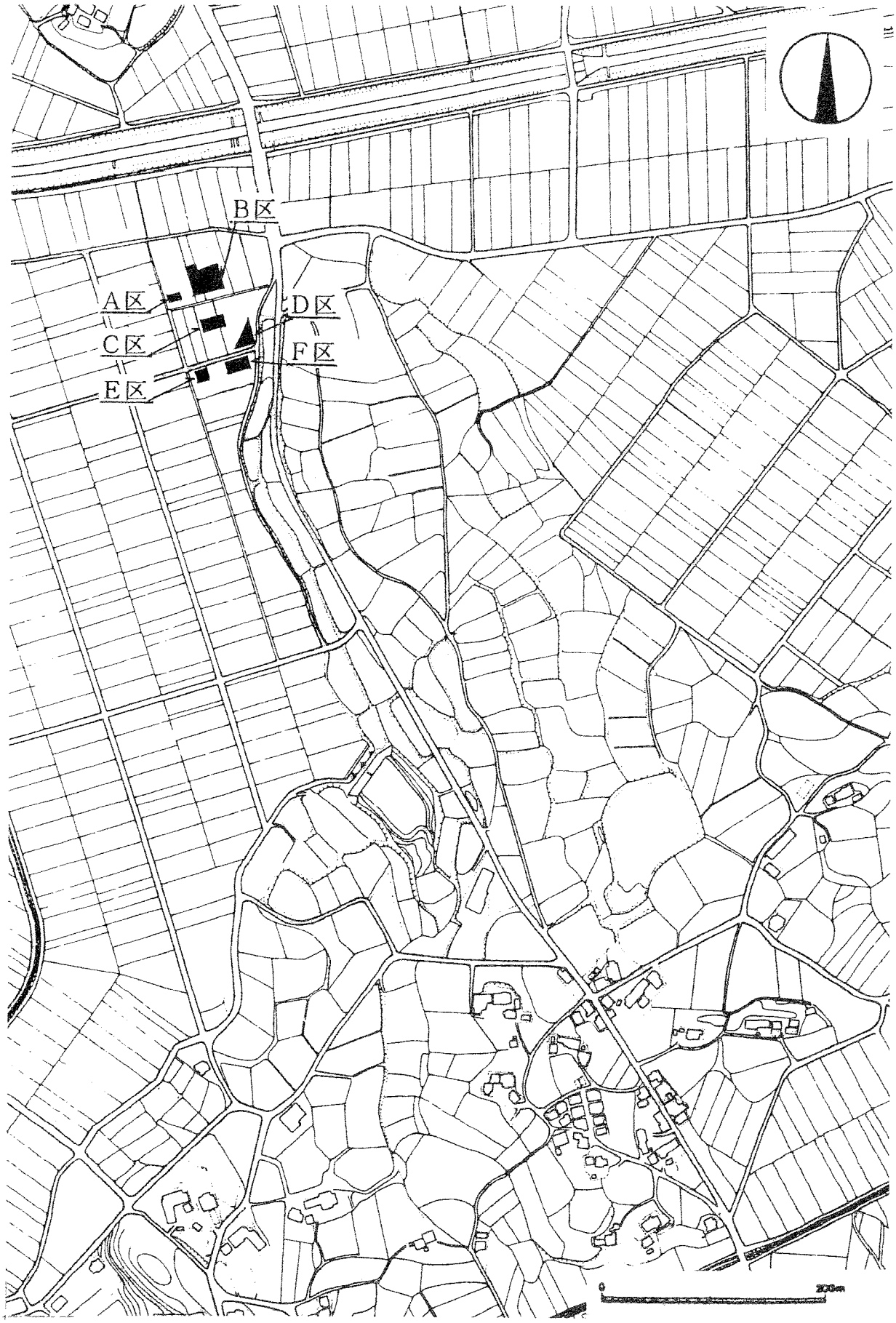
平成10年度からの特定調査事業では遺跡の北西低地部を中心に調査が行われた。その結果，弥生時代中期の環濠を台地下の北西部地域で初めて確認するとともに，複雑に中継し合う弥生時代後期の濠群も確認した。また平成11年度には，弥生時代中期前半の環濠２条が確認され，出土遺物の状況などから，この時期に多重環濠が成立し本格的な拠点集落として整備されたことが明らかになった。さらに，これらの環濠が旧河道の手前で止まり，台地西縁を流れる旧河道が途切れた環濠を補完していたこともわかってきた。

本年度は弥生時代後期の濠群の追跡調査や，遺跡北西低地部のさらに詳しい状況を把握するために過去２年間の調査区の隙間を埋めるような形で調査区を設定し，平成12年５月18日から平成12年10月20日の期間，長崎県教育委員会を主体に，原の辻遺跡調査事務所が担当して，面積1,300m²の調査を実施した。

調査・発見年度	発見者・調査主体	主　な　成　果
大正～昭和初期	松本友雄・山口麻太郎	学会への遺跡の紹介。
昭和14年	鴇田忠正	幡鉾川改修に伴う耕地整理での調査。
昭和26～39年	九学会・東亜考古学会	住居跡，墓域の確認。卜骨，貨泉出土。原の辻上層式の設定。石器から鉄器へ転換した典型的遺跡の評価。
昭和29年	東亜考古学会	圃場整備で大原地区から細形銅剣２・銅戈１出土。
昭和49年	長崎県教委	大原地区で，個人の基盤整備に伴って甕棺墓51・石棺墓19を発見し，戦国式銅剣１・トンボ玉など出土。
昭和51～52年	長崎県教委	大川地区，原ノ久保Ａ地区，原ノ久保Ｂ地区などの墓域を発見。大川地区では，方格規矩鏡，有鉤銅釧など出土。遺跡が台地上に広域に拡がることを確認。
平成３～５年	長崎県教委・芦辺・石田町教委	幡鉾川流域総合整備事業に伴う範囲確認調査。災害に伴う緊急調査。環濠の一部などを発見する。
平成５年	長崎県教委・芦辺・石田町教委	台地東裾で環濠，大溝を確認し，遺跡が大規模な多重環濠集落であることが判明する。各種の膨大な資料が出土する。
平成６年	長崎県教委・芦辺・石田町教委	原地区の高台部分で高床建物群を確認。高元地区で弥生時代中期～古墳時代初頭の住居跡13軒，土壙30基などを確認し，卜骨，獣帯鏡などが出土する。
平成７年	長崎県教委・芦辺・石田町教委	原地区高台部分で弥生時代高床建物群と古墳時代初頭竪穴住居跡，濠２条など確認。大川地区の墓域調査。調査指導委員会で一支国の王都と特定される。
平成８年	長崎県教委・芦辺・石田町教委	遺跡北側と西側の水田部分に弥生時代中期の居住域が拡がることを確認する。新たに濠や旧河道なども確認し，ココヤシ製笛など出土する。台地西側の八反地区で，船着き場跡と水田畦畔遺構を発見する。原地区で濠と竪穴住居跡を確認する。原ノ久保地区では墓域を確認し，内行花文鏡などが出土する。
平成９年	長崎県教委・芦辺町教委	遺跡北西部の溜池予定地で，弥生時代中期の旧河道を確認し，高床建物の床大引材を発見する。池田大原地区で濠を確認する。原地区では濠と竪穴住居跡を確認する。
平成10年	長崎県教委・芦辺町教委	不條地区で弥生時代中期の旧河道，弥生時代中期～後期の旧河道，弥生時代中期の濠１条，弥生時代後期の濠５条，弥生時代や古墳時代の溝などを確認し，前漢時代の五銖銭や三翼鏃などが出土する。
平成11年	長崎県教委・芦辺町教委	不條・八反地区で弥生時代中期～古墳時代前期の旧河道，弥生時代中期～後期の旧河道，弥生時代中期の環濠３条，弥生時代後期の濠１条，弥生時代中期～後期の土器溜，古墳時代前期の溝などを確認し，貨泉４枚，楽浪系の青銅製馬車具，板状鉄斧，弥生時代後期～古墳時代前期の鉄製金鎚，卜骨などが出土する。
平成12年	長崎県教委・芦辺・石田町教委	不條・八反地区で弥生時代中期～古墳時代前期の旧河道，弥生時代中期～後期の旧河道，弥生時代後期の濠１条，弥生時代中期～後期の土器溜などを確認する。大泉五十などが出土する。

第１表　これまでの原の辻遺跡の主な調査の経緯と成果

第２図　平成11年度迄の調査成果による主要遺構配置図（1/8,000）



第3図　調査区配置図（1/5,000）

Ⅲ．調　　査

1．調査概要（第３図，第９図～第15図）

調査区は遺跡の中央に位置する台地下北西部，原の辻遺跡調査事務所周辺の非農用地に，基本的に北からＡ区（50㎡，５ｍ×10ｍ），Ｂ区（550㎡），Ｃ区（200㎡，10ｍ×20ｍ）Ｄ区（200㎡），Ｅ区（100㎡，10ｍ×10ｍ），Ｆ区（200㎡，10ｍ×20ｍ），合計1,300㎡を設定した。

基本土層は若干の色の違いがあるものの，各区で共通している。

１層は褐色の現在の水田耕作面である。

２層は近世から近代の水田層と考えられ，黄褐色をしている。

３層は古代から中世の水田面で灰褐色である。

Ｄ区・Ｅ区に見られる３層の下（Ｄ区は２層の下）の黒褐色系の土層は，古式土師器や布留式土器が出土し，古墳時代前期の水田層と考えられる。この層は概ね旧河道の上にあり，時期決定と遺構検出の両面において指標となる重要な土層である。

なお遺物の取り上げ層位と土層図の関係は次のとおりである。

Ｂ区１号濠からの出土遺物はⅠ層が第15図の１層・２層，Ⅱ層が第15図の３層，Ⅲ層が第15図の４層，Ⅳ層が第15図の５層から出土したものである。Ｃ区１号濠は中層位より下からの出土遺物はなかったため，レベルを測定して遺物を取り上げた。Ｄ区の１号旧河道上の集石遺構は，目的は明確でないが人為的に積み上げられたものと考えられ，土層図を見ると，第12図の９ａ・９ｂ層と12層の間には明確な時期の相違が認められる。まず，弥生中期に12層が形成され，弥生後期に９ａ・９ｂ層が弥生中期の12層に重なり合う形で遺構上に堆積したようである。第15図においては第12図の９ａ・９ｂ層に相当するのが１ａ・１ｂ層であり，第12図の12層に相当するのが２層・５層となる。また集石で東西に分けられた１号旧河道のうち東側部分の遺物はⅣ層が第12図の４ａ～４ｃ層，Ⅴ層が第12図の10層，Ⅵ層が第12図の13ａ～13ｃ層からの出土である。また集石西側の遺物はⅤ層が第12図の７ａ・７ｂ層，Ⅵ層が11ａ層からの出土である。Ｅ区２号旧河道からの出土遺物はⅠ層が第13図の４層，Ⅱ層が第13図の５層・７層，Ⅲ層が第13図の８ａ・８ｂ・９層からの出土である。Ｆ区土器溜からの出土遺物のⅠ層は第14図の５ａ～５ｐ層，Ⅱ層は第14図の６ｂ・６ｆ・６ｇ層，Ⅲ層は第14図の７層，Ⅳ層は８ｄ・８ｅ層，Ⅴ層は９ａ～９ｄ層，Ⅵ層は10層，Ⅶ層は11ａ・11ｂ層からの出土である。Ｆ区１号旧河道Ⅰ層は第12図の４ａ～４ｄ層から出土したもので古代から古墳時代の遺物が認められた。

また各調査区（Ｄ区を除く）とも古代以降の度重なる水田造成のため削平をうけており，弥生時代の遺構も上半部分に損傷をうけている。

2．遺　　構（第４図～第８図）

(1) 旧 河 道

旧河道は，２条確認した。いずれも現在の幡鉾川の支流に相当するものと思われる。

１号旧河道は，Ｂ・Ｃ区で西岸部分の落ち込み，Ｄ区で西岸と河道の大半を，Ｆ区で西岸と河道の一部を確認した。平成10年度の船着き場付近水路等状況調査（以下，平成10年度特定調査と記す）(註1)で確認した２号旧河道と，平成11年度の環濠等状況調査（以下，平成11年度特定調査と記す）(註2)で確認した１号旧河道に繋がるものである。

今年度の調査では，Ｄ区において最大幅約17m，最深部約１m，長さ約20mを確認した。南から北方向に流れて本流に合流したものと考えられる。時間的制約もあり完掘はしていない。河道内では，河道中央よりやや東側に人為的に形成された集石遺構と，時期の異なる２条の流路を確認した。平成11年度特定調査において河道内は，時期の異なる流路が複雑に切り合っている状況を確認していた。今回集石遺構の東側で弥生後期前半の流路，西側で古墳時代前期の流路を確認したが，それ以外でも細かな流路が存在する可能性が高い。出土土器は，弥生中期後半の須玖Ⅱ式～古墳時代前期初頭までの様相をもち，河道内の複雑な攪乱を示す。土器を採り上げた際作成したドットマップにより詳細な時期別の流路のゾーニングを行うことが今後の課題となる。また，集石遺構の西側から河道西岸にかけての部分は，弥生後期～古墳時代前期にかけて水田にするため埋め立てられたと考えられる。しかし，埋め立てから時を隔てず古墳時代前期の流路によって切り込まれたと推測される。Ｆ区においても今回完掘する事は時間的制約がありできなかったが，隣接する平成11年度特定調査Ｅ区ではこの河道が大別３層に分かれ，上層が古墳時代～古代の層，中層が弥生後期～古墳時代前期の層，下層が弥生中期～弥生後期となることを確認している。今回はこの上層まで調査した。この地区は，台地と微高地に挟まれた狭い場所である。河道はこの狭い場所では流路を重層的に重ね，北に向かって開けてくると平面的に流路が展開する状況であったと考えられる。

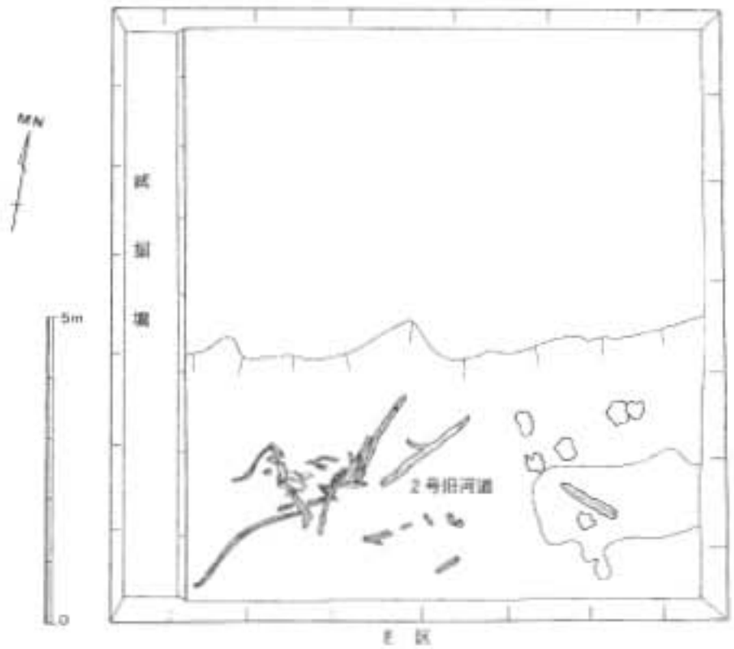
２号旧河道は，Ｅ区において北岸と河床の一部を確認した。平成11年度特定調査Ｅ区で確認した３号旧河道にあたる。流れの方向は確認できていないが，平成11年度特定調査Ｅ区東部より南側の地域で，1号旧河道から分岐，または合流すると考えられる。平成11年度特定調査では２号旧河道の北岸は，今回のＥ区では東南端に一部検出するものと考えられたが，今回の調査により，北岸はさらに北に拡がることを確認した。弥生中期初頭～弥生後期中葉の資料が出土した。

(2) 濠（第15図）

濠は１条検出し，Ｂ区とＣ区で確認した（１号濠）。平成10年度特定調査Ｅ区で検出した６号濠，平成11年度特定調査Ｂ区で確認した４号濠に繋がるものである。弥生後期に掘られ，古墳時代前期に埋没したと考えられる。Ｂ区において最大幅約4.5m，最深部約1.2mを測り，長さ約16mを確認した。Ｃ区では長さ約3.5mを確認した。また，平成10年度特定調査Ｅ区からはじまるこの濠が，Ｃ区で止

第４図　主要遺構配置図（Ａ～Ｆ区，国補Ⅰ区以外は平成８年度から平成11年度の調査区）（1/1,000）

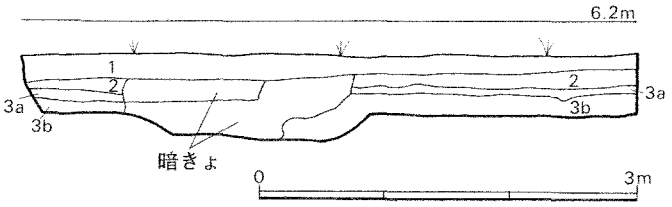
第5図　A区・B区遺構配置図（1/100）



第6図　D区・E区遺構配置図（1/100）

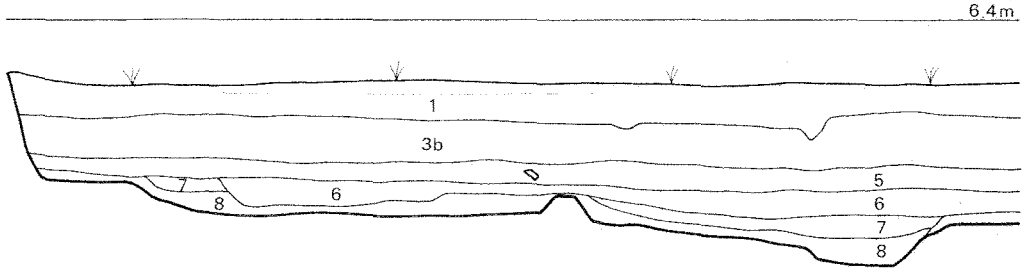
第7図　C区遺構配置図（1/100）

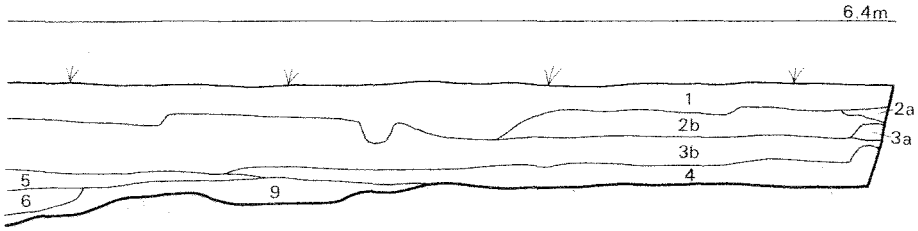
第8図　F区遺構配置図（1/100）



A区西壁土層

1　明褐色土層
2　灰黄色土層
3a　黒味が強い灰色土層
3b　淡灰黄色土層

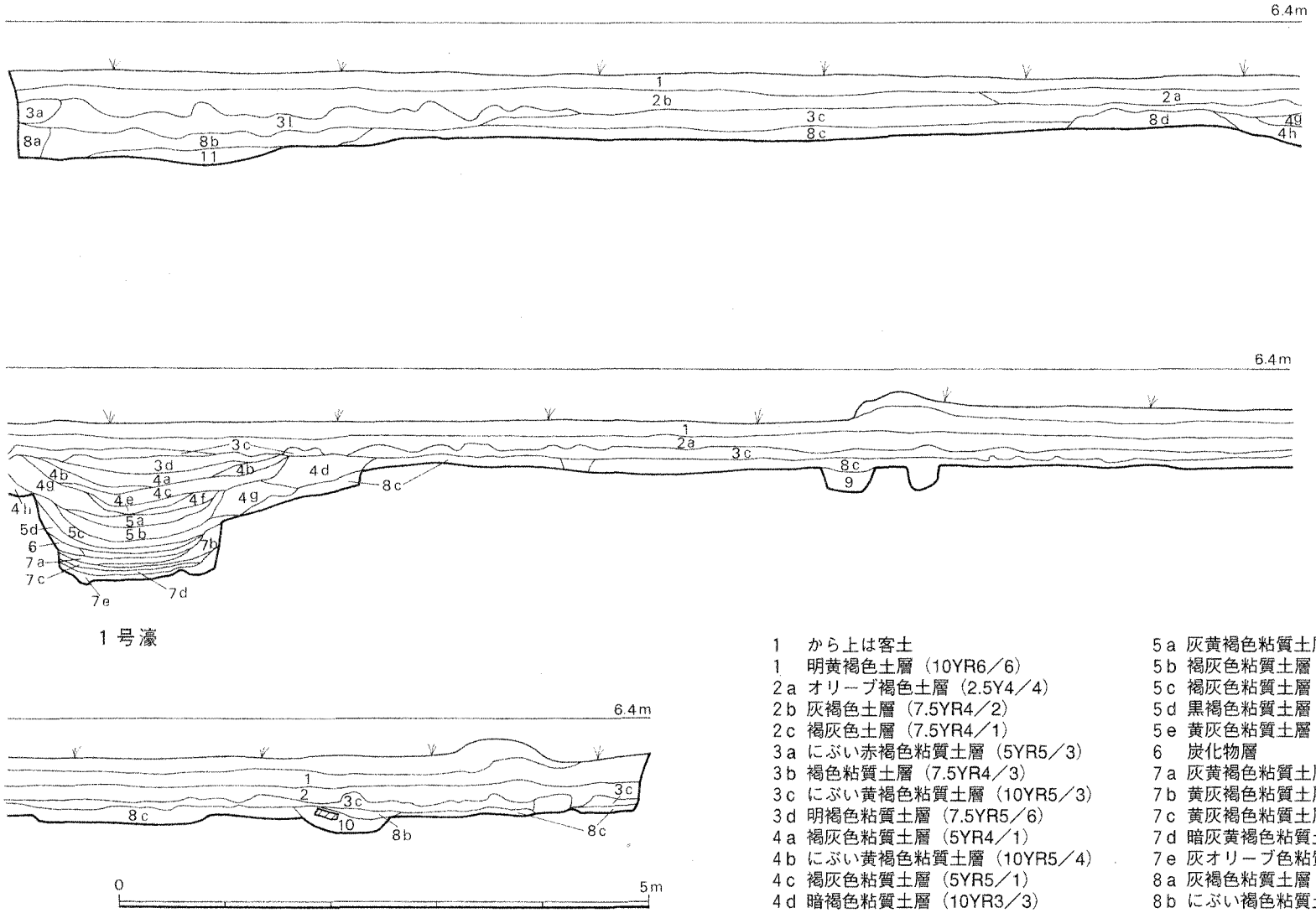




B区東壁土層

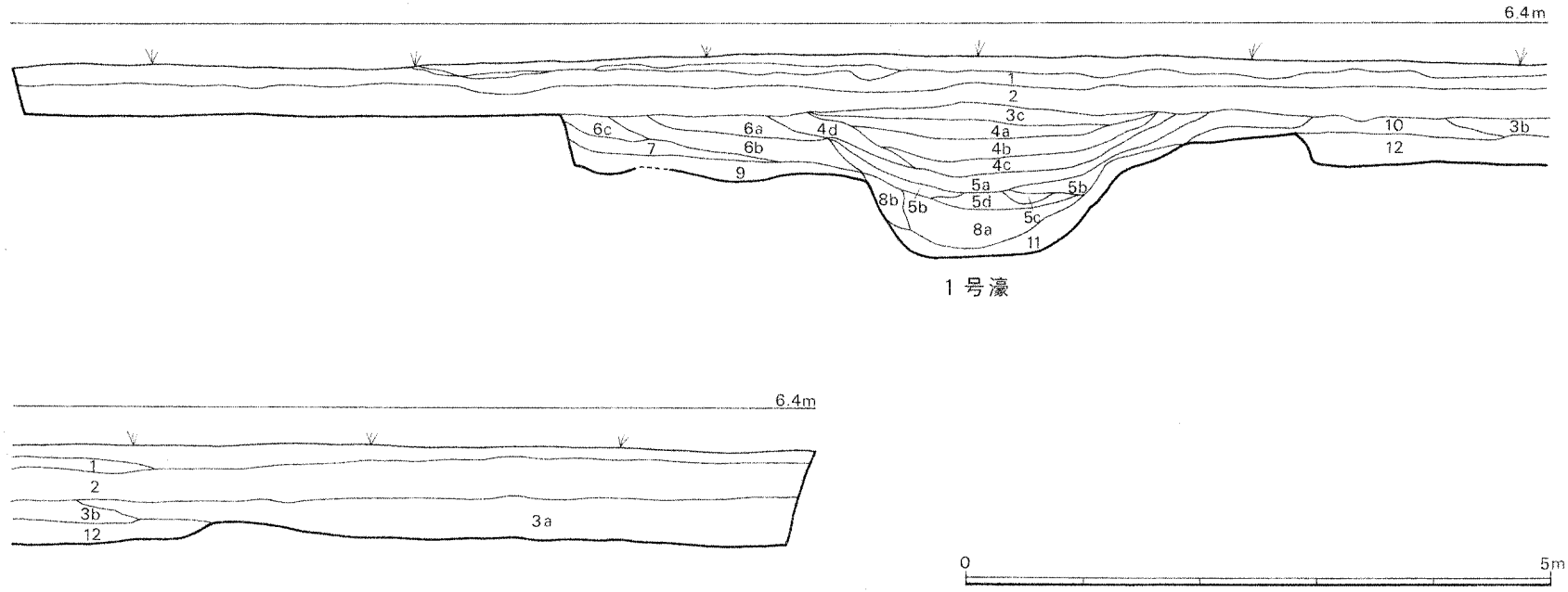
1　明黄褐色土層（10YR6／6）
2a　灰褐色土層（7.5YR4／2）（B区南壁2bと同じ）
2b　褐灰色土層（7.5 YR4／1）（B区南壁2cと同じ）
3a　にぶい赤褐色粘質土層（5YR5／3）（B区南壁3aと同じ）
3b　褐色粘質土層（7.5YR4／3）（B区南壁3bと同じ）
4　褐灰色粘質土層（5YR4／1）（B区南壁4aと同じ）
5　にぶい褐色粘質土層（7.5YR5／4）
6　褐灰色粘質土層（10YR4／1）
7　暗灰黄色粘質土層（2.5Y5／2）
8　灰オリーブ色粘質土層（5Y5／3）
9　にぶい黄褐色粘質土層（10YR5／4）

第9図　A区西壁・B区東壁土層図（1/60）



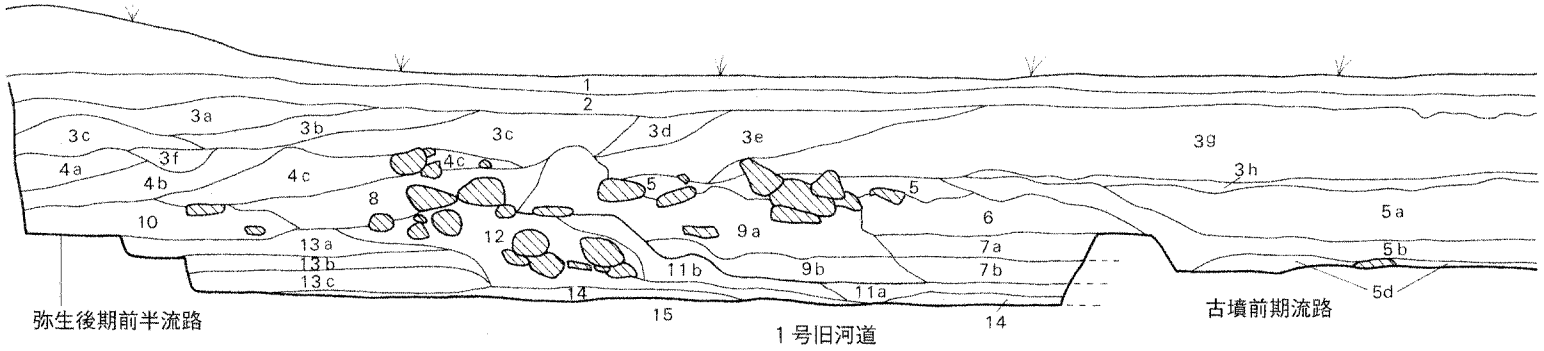
1　から上は客土
1　明黄褐色土層（10YR6／6）
2a　オリーブ褐色土層（2.5Y4／4）
2b　灰褐色土層（7.5YR4／2）
2c　褐灰色土層（7.5YR4／1）
3a　にぶい赤褐色粘質土層（5YR5／3）
3b　褐色粘質土層（7.5YR4／3）
3c　にぶい黄褐色粘質土層（10YR5／3）
3d　明褐色粘質土層（7.5YR5／6）
4a　褐灰色粘質土層（5YR4／1）
4b　にぶい黄褐色粘質土層（10YR5／4）
4c　褐灰色粘質土層（5YR5／1）
4d　暗褐色粘質土層（10YR3／3）
4e　褐灰色粘質土層（5YR 4 ／1）
4f　灰褐色粘質土層（5YR4／2）
4g　にぶい褐色粘質土層（7.5YR5／3）
4h　にぶい褐色粘質土層（7.5YR5／4）
5a　灰黄褐色粘質土層（10YR4／2）
5b　褐灰色粘質土層（10YR4／1）
5c　褐灰色粘質土層（7.5YR4／1）
5d　黒褐色粘質土層（2.5Y3／1）
5e　黄灰色粘質土層（2.5YR4／1）
6　炭化物層
7a　灰黄褐色粘質土層（10YR5／2）
7b　黄灰褐色粘質土層（2.5YR5／1）
7c　黄灰褐色粘質土層（炭化物含）（2.5Y5／1）
7d　暗灰黄褐色粘質土層（2.5Y4／2）
7e　灰オリーブ色粘質土層（5Y4／2）
8a　灰褐色粘質土層（7.5YR4／2）
8b　にぶい褐色粘質土層（7.5YR5／3）
8c　にぶい褐色粘質土層（7.5YR5／4）
8d　黄褐色粘質土層（10YR5／6）
9　灰褐色粘質土層（7.5YR4／2）
10　灰褐色粘質土層（炭化物含）（7.5YR4／2）
11　にぶい褐色粘質土層（7.5YR5／4）

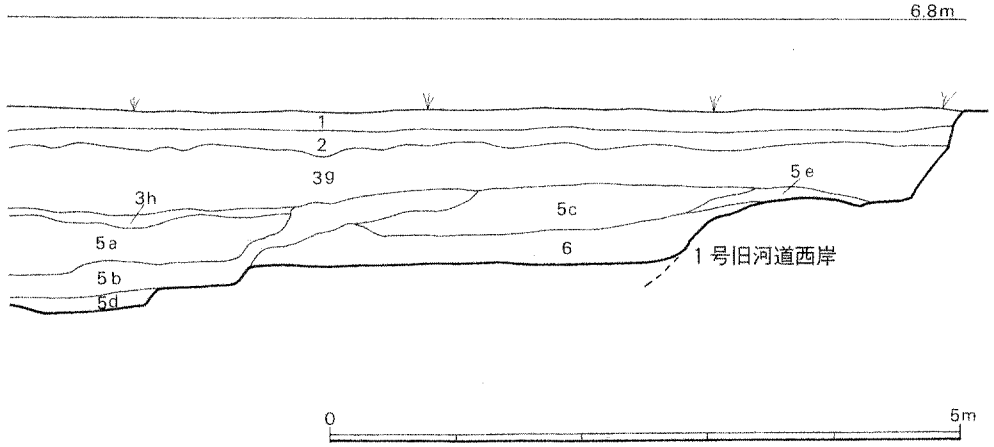
第10図　B区南壁土層図（1/60）



1より上は客土
1　黄褐色土層（10YR5／6）
2　にぶい黄褐色土層（10YR4／3）
3a 褐灰色粘質土層（5YR4／1）
3b 褐灰色粘質土層（7.5YR4／1）
3c 褐灰色粘質土層（5YR5／1）
4a 灰黄褐色粘質土層（10YR4／2）
4b 褐灰色粘質土層（10YR4／1）
4c 暗黄褐色粘質土層（2.5Y4／2）
4d 黄褐色粘質土層（2.5YR4／1）
5a 炭化物混黒褐色粘質土層（10YR3／1）
5b 炭化物混暗褐色粘質土層（10YR3／3）
5c 炭化物混黒褐色粘質土層（10YR5／4）（2.5Y3／2）
5d 炭化物混暗オリーブ色粘質土層（5YR4／4）
6a 褐灰色粘質土層（7.5YR4／1）
6b 灰褐色粘質土層（7.5YR4／2）
6c 灰褐色粘質土層（5YR4／2）
7　褐色粘質土層（7.5YR4／4）
8a 灰オリーブ色腐食土層（5Y4／2）
8b 灰色腐食土層（5Y4／1）
9　にぶい黄褐色粘質土層（10YR4／3）
10　褐灰色粘質土層（5YR5／1）
11　オリーブ黒色粘質土層（5Y3／2）
12　にぶい黄色土層（10YR5／3）

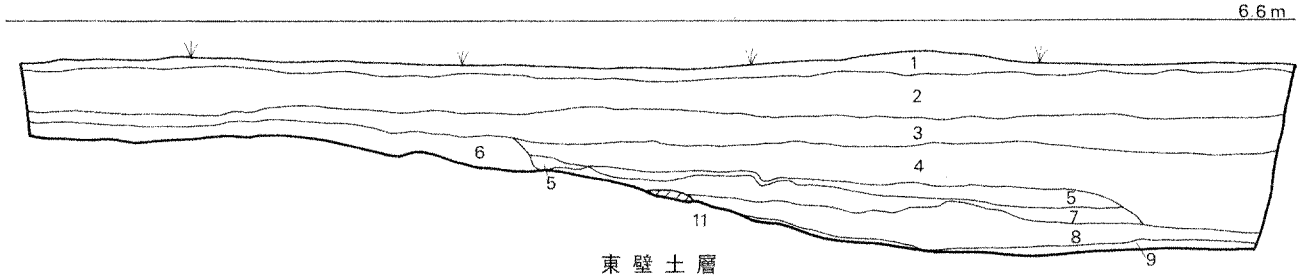
第11図　C区北壁土層図（1/60）





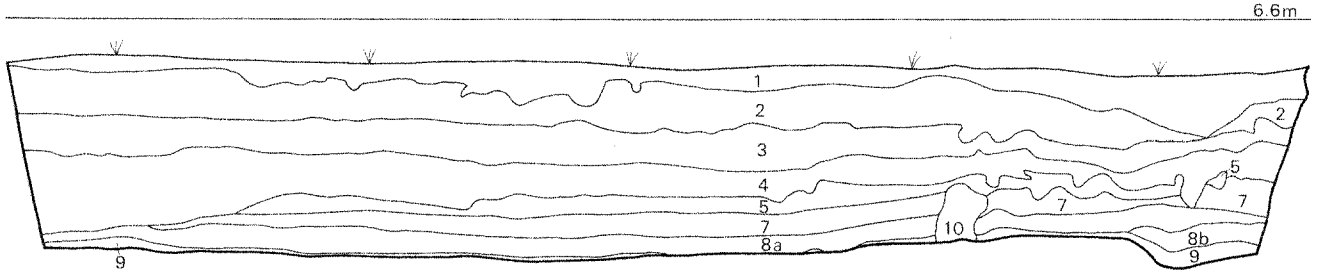
1　にぶい黄褐色土層（Hue10YR5／3）
2　にぶい黄褐色土層れき混（Hue10YR5／4）
3a　黒褐色土層（Hue5YR3／1）
3b　暗赤褐色土層（Hue5YR3／2）
3c　灰黄褐色土層（Hue10YR4／2）
3d　灰褐色土層（Hue7.5YR4／2）
3e　灰褐色土層（Hue5YR4／2）
3f　褐灰色土層（Hue10YR4／1）
3g　にぶい赤褐色土層（Hue5YR4／4）
3h　褐灰色土層（Hue5YR4／1）
4a　暗灰黄色粘質土層（Hue2.5Y4／2）
4b　にぶい黄褐色粘質土層（Hue10YR5／4）
4c　灰黄褐色粘質土層（Hue10YR4／2）
5a　灰褐色粘質土層（Hue5YR4／2）
5b　褐灰粘質土層（Hue10YR4／1）
5c　褐灰粘質土層（Hue7.5YR4／1）
5d　黄灰色砂質土層（砂利混）（Hue 2.5Y4／1）
5e　にぶい黄褐色粘質土層（Hue10YR5／4）
6　にぶい褐色粘質土層（Hue7.5YR5／4）
7a　灰色粘質土層（Hue5YR4／1）
7b　灰オリーブ色粘質土層（Hue5YR4／2）
8　黄灰褐色粘質土層（Hue2.5Y4／1）
9a　灰褐色粘質土層（Hue7.5YR4／2）
9b　暗灰黄褐色粘質土層（Hue2.5Y4／2）
10　黄灰色粘質土層（Hue2.5Y5／1）
11a　灰オリーブ色粘質土層（腐植土混）（Hue5YR4／2）
11b　灰オリーブ色粘質土層（Hue5YR4／2）
12　にぶい黄褐色粘質土層（Hue10YR4／3）
13a　灰オリーブ色砂質土層（Hue7.5YR4／2）
13b　灰オリーブ色粘質土層（Hue5Y4／2）
13c　暗オリーブ色粘質土層（Hue7.5Y4／3）
14　黄褐色礫層（河底）（Hue10YR5／8）
15　暗灰黄色砂質土層（砂利混）（Hue2.5Y4／2）
16　地山（岩盤・上面薄く砂）

第12図　D区南壁土層図（1/60）

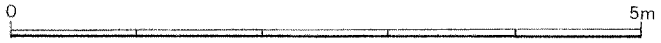


東壁土層

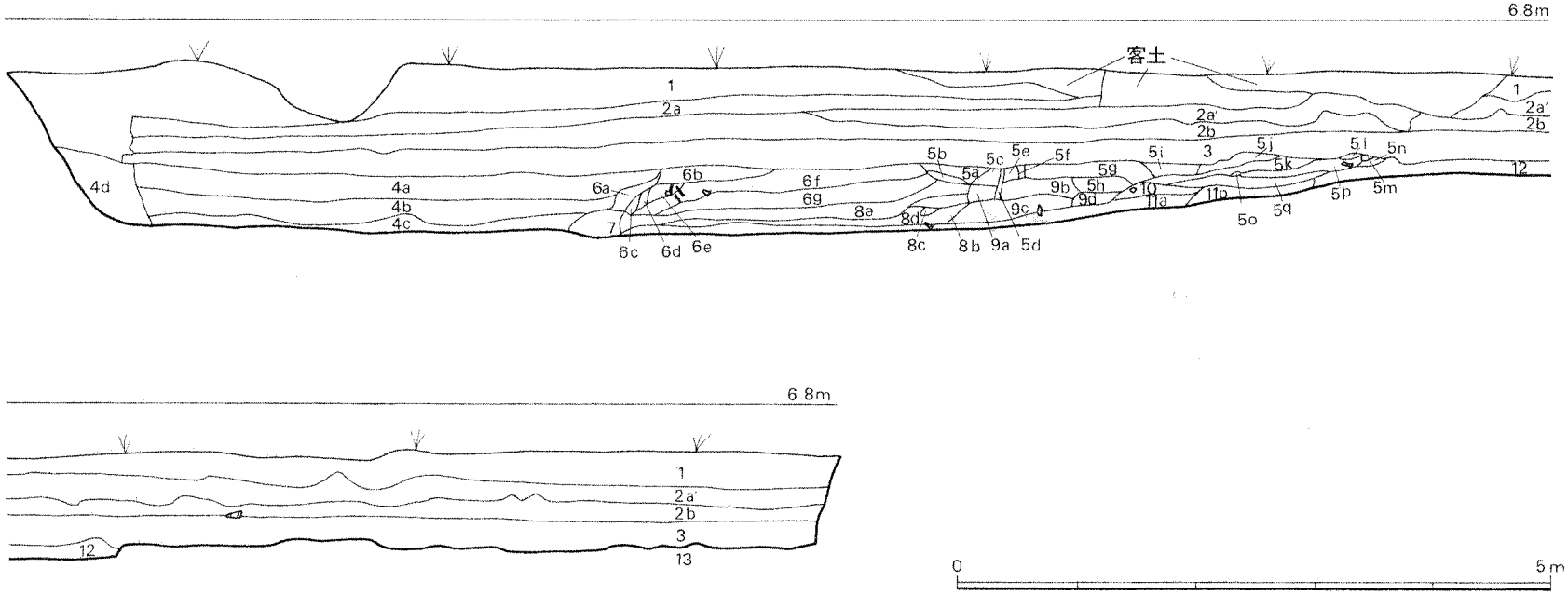
1　表土
2　黄褐色土層
3　暗灰色土層（風化小礫粒混入，やや固い粘土）
4　黒色土層（鉄分小粒が多く混入）
5　暗灰白色土層（きめの細かい粘土）
6　明赤灰黒色土層
7　灰白色土層（きめのやや細かい粘土）
8a　暗灰青色土層（粘土がやや固い）
8b　灰青色土層（7a層よりやや茶色味を帯びる）
9　濃青灰色土層（7a層よりやや粘質が強い）
10　にぶい橙色土層
11　灰赤色土層（固い粘土層）



南壁土層

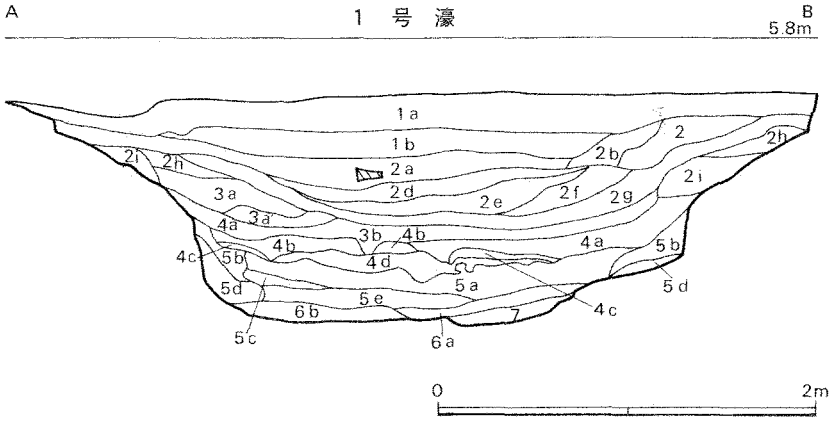


第13図　E区東壁・南壁土層図（1/60）

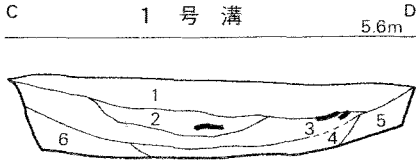


1　表土
2a 茶褐色土層（表土2層が混る）
2a' 赤灰色土層
2b 明灰色粘質土層
3　暗灰色粘質土層
4a 黒灰色土層
4b 淡黒灰色土層
4c 淡黒茶色土層
4d 濃黒色土層（礫混り）
5a 暗灰色粘質土層
5b 濃灰色粘質土層
5c 淡灰色土層
5d 明黄色土層（木の根）
5e 暗黄灰色土層（土の粒子が粗い）
5f 暗灰色土層
5g 暗黄灰色土層（若干炭混入）
5h 淡灰黄色土層
5i 淡黄灰色土層
5j 黄灰色土層（炭化物有）
5k 灰白粘質土層
5l 灰黄色土層
5m 黄色砂質土層（炭化物混り）
5n 暗灰色土層（炭化物混り）
5o 暗灰黄色土層
5p 黒茶灰色土層
5q 灰黄色粘質土層
6a 暗灰白色土層
6b 暗灰色土層
6c 明灰色土層
6d 明灰白色土層
6e 濃灰色土層
6f 暗灰黄色土層
6g 暗黄灰色土層
7　黒茶色土層
8a 明黄灰色土層
8b 灰茶色土層（やや赤味を帯びる）砂質ぎみ
8c 灰茶色粘質土層
8d 灰緑色土層
8e 灰白黒色土層（砂混り）
9a 暗灰茶色土層（風化礫やや混じる）
9b 暗灰茶色土層（風化礫やや混じる）
9c 暗茶黒色土層（5～10cmの風化礫を含む）
9d 暗茶色土層（風化礫混じる）
10　灰赤色砂質土層（風化礫混入）
11a 灰色砂混粘質土層
11b 灰赤色品質土層
12　にぶい赤褐色粘質土層
13　白灰色粘質土層（地山）

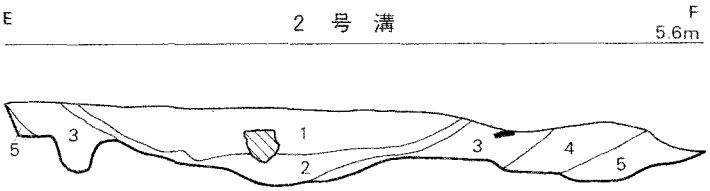
第14図　F区南壁土層図（1/60）



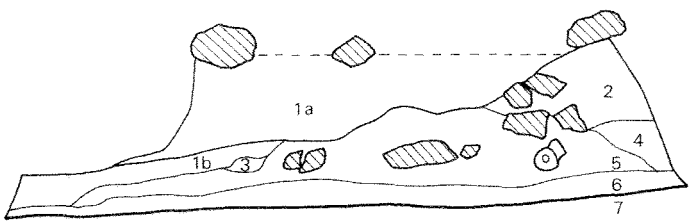
1 a にぶい褐色土層（Hue7.5YR5／3）
1 b 灰褐色土層（Hue7.5YR4／2）
2 a 灰褐色土層（Hue5YR4／2）
2 b 褐色土層（Hue7.5YR4／3）
2 c にぶい赤褐色土層（Hue5YR4／3）
2 d 灰黄褐色土層（Hue10YR4／2）
2 e にぶい黄褐色土層（Hue10YR4／3）
2 f 暗褐色土層（Hue10YR3／3）
2 g にぶい黄褐色土層（Hue10YR5／3）
2 h にぶい黄褐色土層（Hue10YR5／4）
2 i 褐色土層（Hue1075YR4／4）
3 a 炭化物混灰褐色粘質土層（Hue7.5 YR5／2）
3 a' 灰褐色粘質土層（Hue7.5 YR5／2）
3 b 暗灰黄色粘質土層（Hue2.5 Y 5／2）
4 a 黄灰色粘質土層（Hue2.5 Y 5／1）
4 b 黄灰色粘質土層（Hue2.5 Y 4／1）
4 c 炭化物層
4 d 暗黄色褐色粘質土層（Hue2.5 Y 4／2）
5 a 木の葉枝混黄灰色粘質土層（Hue2.5 Y 5／1）
5 b 木の葉枝混灰黄褐色粘質土層（Hue2.5 Y 6／2）
5 c 木の葉枝混灰色粘質土層（Hue5 Y 5／1）
5 d 木の葉枝混灰オリーブ色粘質土層（Hue5 Y 5／2）
5 e 木の葉枝混灰オリーブ色粘質土層（Hue5 Y 5／3）
6 a 暗オリーブ色粘質土層（Hue5 Y 4／4）
6 b 暗オリーブ色粘質土層（Hue5 Y 4／3）
7 灰オリーブ色砂質土層（Hue5 Y 4／2）



1 黒灰色土層
2 灰黒灰色土層
3 赤色鉄分混入明灰色土層
4 暗灰色粘質土層
5 灰黄色土層
6 淡灰色土層



① 灰黄褐色土層（Hue10YR4／2）
② 黄褐色土層（Hue10YR5／6）炭化物入り
③ 褐灰色土層（Hue10YR4／1）炭入り
④ にぶい黄褐色土層（Hue10YR4／3）
⑤ にぶい黄褐色土層（Hue10YR5／4）

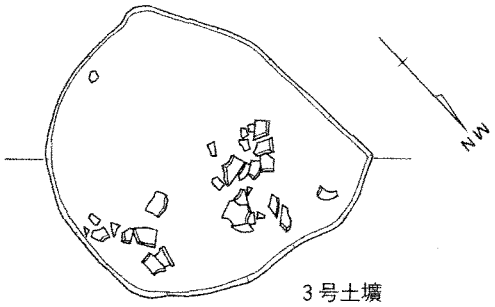


1 a 灰褐色粘質土層（Hue7.5YR4／2）
（D区南壁8aと同じ）
1 b 暗灰黄褐色粘質土層（Hue2.5YR4／2）
（D区南壁8bと同じ）
2 黄褐色粘質土層（Hue2.5YR5／3）
3 灰黄褐色粘質土層（Hue10YR4／2）
4 灰オリーブ色粘質土層（Hue5 Y 4／2）
5 にぶい黄褐色粘質土層（Hue10YR4／3）
（D区南壁11と同じ）
6 黄褐色礫層（Hue10YR5／8）（河底）
7 地山（岩盤・上面に薄く砂）

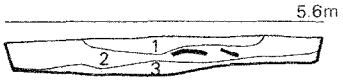
0 2m

第15図 濠・溝・集石遺構土層図（1/20，1/40）

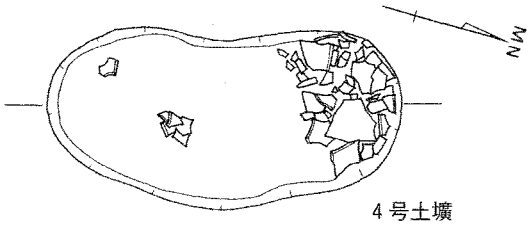
第16図　1号溝・2号溝遺物出土状況（1/40）



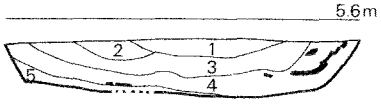
3号土壙



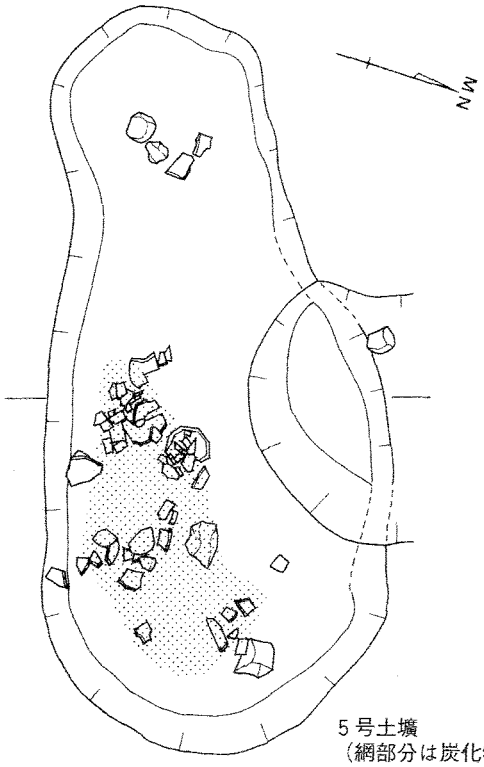
1 炭化物混灰黄褐色土層（Hue10YR4／2）
2 炭化物混暗灰黄褐色土層（Hue10YR5／2）
3 にぶい黄褐色土層（Hue10YR5／4）



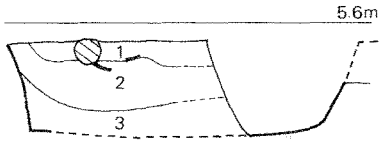
4号土壙



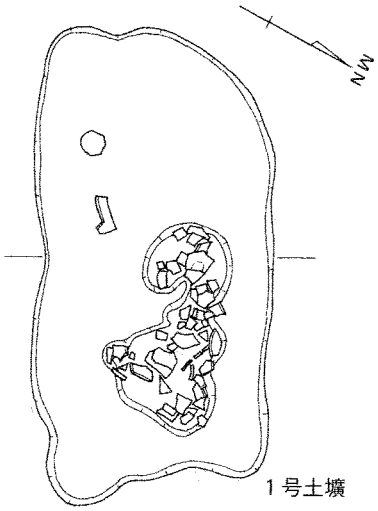
1 暗灰黄褐色土層（Hue10YR6／2）
2 灰黄褐色土層（Hue10YR5／2）
3 炭化物混暗褐色土層（Hue10YR3／3）
4 炭化物混黒褐色土層（Hue10YR3／2）
5 にぶい黒褐色土層（Hue10YR5／4）



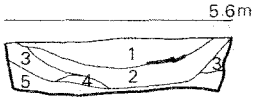
5号土壙
（網部分は炭化物）



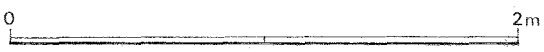
1 灰黄褐色土層（Hue10YR5／2）
2 炭化物混褐灰色土層（Hue10YR5／1）
3 炭化物混灰黄褐色土層（Hue10YR4／2）



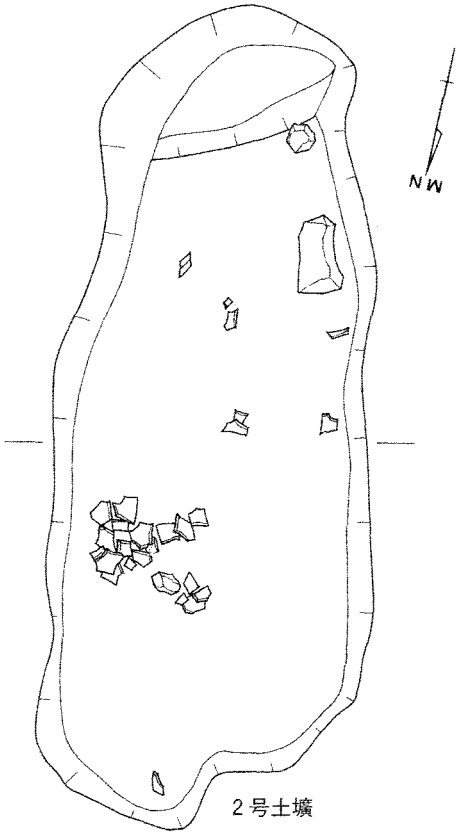
1号土壙

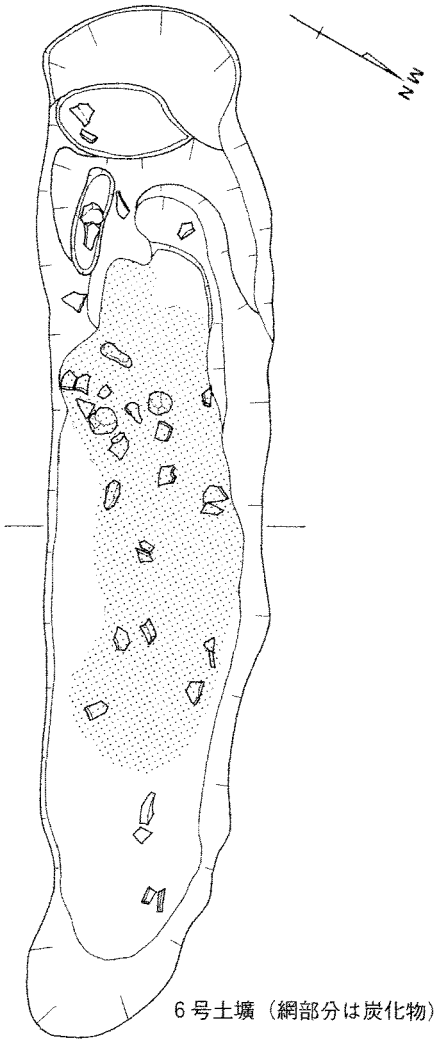


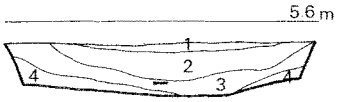
1 炭化物混褐灰色土層（Hue10YR5／1）
2 炭化物混灰黄褐色土層（Hue10YR5／2）
3 炭化物混にぶい黄褐色土層（Hue10YR5／3）
4 炭化物混にぶい黄橙色土層（Hue10YR6／4）
5 にぶい黄褐色土層（Hue10YR5／4）



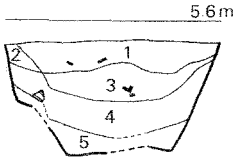
第17図　1号・3号・4号・5号土壙実測図・土層図（1/30）







1 灰黄褐色土層（Hue10YR6／2）
2 炭化物混暗褐色土層（Hue10YR3／3）
3 炭化物混黒褐色土層（Hue10YR3／2）
4 にぶい黄褐色土層（Hue10YR5／4）



1 にぶい黄橙色土層（Hue10YR5／4）
2 にぶい黄褐色土層（Hue10YR4／3）
3 炭化物混にぶい黄橙色土層（Hue10YR7／4）
4 炭化物混灰黄褐色土層（Hue10YR6／2）
5 にぶい黄褐色土層（Hue10YR5／4）

第18図　2号・6号土壙実測図・土層図（1/30）

まることも確認した。遺跡北西部の微高地においては，平成10年度特定調査により弥生後期の濠が５条確認されている。内４条はその時の調査区からはじまり，または調査区内におさまるものであった。すべてが互いに交わることなく独立したものである。この微高地が北西方面から中央の台地に至る遺跡の入り口として防御的に重要な場所にあたり，これら濠群は「虎口」的な機能を担っていたと考えられる。さらには農業用水等に利用するために雨水や，最下部が切り込んでいる縄文時代の泥炭質層からの湧水をためたものと考えられる。

(3) 溝（第15図・第16図）

溝は２条検出した。１号溝はＡ区で検出した。Ａ区中央のやや西から北東に向かって走る。Ａ区の東側の隣接地は平成10年度特定調査Ｂ区であるが，この辺りで溝は確認しておらず，土壙の一部と考えていたものに繋がって止まる。何らかの区画溝的役割をもつものと考えられる。最大幅約1.7m，深さ約20cmを測り，約８ｍを確認した。弥生中期後半の須玖Ⅱ式を主体とする資料が出土したが，出土土器の内丹塗土器の占める割合が高かった。

２号溝はＢ区で検出した。平成10年度特定調査Ｂ区・Ｄ区で確認した５号溝に繋がるものである。今年度の国庫補助事業範囲確認調査Ｉ区でも確認している。最大幅約1.8m，深さ約20cmを測り，約３ｍを確認した。生活・農業用の用排水路と考えられる。弥生前期末の板付Ⅱｂ式～弥生中期初頭の城ノ越式を主体とする資料が出土した。

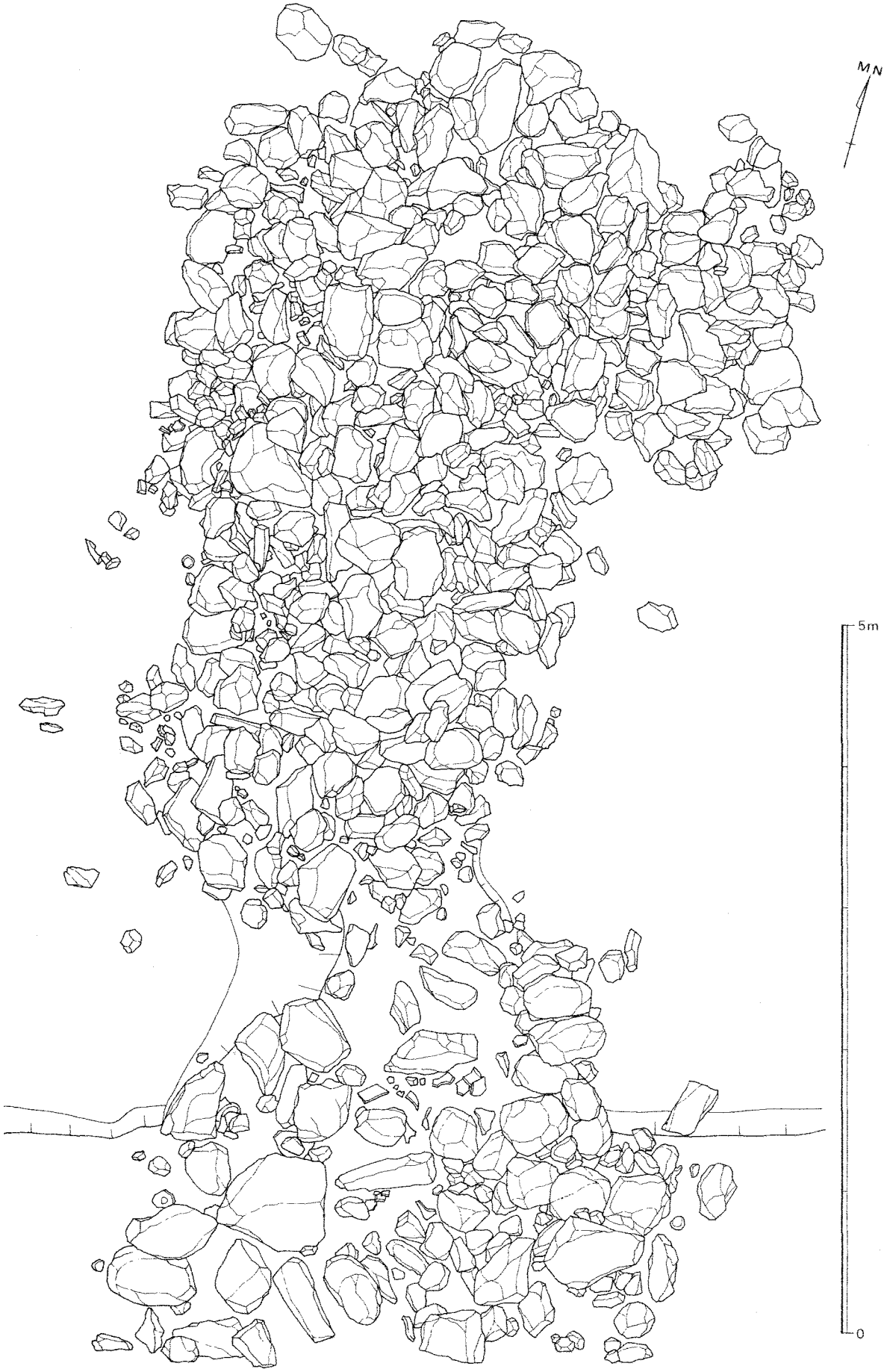
(4) 土　壙（第17図・第18図）

今回の調査地区においては多数の土壙を確認した。ここでは実測図を掲載したものに限って報告する。いずれもＢ区から検出したもので，弥生中期後半の須玖Ⅱ式土器を出土土器の主体とする。

１号土壙は，長径約1.7m，短径約0.9m，深さ約20cmである。２号土壙は，長径約3.2m，短径約1.2m，深さ約20cmである。３号土壙は，長径約1.2m，短径約1.1m，深さ約15cmである。４号土壙は，長径約1.4m，短径約0.6m，深さ約25cmである。５号土壙は，長径約3.0m，短径約1.4m，深さ約35cmである。６号土壙は，長径約4.1m，短径約0.9m，深さ約45cmである。

(5) 土器溜

Ｆ区の１号旧河道西側にある微高地縁の，１号旧河道に向かう傾斜地で確認した。平成11年度特定調査Ｅ区で確認したものに繋がるものである。今回の調査では完掘しなかったが，Ⅰ～Ⅶ層にわたって出土遺物を取り上げた。その結果，Ⅰ～Ⅵ層がそれぞれ弥生中期～弥生後期の資料を包含していることが判明した。これは，この土器溜が時間的推移のもとで形成された一次的なものではなく，別に形成されていた一次的なものが数度にわたり崩されて層位をなした二次的なものであることを示していると考えられる。しかしながら今回この土器溜を調査した中での最下層にあたるⅦ層の出土土器は，弥生中期前葉～弥生中期後半の資料である。Ⅰ～Ⅵ層に比べると古い段階でのまとまりがある。下層



第19図　1号旧河道集石遺構実測図（1/40）

NO	長さ（㎜）	幅（㎜）	厚さ（㎜）	重さ（g）
1	43.3	33.8	25.1	52.4
2	39.9	27.5	26.7	40.9
3	45.7	37.0	24.0	60.5
4	42.8	31.5	21.5	45.6
5	39.0	33.9	24.2	42.6
6	47.7	27.2	24.1	48.8
7	37.9	30.3	18.4	35.6
8	42.6	35.2	25.0	52.9
9	37.1	34.9	23.6	48.5
10	61.1	30.4	20.4	57.2
11	35.7	30.6	26.4	34.1
12	43.1	32.8	22.1	46.4
13	52.9	27.4	19.0	41.9
14	42.4	27.5	21.6	36.5
15	45.2	26.0	20.7	35.4
16	39.9	27.7	16.8	28.9
17	41.9	22.9	23.5	28.9
18	43.9	21.8	19.5	30.8
19	47.6	31.8	17.8	40.8
20	40.2	31.9	20.1	37.5
21	42.9	30.3	25.0	43.3
22	36.5	29.1	21.0	33.6
23	44.0	27.5	21.2	39.5
24	35.8	31.4	23.5	36.1
25	47.8	25.8	26.9	49.0
26	41.7	31.4	21.0	42.3
27	37.4	34.0	26.2	45.3
28	40.9	35.7	24.9	53.2
29	35.4	29.6	25.9	36.6
30	43.6	30.7	26.3	49.4
31	34.5	28.7	21.3	33.4
32	35.7	31.6	20.3	34.7
33	37.9	26.3	17.3	28.4
34	38.0	34.1	22.2	42.9
35	39.2	24.7	21.5	29.4
37	49.8	31.6	23.4	53.2
38	48.8	29.4	23.7	53.0
39	41.4	35.7	27.5	56.0
40	38.2	31.3	18.7	34.1
41	43.4	29.5	21.8	40.9
42	39.8	31.7	24.7	41.9
43	38.2	26.6	19.9	28.5
44	56.8	27.8	20.8	46.1
45	38.4	32.9	25.3	37.8
46	38.1	33.1	33.2	56.5
47	39.6	29.2	20.7	35.1
48	32.8	30.3	23.2	32.1
49	40.3	28.6	22.6	38.5
50	33.3	28.5	24.9	33.0
51	50.0	31.6	26.5	58.3
52	47.4	28.5	23.3	48.4
53	42.4	25.2	18.2	31.6
54	43.1	27.9	21.7	41.2
55	40.2	35.6	26.5	45.9

※NO36は破損しているため削除

個別測定値

重さ（g）	個数
60～	1
50.0～59.9	9
40.0～49.9	21
30.0～39.9	19
20.0～29.9	5

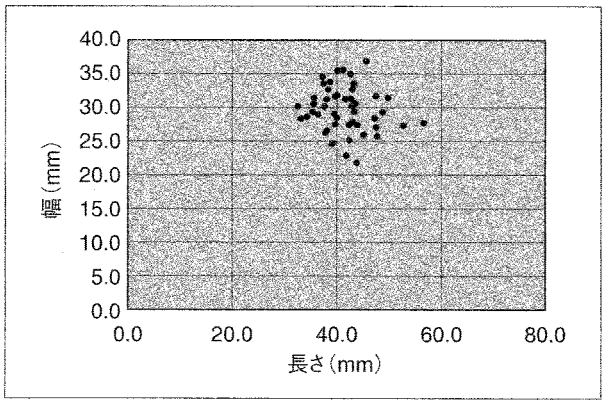
重さ別度数分布

（㎜）	長さ（個）	幅（個）	厚さ（個）
60.0～	1		
50.0～59.9	3		
40.0～49.9	27		
30.0～39.9	23	29	1
20.0～29.9		25	44
10.0～19.9			9

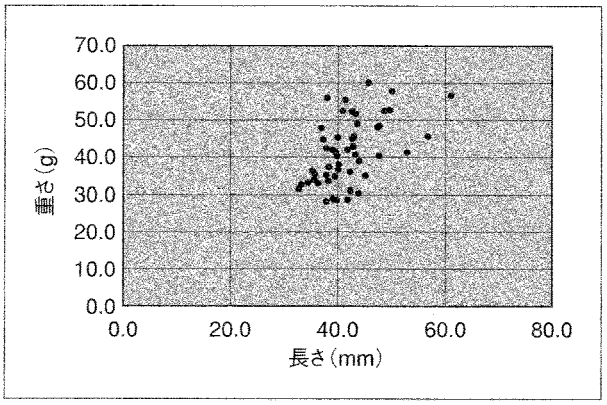
長さ・幅・厚さ別度数分布

	長さ（㎜）	幅（㎜）	厚さ（㎜）	重さ（g）
最大値	61.1	37.0	33.2	60.5
最小値	32.8	15.7	16.0	14.8
平均値	41.9	30.1	22.8	43.2

最大・最小・平均値



長さ・幅相関



長さ・重さ相関

第２表　Pit１内出土小礫分析

部においては一次的な姿を留めている可能性もあるが，詳細については今後の検討課題である。また，平成11年度の調査においてこの土器溜からは，３枚もの貨泉（内１枚は壺内に納められる）や楽浪系の馬車具，卜骨等が出土しているため，近くに祭儀的な施設の存在が考えられたが，土器溜西側の地山は後世の削平をうけ遺構の確認はできなかった。

(6) 集石遺構（第15図・第19図）

Ｄ区１号旧河道内で，人為的に石が集められた遺構を確認した。石の大半が角の取れた人頭大の円礫である。現地指導をうけた鎌田泰彦氏によると，壱岐島内の河川はどれも短く，しかも地形の関係で急流がないのでこのような礫が形成される可能性は低い。どこかの海岸からもってきたものと考えられる。また，礫のなかには明らかに壱岐島外のものである花崗岩系のものも３点確認したので，これらは北部九州から朝鮮半島まで含めた範囲の場所からもちこまれたものと考えられる。詳細な岩石鑑定による産地の特定が待たれる。集石内からの出土遺物から弥生中期後半の遺構と考えられるが，集石の目的については不明である。なお，遺構の南西部分は弥生後期の堆積層に覆われる。

(7) その他（第２表）

Ｂ区のほぼ中央，１号濠の西岸付近で繭大の小円礫を集めたPitを確認した（Pit１）。遺構自体は破壊をうけてわずかに残る底部以外は形を留めていない。確認した礫は55個にのぼる。長さ32.8～61.1㎜，幅15.7～37.0㎜，厚さ16.0～33.2㎜，重さ14.8～60.5ｇである。表も示しているように重さのばらつきは大きいが，大きさはある程度まとまっている傾向にある。投弾用として集められた可能性が考えられる。時期については，それを示す遺物が確認できなかったのではっきりしたことは判らないが，層位的にみて弥生中期～後期のものと考えられる。

また，Ｂ区を中心に多くの柱穴状小穴を確認した。これまでの調査からもＢ区とその周辺地区は，石器工房等を併設する弥生前期末～中期末にかけての居住域とみられ，これらの小穴は簡易な掘立柱建物の柱穴と考えられる。河道に囲まれた「輪中」的立地により竪穴住居は困難だったと考えられるからである。また，河道を挟んで隣接する北西側の微高地には，同じ時期に朝鮮半島系の人々の集住域と考えられる場所があり[註3]，南西にはやはり河道を挟んで弥生中期の船着き場があるため，この地区に建てられた多くの簡易な掘立柱建物では，渡来した人々との民間レベルでの交渉・交易が行われた可能性も考えられる。この地区からは，前漢時代の五銖銭と三翼鏃，朝鮮系無文土器，楽浪系土器等の大陸や朝鮮半島からもたらされた遺物が数多く出土している。

註１　長崎県教育委員会1999『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第16集　参照
註２　長崎県教育委員会2000『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第19集　参照
註３　長崎県教育委員会1998『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第９集　参照

3．遺　　物

今回の調査では，コンテナ209箱分77,826点の遺物が出土した。その数量的な内訳は，土器・陶磁器76,190点，石器・石製品1,219点，金属製品３点，木製品２点，骨角製品１点，装飾品３点である。出土遺物の大半を占める土器・陶磁器から説明を行う。

(1) 土器・陶磁器

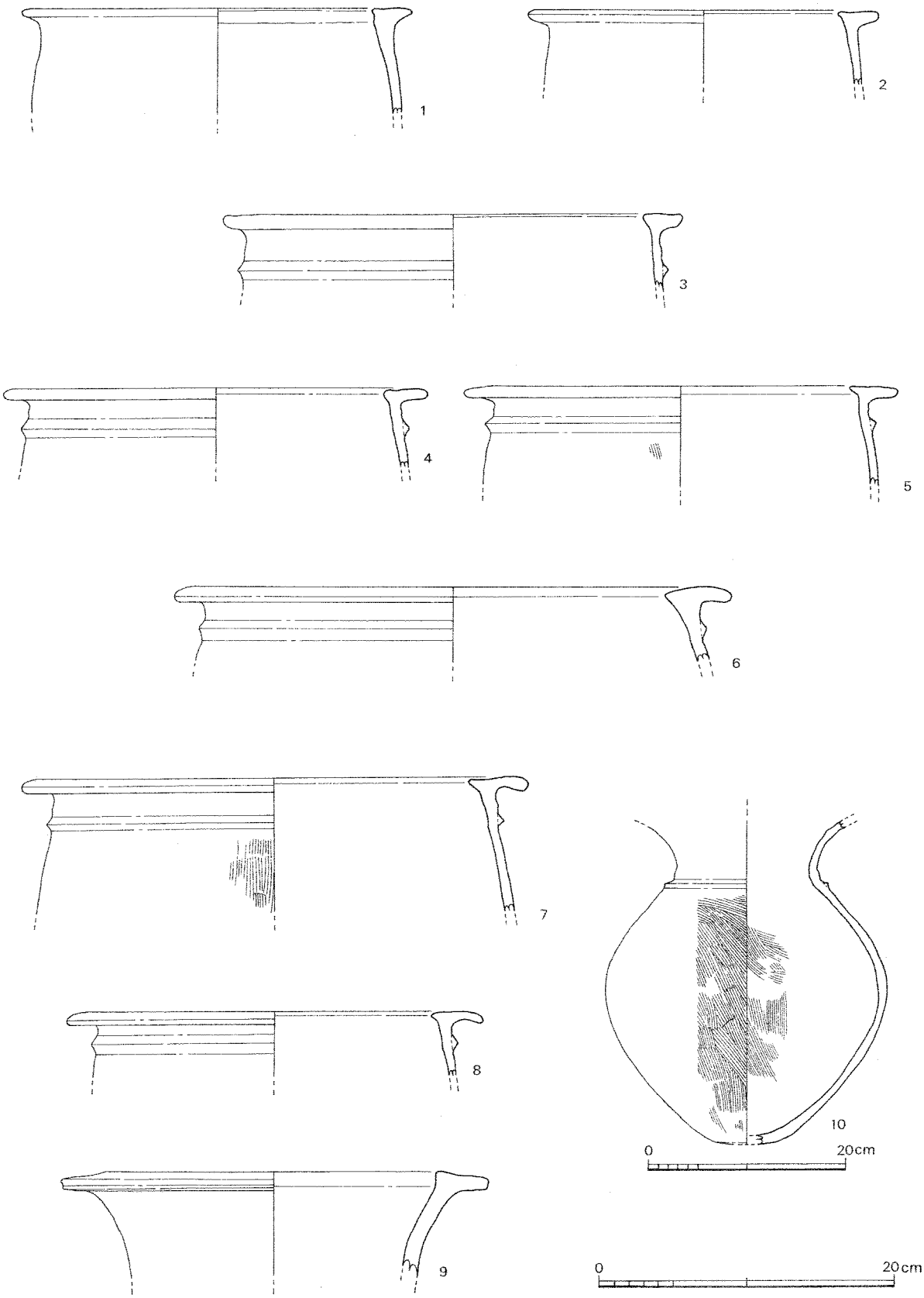
①Ｄ区１号旧河道Ｖ層出土土器（第20図・第21図）

１～８は逆Ｌ字形および鋤先形口縁の甕である。３～８は胴上半に断面三角形の突帯をもつ。７は外面にハケメ調整を行う。色調は１が橙色，２がにぶい赤褐色，３・５がにぶい褐色,4が褐色,6が明褐灰色，７・８がにぶい橙色である。胎土にはいずれも石英・長石・金雲母を含む。須玖Ⅰ式古段階～須玖Ⅱ式の資料である。９～13は壺である。９が鋤先形口縁の壺，11が丹塗の袋状口縁長頸壺,12が複合口縁の長頸壺，13が「く」字形に外反する口縁の丹塗無頸壺である。10と12は，頸胴界に断面三角形の突帯をつけ，内外面にハケメ調整を行う。11は外面には頸部にタテミガキ，口縁部にヨコミガキを施し，内面にしぼり痕がみられる。13は口縁上方に２個ずつ対の焼成前の穿孔がみられ，外面にヨコミガキを施す。色調は９がにぶい黄橙色，10が灰黄褐色，11が灰白色，12が明褐灰色，13が橙色である。胎土には９・11・12・13が石英・長石・金雲母を含み，10が石英・長石・金雲母・角閃石を含む。９・11・13が須玖Ⅱ式，10・12が弥生後期前半の資料であろうか。14・15は丹塗の蓋で，小さな孔が２個ずつ対にみられ，天井部には放射状にミガキが施されている。13のような無頸壺に使われたものであろう。14が灰白色，15が橙色の色調で，胎土にはともに石英・長石・金雲母を含む。16は椀形の丹塗鉢である。外面はヨコミガキされる。色調は明赤褐色で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。いずれも弥生中期後半の須玖Ⅱ式の資料である。17～19は丹塗の高坏である。17は鋤先形口縁をもつ。18・19は口縁部を欠く。17は胴上半に断面三角形の突帯をもつ。18は坏部外面にヨコミガキ，脚部外面にタテミガキ，19は脚部のみだが外面にタテミガキを施し，内面にはしぼり痕がみられる。色調は17・18がにぶい黄橙色，19が灰白色である。胎土はいずれも石英・長石・金雲母を含む。いずれも弥生中期後半の須玖Ⅱ式の資料であろう。

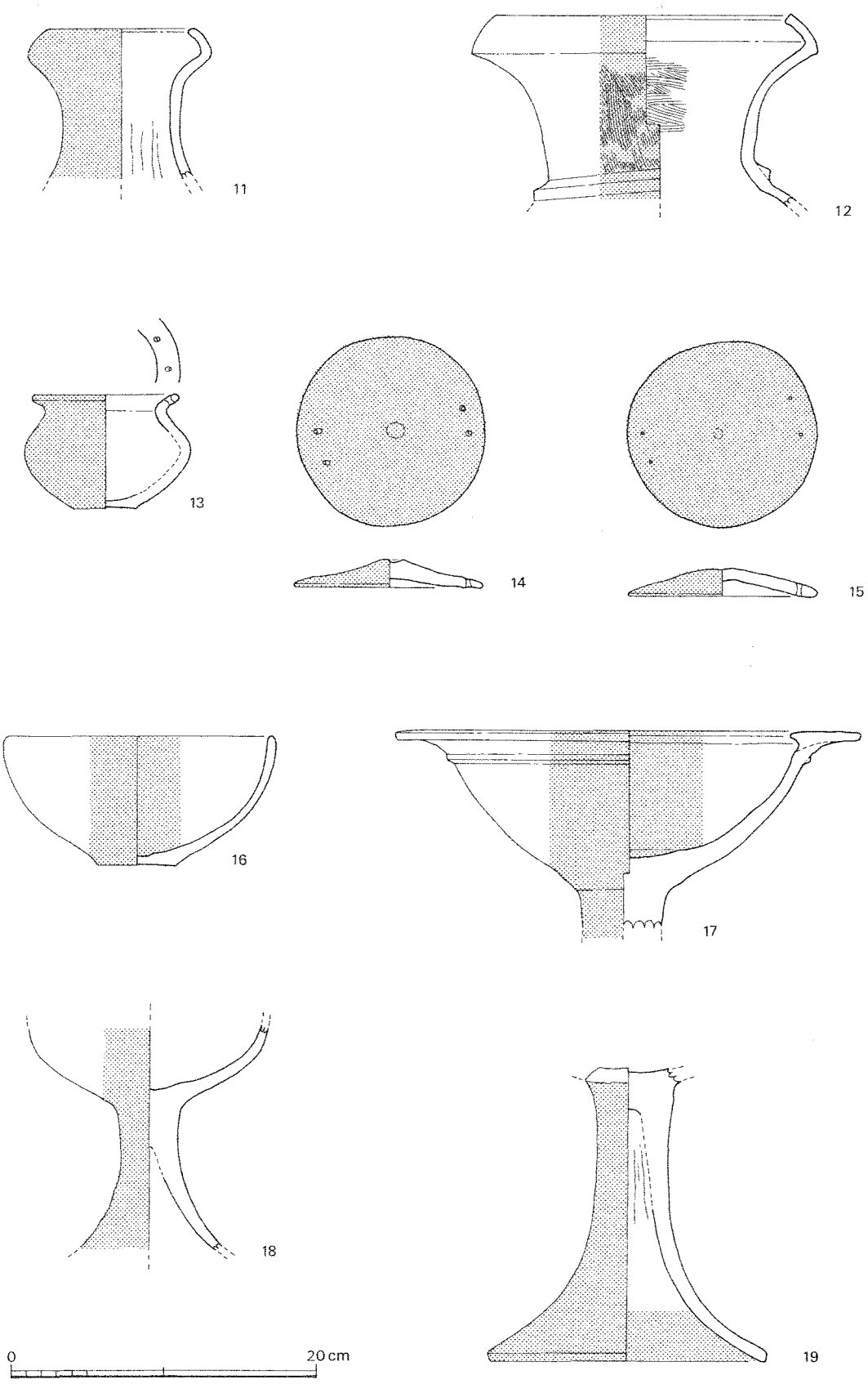
以上，Ｄ区１号旧河道Ｖ層出土土器は，弥生中期前葉の須玖Ⅰ式古段階～弥生後期前半までの様相をもつが，弥生後期前半の流路である可能性を示すものであろう。

②Ｄ区１号旧河道Ⅵ層出土土器（第22図）

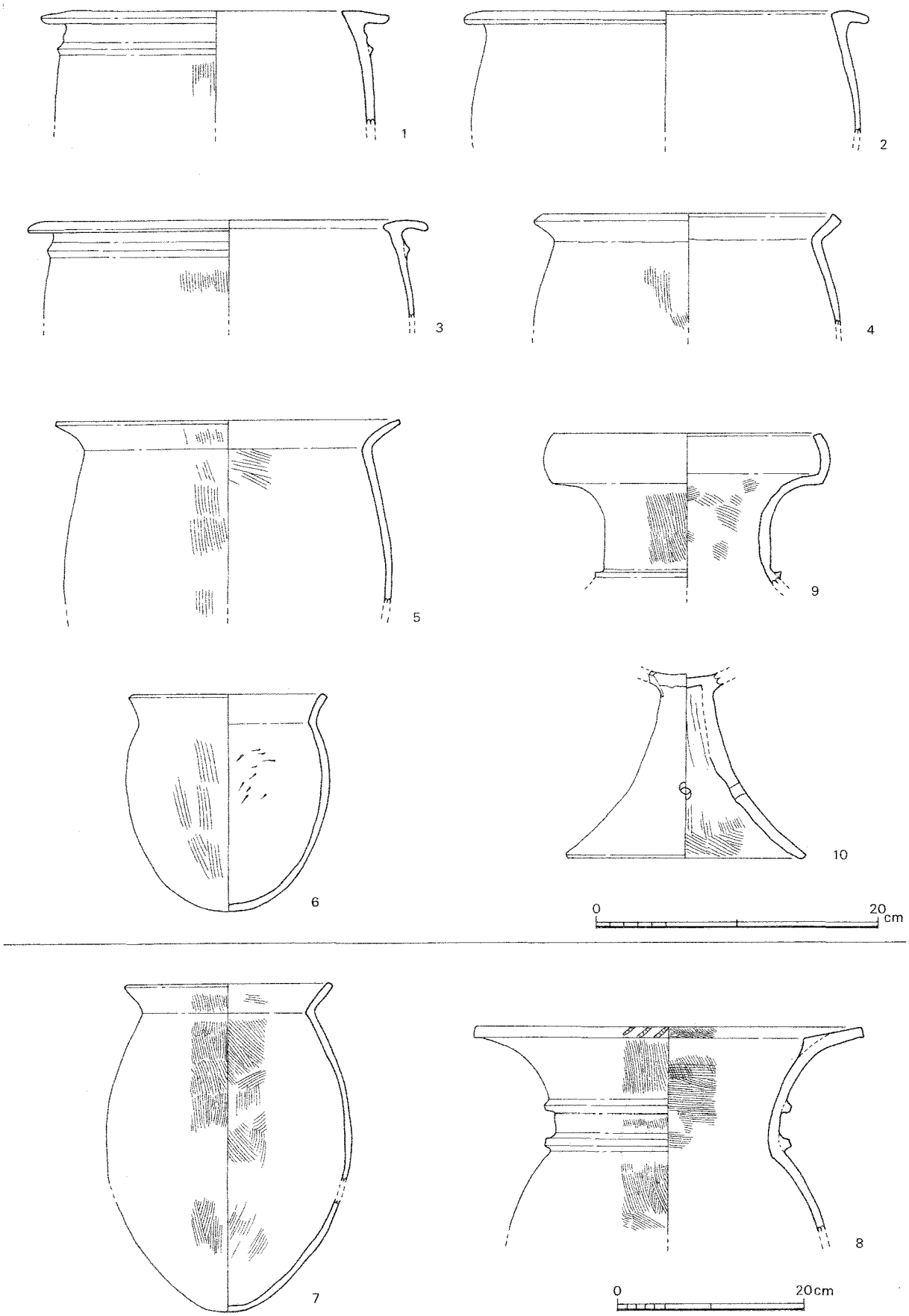
１～３は鋤先形口縁の甕である。１・３は胴上半に断面三角形の突帯をもち，外面はハケメをナデ消している。いずれも色調はにぶい橙色，胎土には石英・長石・金雲母を含み，須玖Ⅱ式の資料である。４は跳ね上げ口縁の甕である。外面にハケメ調整を行う。にぶい橙色の色調で，胎土には石英・長石・金雲母を含む。福岡平野以東の土器である。５～７は「く」字形口縁の在地系甕である。いずれも外面に，５・７は内面にもハケメ調整を行う。色調は５が灰褐色，６がにぶい褐色,7が褐灰色で



第20図　D区1号旧河道Ⅴ層出土土器①（1/4）

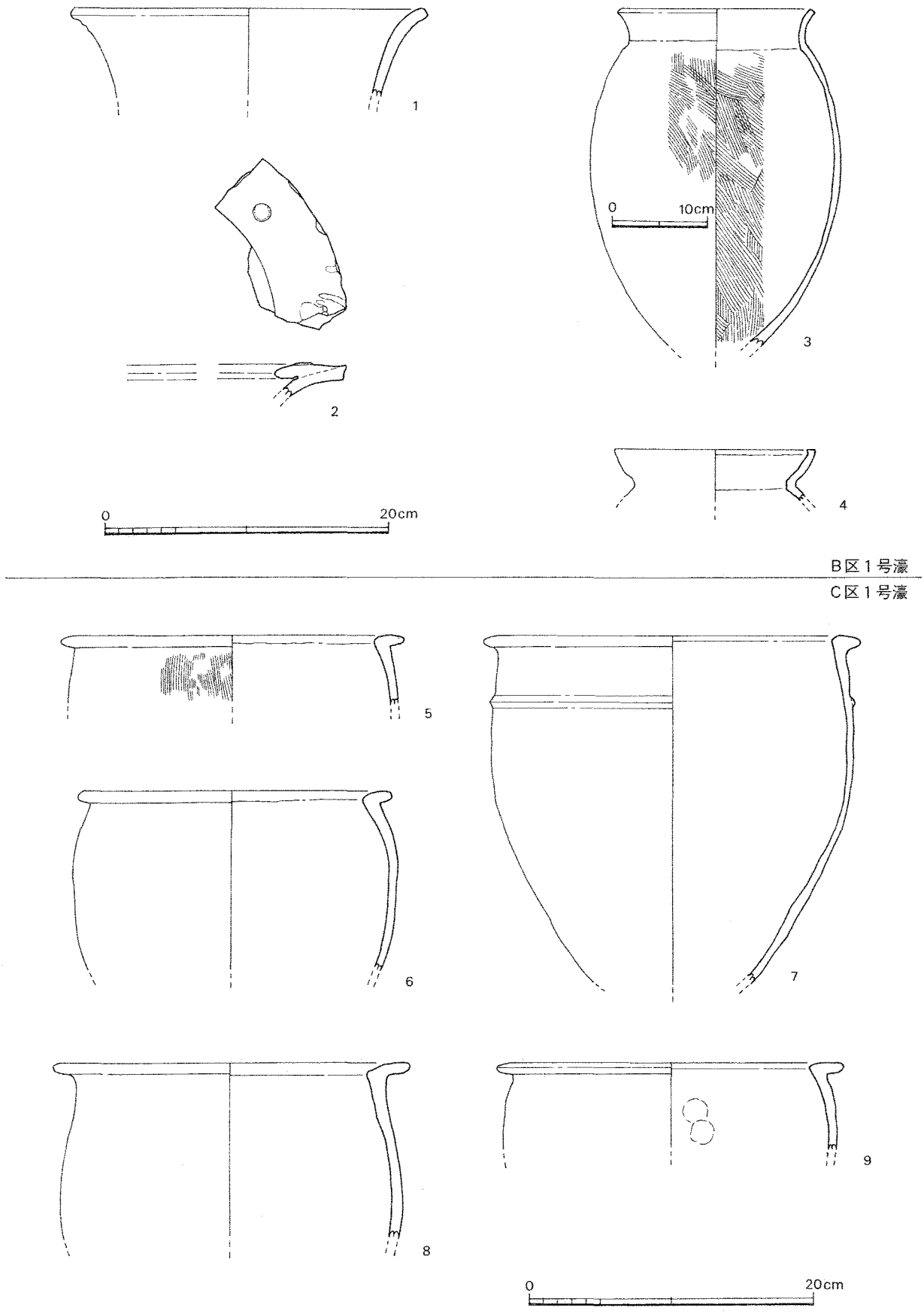


第21図　D区１号旧河道Ｖ層出土土器②（1/4）

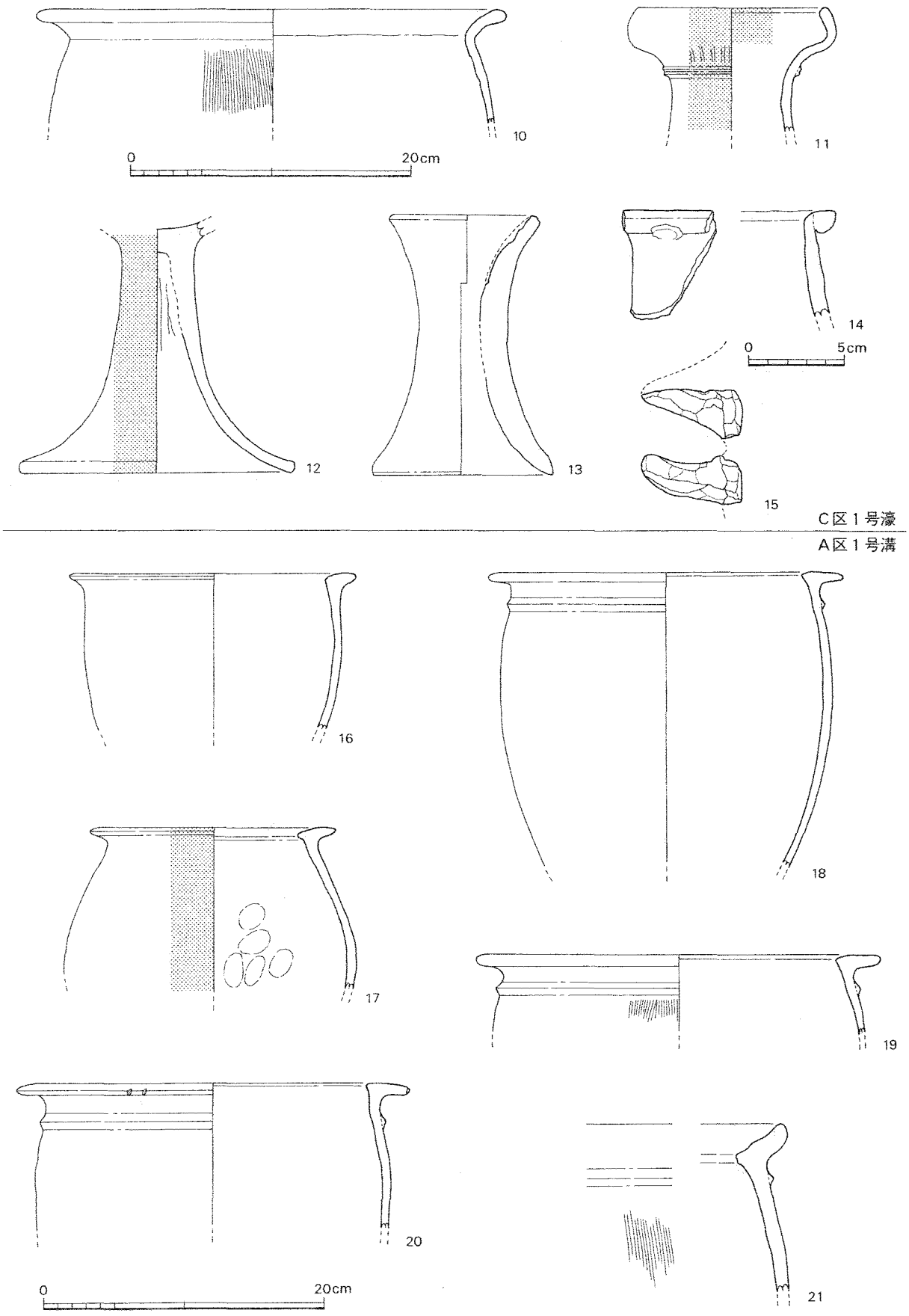


第22図　D区1号旧河道Ⅵ層出土土器（1/4，1/6）

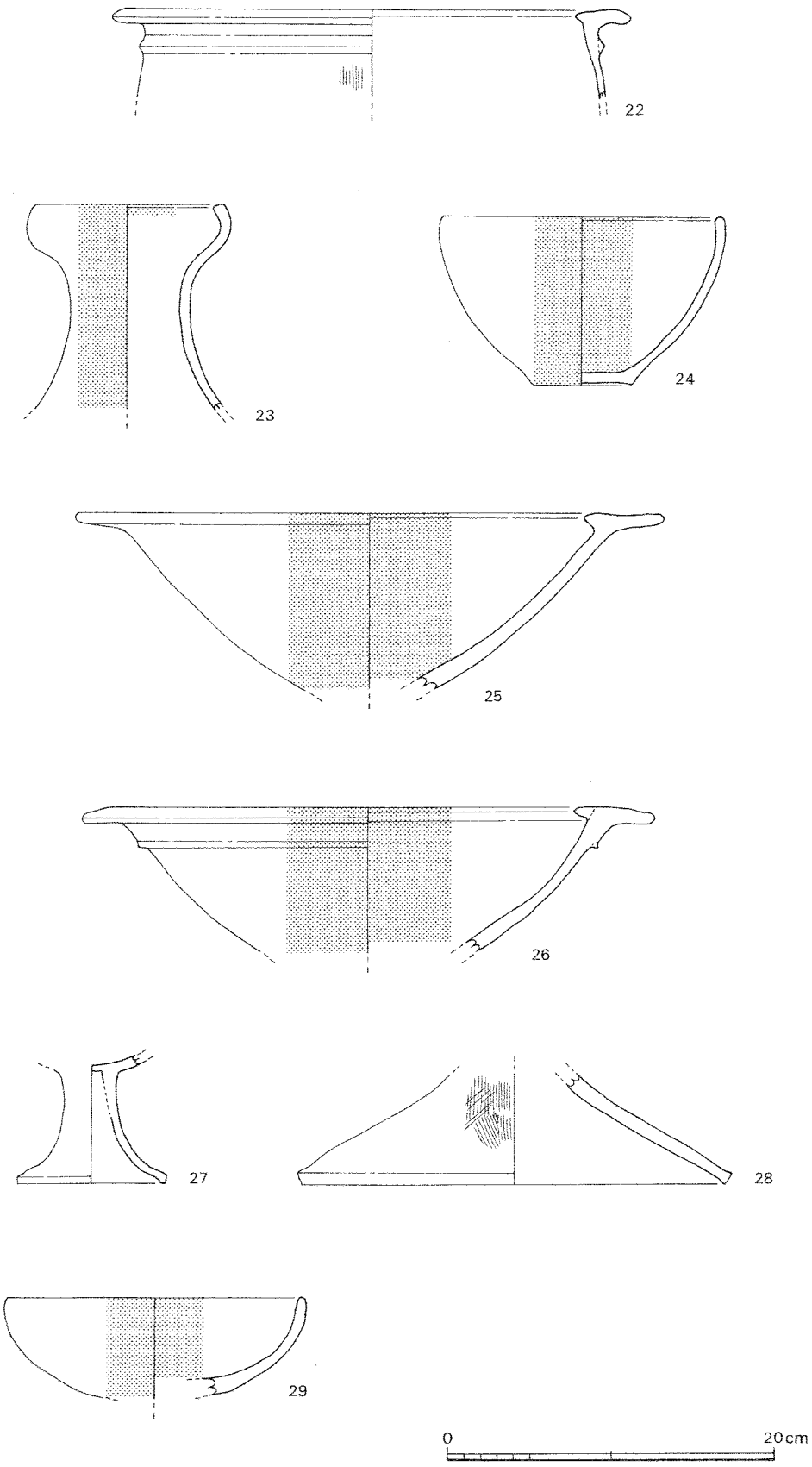
第23図　E区2号旧河道出土土器（1/4）



第24図　B区1号濠出土土器，C区1号濠出土土器①（1/4，1/6）



第25図　C区1号濠出土土器②，A区1号溝出土土器①（1/3，1/4）



第26図　A区1号溝出土土器②（1/4）

ある。胎土にはいずれも石英・長石・金雲母を含む。古墳時代前期初頭の資料であろう。Ⅵ層でも最上部から出土した。8は大きく開く口縁部の内面に突起を有する壺で，口縁端部に刻み目を施し，頸胴界に断面三角形の突帯をつける。9は複合口縁の壺で，頸胴界と頸部に断面台形の突帯をつける。ともに内外面にはハケメ調整を行い，胎土には石英・長石・金雲母を含む。8は明褐灰色，9はにぶい黄橙色の色調をもつ。いずれも弥生後期後半の資料であろう。10は高坏の脚部である。外面にタテミガキを施し，内面にはしぼり痕とハケメがみられる。色調はにぶい橙色で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。弥生後期前半の資料である。

以上，D区1号旧河道Ⅵ層出土土器は，弥生中期後半の須玖Ⅱ式～古墳時代前期初頭までの様相をもち，河道内の複雑な攪乱を示す。今後は採り上げドットマップにより時期別の流路のゾーニングが課題となる。

③E区2号旧河道出土土器（第23図）

1～3は断面三角形の口縁，4～7は逆L字形および鋤先形口縁の甕である。3・4・6・7は胴上半に断面三角形の突帯をもつ。3は口縁端部に刻み目を施す。2・4・5は外面にハケメ調整を行う。色調は1がにぶい褐色，2が灰赤色，3・7がにぶい黄褐色，4が褐灰色，5がにぶい橙色,6が灰黄褐色である。胎土は6が石英・長石，それ以外は石英・長石・金雲母を含む。1～3は城ノ越式，4～7は須玖Ⅰ式～須玖Ⅱ式の資料である。8は「く」字形口縁の甕である。外面はハケメをナデ消している。色調は灰黄褐色で，胎土には石英・長石・金雲母・角閃石を含む。弥生後期中葉の資料であろう。9・10は袋状口縁の丹塗長頸壺であるが,10は風化をうけ丹が残っていない。9は頸部にM字突帯をめぐらし，縦に細い暗文を施す。内面では頸部にしぼり痕がみられる。10は口縁下に断面三角形の突帯をもち，頸部内面にしぼり痕がみられる。色調は9がにぶい褐色，10が淡い橙色である。胎土には石英・長石・金雲母を含む。須玖Ⅱ式の資料である。11は鋤先形口縁の壺である。口縁端部に刻み目を施す。須玖Ⅰ式古段階の資料である。

以上，E区2号旧河道出土土器は，弥生中期初頭の城ノ越式～弥生後期中葉の資料である。

④B区1号濠出土土器（第24図）

1は朝顔形に開く広口壺である。にぶい橙色の色調で，胎土には石英・長石・金雲母を含む。須玖Ⅱ式の資料であろう。2は鋤先形口縁の壺である。口縁上面に円形浮文を張り付けている。色調は灰白色で，胎土には石英・長石・金雲母を含む。北部九州東部系の資料である。3は「く」字形口縁の甕である。内外面にハケメ調整を行う。灰黄褐色の色調で，胎土には石英・長石・赤色砂を含む。弥生後期後半の資料であろう。濠底から出土した。4は布留式甕である。色調は灰白色で，胎土に石英・金雲母を含む。Ⅳ層から出土した。柳田康雄氏編年[註1]のⅡb式に相当する資料であろう。

以上，B区1号濠出土土器は，弥生中期後半の須玖Ⅱ式～弥生後期後半の資料であるが，その出土状況から濠は弥生後期に掘られ，古墳時代前期には機能を失って埋没していったと考えられる。

⑤C区1号濠出土土器（第24図・第25図）

5・6・9は口縁が逆L字形に折れるが，口縁下方が巻き込むような処理をしてあり，朝鮮半島

系の擬無文土器の系譜をひく甕の可能性がある。5は外面にハケメ調整を行う。色調は5が灰黄色，6がにぶい褐色，9が灰黄褐色である。胎土は5が石英・長石・金雲母，6が石英・長石・金雲母・赤色砂，9が石英・長石を含む。7は断面三角形の口縁の甕である。胴上半に断面三角形の突帯をもつ。にぶい褐色の色調で，胎土には石英・長石を含む。城ノ越式の資料である。8は逆L字形口縁の甕である。色調は灰褐色で，胎土には石英・長石・金雲母を含む。須玖Ⅰ式の資料である。10は「く」字形口縁の甕である。外面にハケメ調整を行う。橙色の色調で，胎土は石英・長石・金雲母を含む。弥生後期前半の資料であろう。11は袋状口縁の丹塗長頸壺である。頸部にM字突帯をめぐらし，口縁下方に暗文が残る。色調は橙色で，胎土には石英・長石を含む。12は丹塗の高坏の脚部である。内面にしぼり痕がみられる。淡い黄橙色の色調で，胎土には石英・長石・金雲母を含む。13は器台である。色調はにぶい橙色で，胎土には石英・長石・金雲母を含む。14は朝鮮系無文土器壺である。丸い粘土紐口縁の甕で，一部指で抑えた痕跡がつく。外面は平滑に仕上げ，内面は横位にナデ仕上げしている。にぶい褐色の色調で，胎土には石英を含む。15は同じく無文土器の牛角把手付壺の把手である。色調はにぶい黄橙色で，胎土には石英・長石・金雲母を含む。

以上，C区1号濠出土土器は，弥生中期初頭の城ノ越式～弥生後期前半の資料であるが，遺物は覆土の上半からのみ出土しており，また隣接して城ノ越式や須玖Ⅱ式の資料をもつ遺構もあり，これらの土器は濠が埋没する過程で混入したものと考えられる。

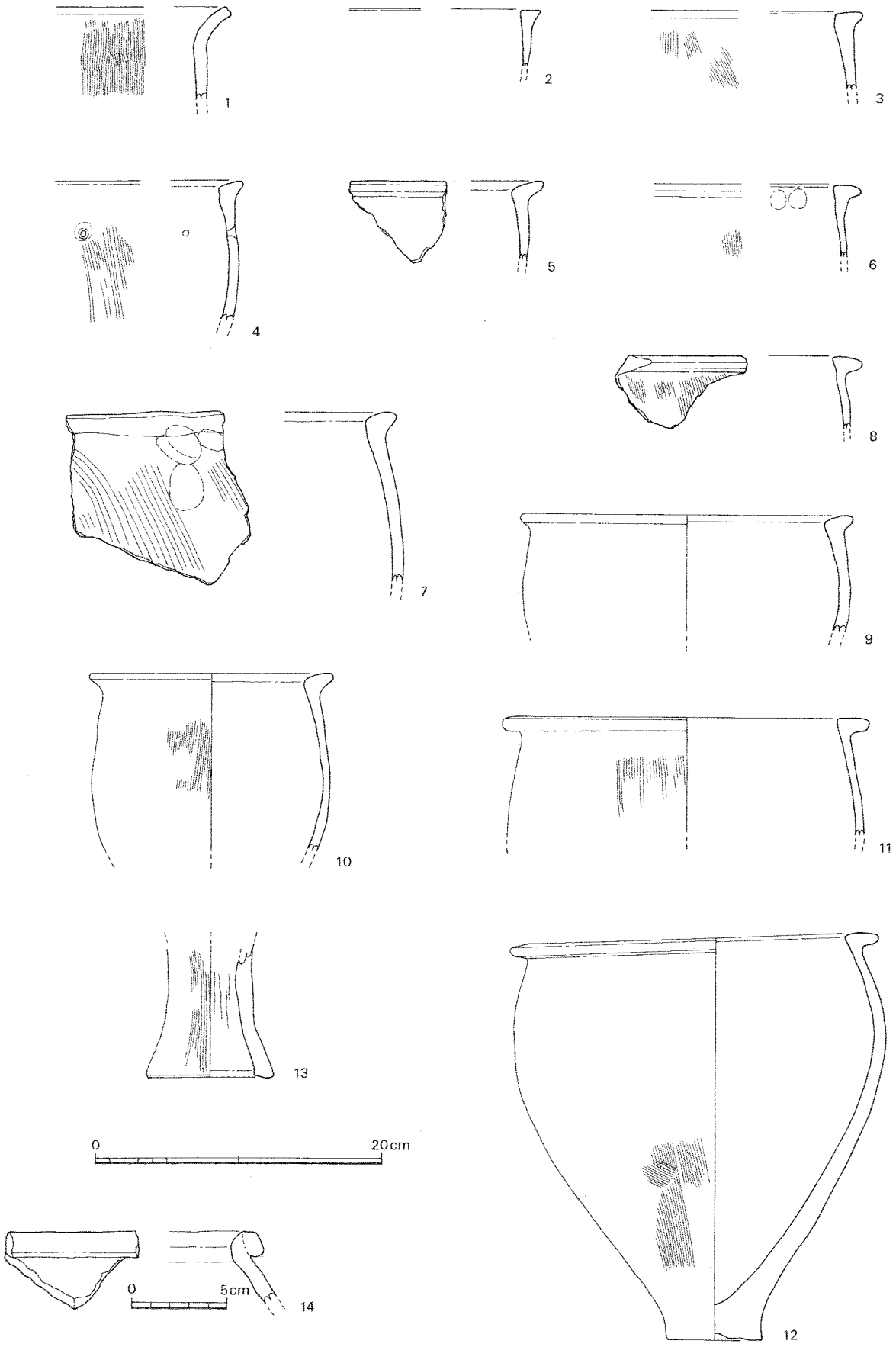
⑥A区1号溝出土土器（第25図・第26図）

16は断面三角形の口縁の，17～20・22は逆L字形および鋤先形口縁の，21は口縁が内湾する，それぞれ甕である。17は外面は丹塗でヨコミガキを施す。18～22は胴上半に断面三角形の突帯をもつ。20は口縁端部に2箇所刻み目を施す。19・21・22の外面にはわずかにハケメが残る。色調は16・17・20にぶい橙色で，18がにぶい黄橙色，19がにぶい赤褐色，21が橙色，22がにぶい褐色である。胎土には16が石英・長石，それ以外が石英・長石・金雲母を含む。16は城ノ越式，それ以外は須玖Ⅱ式の資料であろう。23は袋状口縁の丹塗長頸壺である。外面はミガキを施す。にぶい橙色の色調で，胎土には石英・長石を含む。24は椀形の丹塗鉢である。色調はにぶい黄橙色で，胎土には石英・長石・金雲母を含む。25・26は鋤先形口縁の丹塗高坏の坏部である。26は上半に断面三角形の突帯をもつ。25が淡い黄橙色で，26が灰黄褐色の色調である。胎土にはともに石英・長石・金雲母を含む。27・28は高坏の脚部である。27は外面はハケメをナデ消し，内面にはしぼり痕がみられる。28は外面にハケメ調整を行う。色調は27が橙色，28がにぶい橙色である。胎土にはともに石英・長石・金雲母を含む。29は浅い椀形をしている高坏の坏部と考えられる。にぶい橙色の色調で，胎土には石英・長石・金雲母を含む。23～29は須玖Ⅱ式の資料であろう。

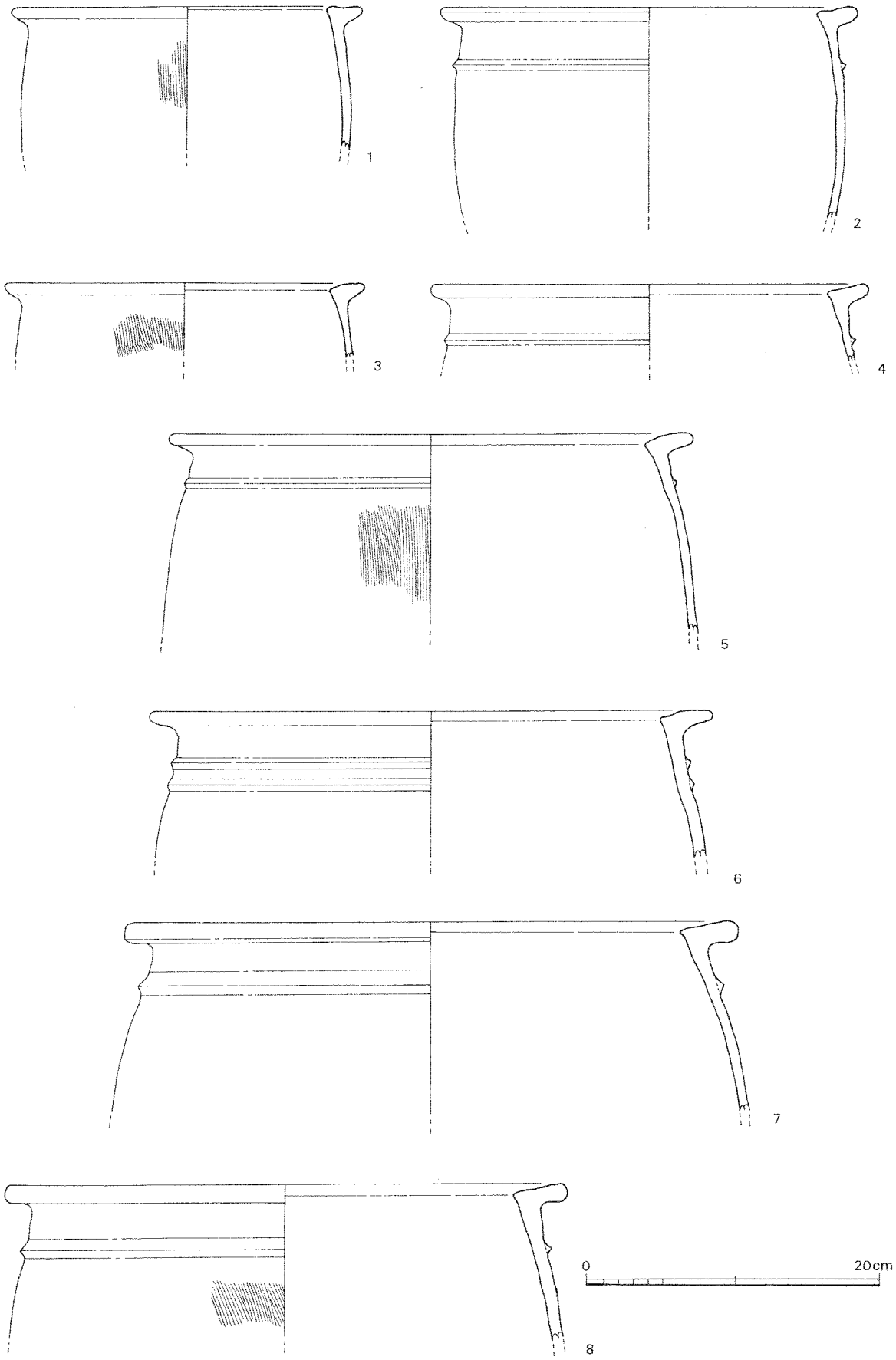
以上，A区1号溝出土土器は，弥生中期後半の須玖Ⅱ式を主体とする資料である。

⑦B区2号溝出土土器（第27図）

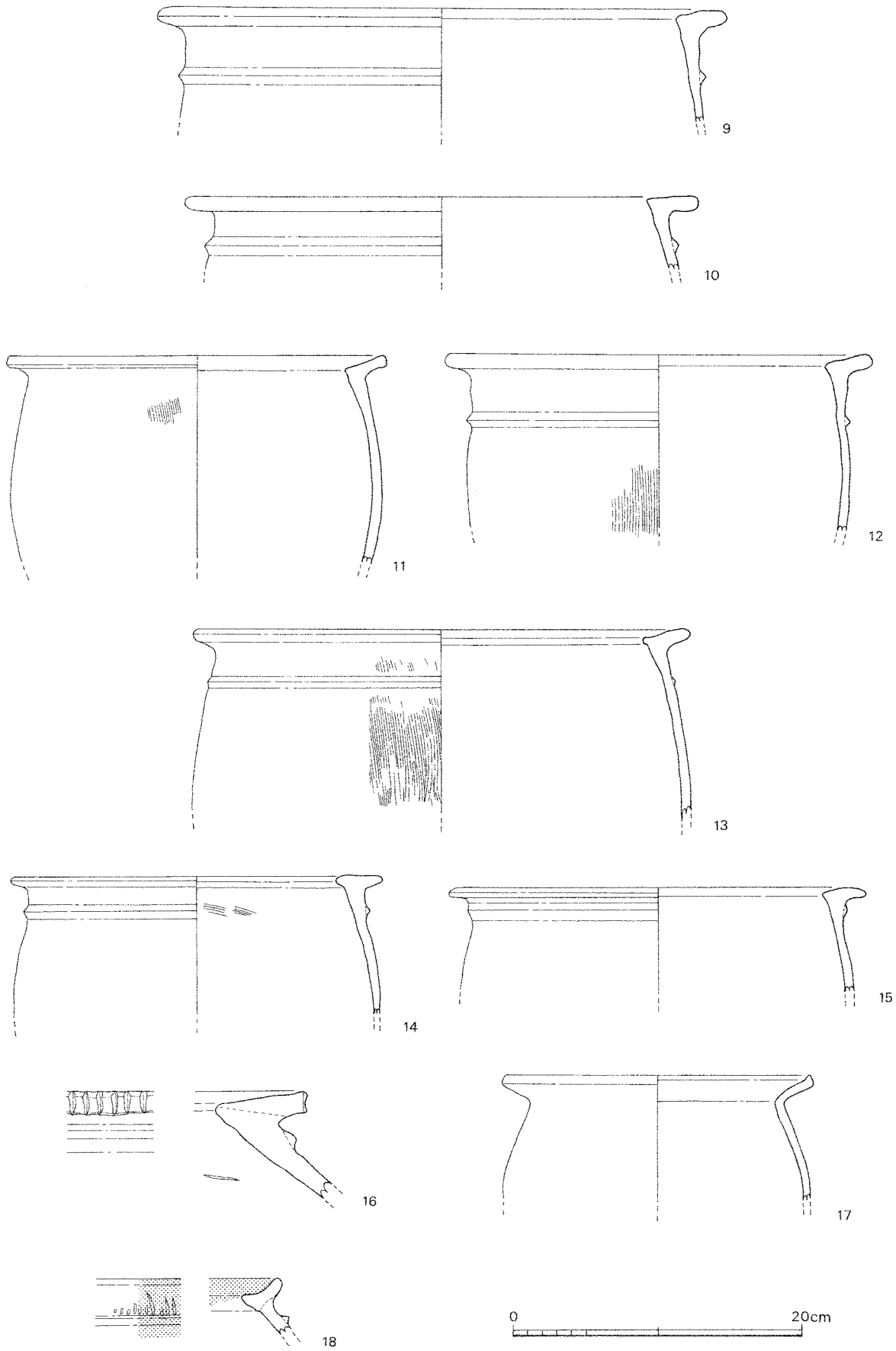
1は如意形口縁の甕である。外面にハケメ調整を行う。にぶい黄橙色の色調で，胎土には石英・長石・金雲母を含む。板付Ⅱb式の資料であろう。2～10は断面三角形の口縁の甕である。5・9を除



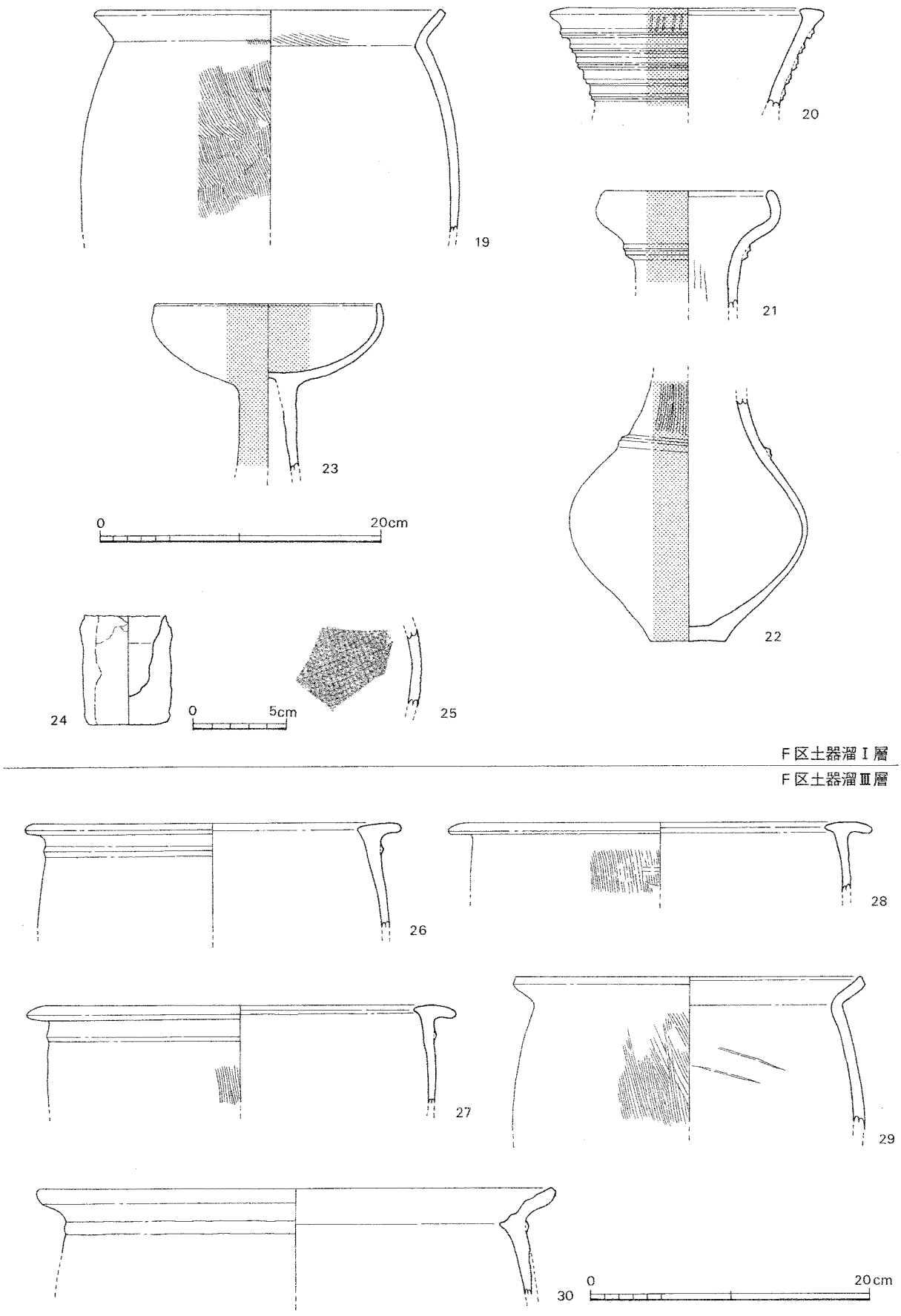
第27図　B区2号溝出土土器（1/3，1/4）



第28図　F区土器溜Ⅰ層出土土器①（1/4）



第29図　F区土器溜Ⅰ層出土土器②（1/4）



第30図　F区土器溜Ⅰ層出土土器③，F区土器溜Ⅲ層出土土器①（1/3，1/4）

き，外面にハケメ調整を行う。4は胴部に焼成後の穿孔がある。6の内面，7の外面には指圧痕が残る。色調は2が灰白色，3・9がにぶい黄橙色，4・7が灰黄褐色，5がにぶい黄褐色，6が褐灰色，8が橙色，10が黄灰色である。胎土には4が石英・金雲母，5が石英・長石・金雲母・角閃石，それ以外が石英・長石・金雲母を含む。いずれも城ノ越式の資料である。11・12は短い逆L字形の口縁の甕である。ともに外面にハケメ調整を行う。11がにぶい橙色，12が明褐灰色の色調で，胎土にはともに石英・長石・金雲母を含む。須玖Ⅰ式古段階の資料であろう。13は器台である。外面にハケメ調整を行う。にぶい黄橙色の色調で，胎土には石英・長石・金雲母を含む。14は朝鮮系無文土器の資料で，丸い粘土紐口縁の甕である。色調はにぶい黄橙色。胎土に石英・長石を含む。

以上，B区2号溝出土土器は，弥生前期末の板付Ⅱb式～弥生中期初頭の城ノ越式を主体とする資料である。

⑧F区土器溜Ⅰ層出土土器（第28図～第30図）

1～15は逆L字形および鋤先形口縁の甕である。1・3・5・8・11・12・13は外面に，14は内面にハケメ残る。2・4～10・12～15は胴上半に断面三角形の突帯をもつ。色調は1・6・8・14が橙色，2・7・9・12がにぶい褐色，3がにぶい橙色，4・13がにぶい赤褐色，5が褐灰色，10・11が灰褐色，15が明黄褐色である。胎土には1・3・6・15が石英・長石・金雲母，2・4・5・7・8・9・12・13・14が石英・長石・金雲母・角閃石，10・11が石英・長石・金雲母・赤色砂を含む。須玖Ⅰ式古段階～須玖Ⅱ式の資料であろう。16は逆L字形に近い口縁の甕棺破片である。口縁端部に刻み目を施し，口縁直下に断面三角形の突帯をもつ。にぶい黄橙色の色調で，石英・長石・金雲母を胎土に含む。立岩式の資料であろう。17は跳ね上げ口縁の甕である。外面はハケメをナデ消している。色調は橙色で，胎土に石英・長石を含む。福岡平野以東の土器である。18は口縁が内湾する丹塗の甕である。口縁下方に暗文を施す。断面三角形の突帯をもつ。にぶい黄橙色の色調で，胎土には石英・長石・金雲母・角閃石を含む。19は「く」字形口縁の甕である。内外面にハケメ調整を行う。色調はにぶい橙色で，胎土には石英・長石・金雲母・角閃石を含む。弥生後期前半の資料であろう。20は多条のM字突帯を施す丹塗壺である。口縁下方に暗文を施す。にぶい黄橙色の色調で，胎土には長石を多く含んでいる。北部九州東部地域系の資料と考えられる。21・22は袋状口縁の丹塗長頸壺である。21は口縁下に，22は頸胴界にM字突帯を施す。21は内面にしぼり痕がみられ，22は頸部にハケメが残る。色調は21がにぶい橙色，22が灰黄褐色である。胎土には21が石英・長石・金雲母・角閃石，22が石英・長石・金雲母を含む。23は浅い椀状の坏部をもつ丹塗高坏である。色調はにぶい橙色で，胎土には石英・長石・金雲母・角閃石を含む。24は朝鮮半島系の瓦質土器と考えられる。手づくねで，用途不明。黄灰色の色調で，胎土には角閃石を含む。25は三韓系瓦質土器壺片である。外面に格子目タタキを施し，褐灰色を呈する。

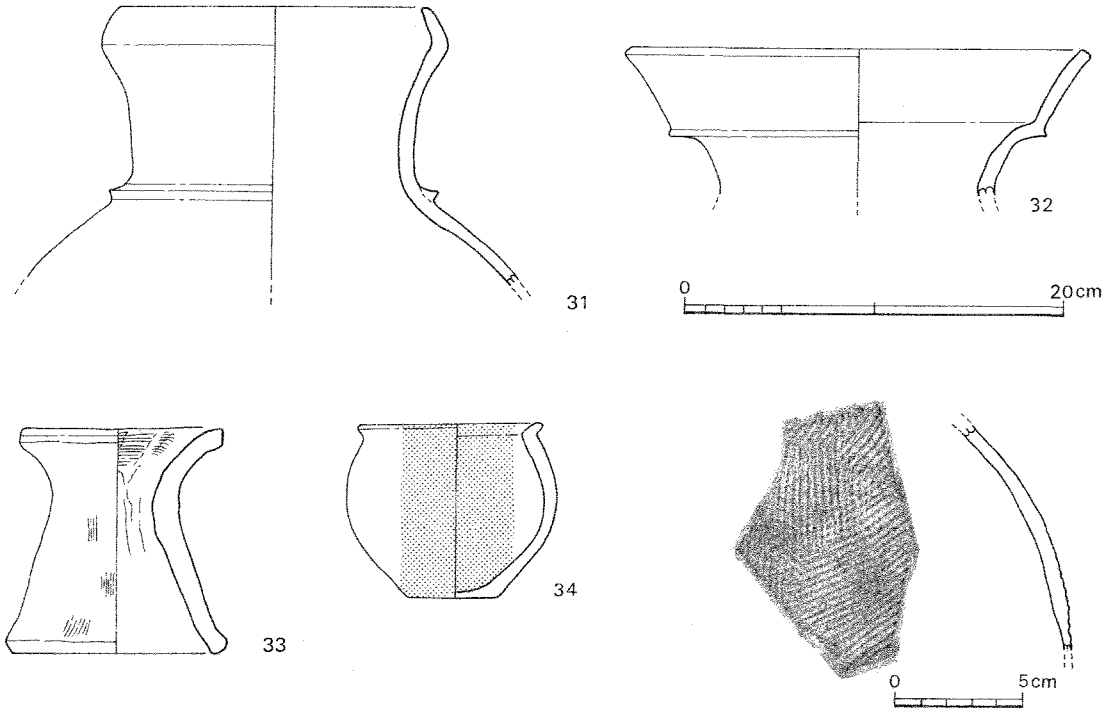
以上，F区土器溜Ⅰ層出土土器は，弥生中期前葉の須玖Ⅰ式古段階～弥生後期前半の資料である。

⑨F区土器溜Ⅲ層出土土器（第30図・第31図）

26～28は鋤先形口縁の甕である。26・27は胴部上端に断面三角形の突帯をもつ。26は外面のハケメ

をナデ消す。27・28は外面にハケメが残る。色調は26が灰褐色，27がにぶい黄橙色,28が灰黄色である。胎土には26・27が石英・長石・金雲母，28が石英・長石・金雲母・角閃石を含む。いずれも須玖Ⅱ式古段階の資料であろう。29は跳ね上げ口縁の甕である。外面にハケメ調整を行う。明褐灰色の色調で，石英・長石・金雲母を胎土に含む。福岡平野以東の土器である。30は逆L字形口縁の甕である。口縁はかなり立ち上がり，口縁直下に丸みを帯びた断面三角形の突帯をもつ。色調はにぶい橙色で，胎土には石英・長石・金雲母を含む。31は「く」字形に内反する口縁の複合口縁壺である。頸胴界に断面三角形の突帯をもつ。灰白色の色調で，胎土には石英・長石・金雲母を含む。弥生後期初頭の資料であろう。32は山陰系の二重口縁壺である。色調はにぶい黄褐色で，胎土には石英・長石・金雲母・角閃石を含む。33は器台である。外面はハケメをナデ消す。内面ではハケメとしぼり痕がみられる。明褐灰色の色調で，胎土には石英・長石を含む。34は広口の単口縁の丹塗小壺である。外面にはヨコミガキを施す。色調は橙色で，胎土には石英・長石・金雲母を含む。35は楽浪系瓦質土器壺片である。外面は縄蓆文タタキを施し，内面は当て具痕をナデ消す。褐灰色を呈する。

以上，F区土器溜Ⅲ層出土土器は，弥生中期中葉の須玖Ⅱ式古段階～弥生後期初頭を主体とする資料である。山陰系の二重口縁壺は，この層が弥生後期～古墳前期の河道に接しているため，混入したものと考えられる。



第31図　F区土器溜Ⅲ層出土土器②（1/3，1/4）

⑩F区土器溜Ⅳ層出土土器（第32図）

1～5は逆L字形および鋤先形口縁の甕である。3・5は胴部上端に断面三角形の突帯をもつ。1は外面のハケメをナデ消す。色調は1が褐灰色，2が赤橙色，3が灰白色，4がにぶい赤褐色,5が明褐色である。いすれも胎土には石英・長石・金雲母を含む。これらは須玖Ⅰ式古段階～須玖Ⅱ式新段階の資料であろう。6は口縁が内湾気味に立ち上がる口縁の甕である。胴部上端に断面三角形の突帯をもつ。外面にハケメ調整を行う。明褐灰色の色調で，胎土には石英・長石を含む。7・8は跳ね上げ口縁の甕である。7はハケメ調整を行う。色調は7が褐灰色で，8が橙色である。胎土にはともに石英・長石・金雲母を含む。福岡平野以東の土器である。9は口縁部が逆ハの字形に開く甕である。屈曲部に断面三角形の突帯をもつ。外面はハケメをナデ消す。明赤褐色の色調で，胎土には石英・長石・金雲母を含む。弥生後期初頭の資料であろう。10は瓢箪形の壺の胴部である。M字突帯とM字の下方の突起がより突き出たように変化したと思われる突帯が巡る。色調はにぶい橙色で，胎土には石英・長石・金雲母を含む。11は鋤先形口縁壺で，にぶい橙色の色調をもち，胎土には石英・長石・金雲母を含む。12は丹塗の高坏の脚部である。外面にタテミガキを施す。色調は黄橙色で，胎土には石英・長石・金雲母・角閃石を含む。

以上，F区土器溜Ⅳ層出土土器は，弥生中期前葉の須玖Ⅰ式古段階～弥生後期初頭の資料である。

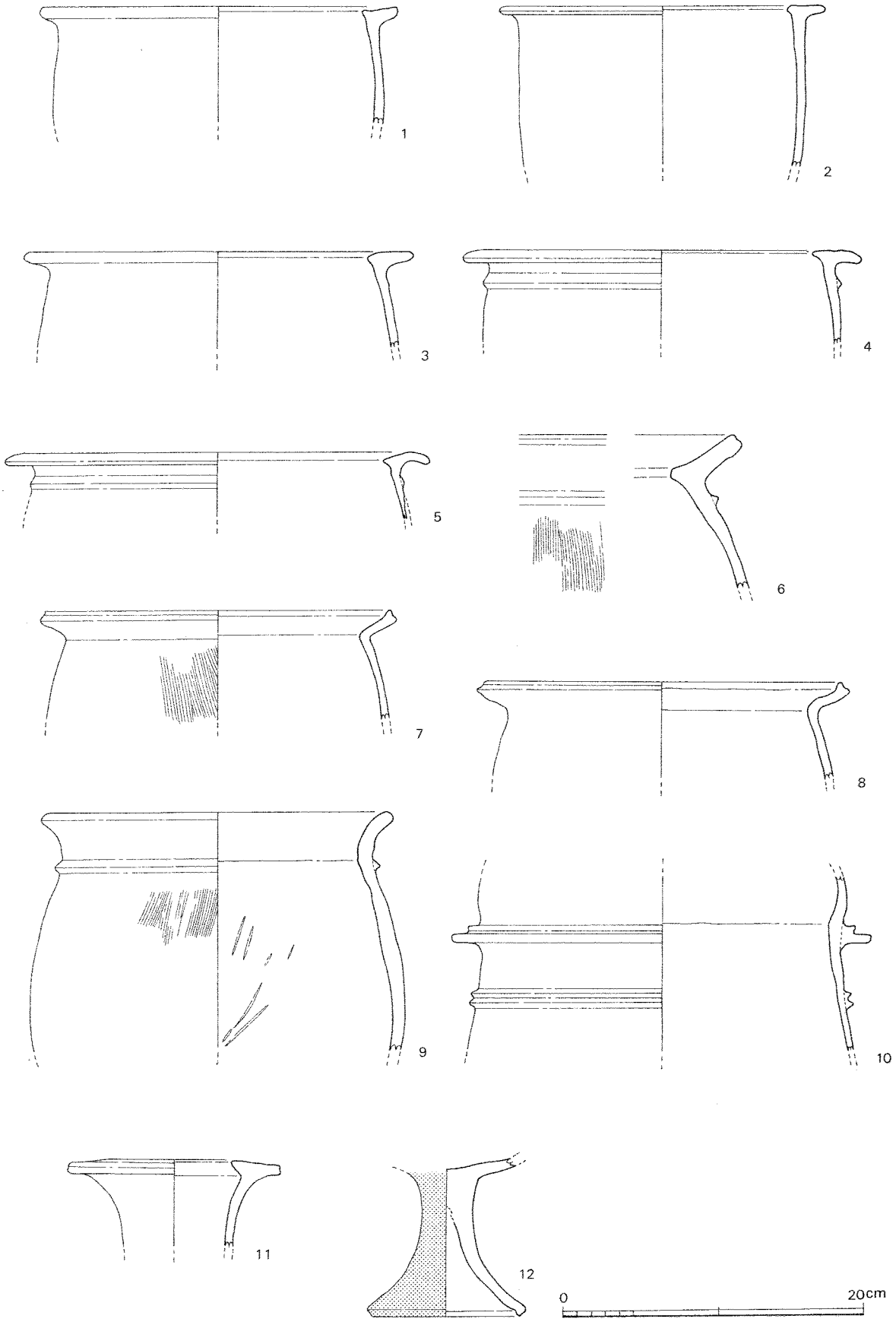
⑪F区土器溜Ⅴ層出土土器（第33図）

1～5は逆L字形および鋤先形口縁の甕である。5は胴部上半に断面三角形の突帯をもつ。1は外面のハケメをナデ消す。2・35は外面にハケメ調整を行う。色調は1が橙色，2が灰黄褐色，3が赤灰色，4がにぶい橙色，5が褐灰色である。胎土にはいずれも石英・長石・金雲母を含む。須玖Ⅰ式古段階～須玖Ⅱ式の資料である。6は「く」字形口縁の甕である。内外面ともにハケメ調整を行う。橙色の色調で，胎土には石英・長石・金雲母を含む。弥生後期後半の資料であろう。7は鋤先形口縁の壺である。口縁端部に刻み目を施し，頸胴界にM字突帯をもつ。頸部にヨコミガキを施す。浅黄色の色調で，胎土には石英・長石・金雲母・角閃石を含む。8は大きく開く口縁部の内面に突起を有する壺である。口縁端部に刻み目を施し，頸胴界に台形状の突帯をもつ。色調は橙色で，胎土には石英・長石・金雲母を含む。弥生後期後半の資料であろう。9は支脚である。にぶい黄橙色の色調で，胎土には石英・長石・金雲母を含む。

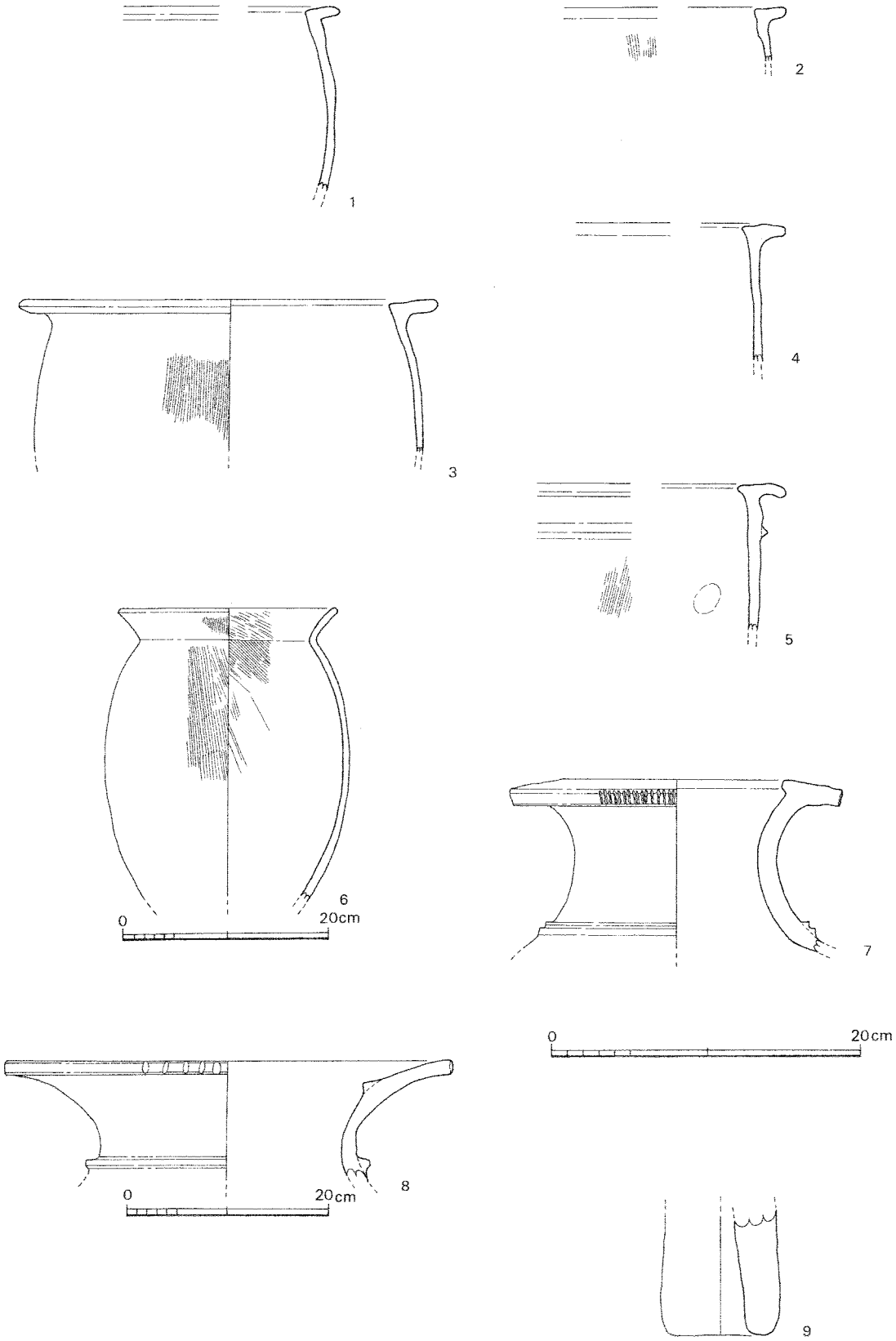
以上，F区土器溜Ⅴ層出土土器は，弥生中期前葉の須玖Ⅰ式古段階～弥生後期後半の資料である。

⑫F区土器溜Ⅵ層出土土器（第34図・第35図）

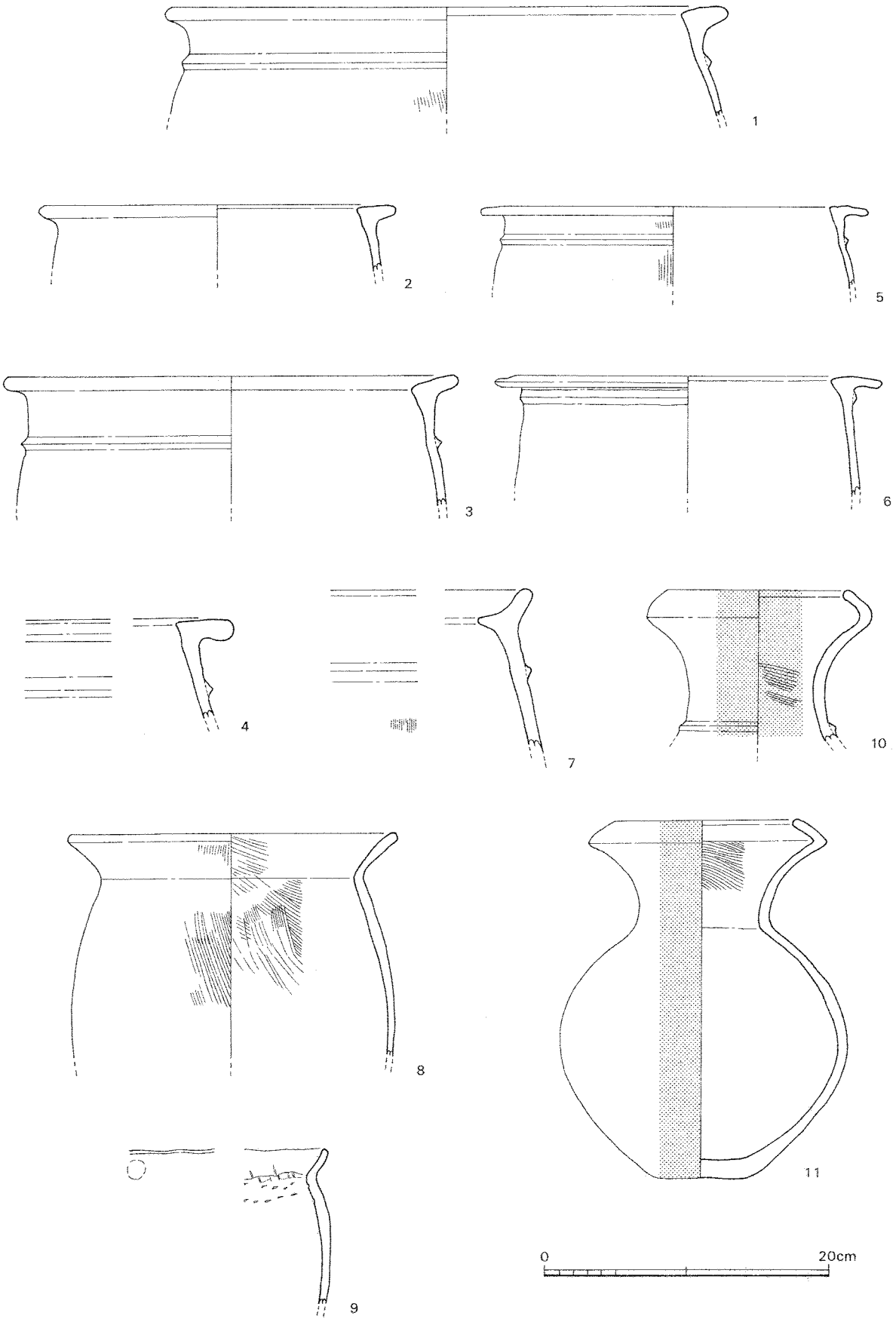
1～6は逆L字形および鋤先形口縁の甕である。2を除き，断面三角形の突帯を1条つけている。1・5は外面のハケメをナデ消すが，わずかにハケメが残る。色調は1が橙色,2が灰黄色，3が灰褐色，4がにぶい橙色，5が明赤褐色，6がにぶい黄橙色である。胎土には3を除き，石英・長石・金雲母を含み,3は石英・長石・金雲母・角閃石を含む。須玖Ⅰ式古段階～須玖Ⅱ式の資料である。7はT字形の口縁が内湾する甕である。外面にはわずかにハケメが残り，断面三角形の突帯を1条つけている。色調は橙色で，胎土には石英・長石・金雲母を含む。8・9は「く」字形口縁の甕である。8



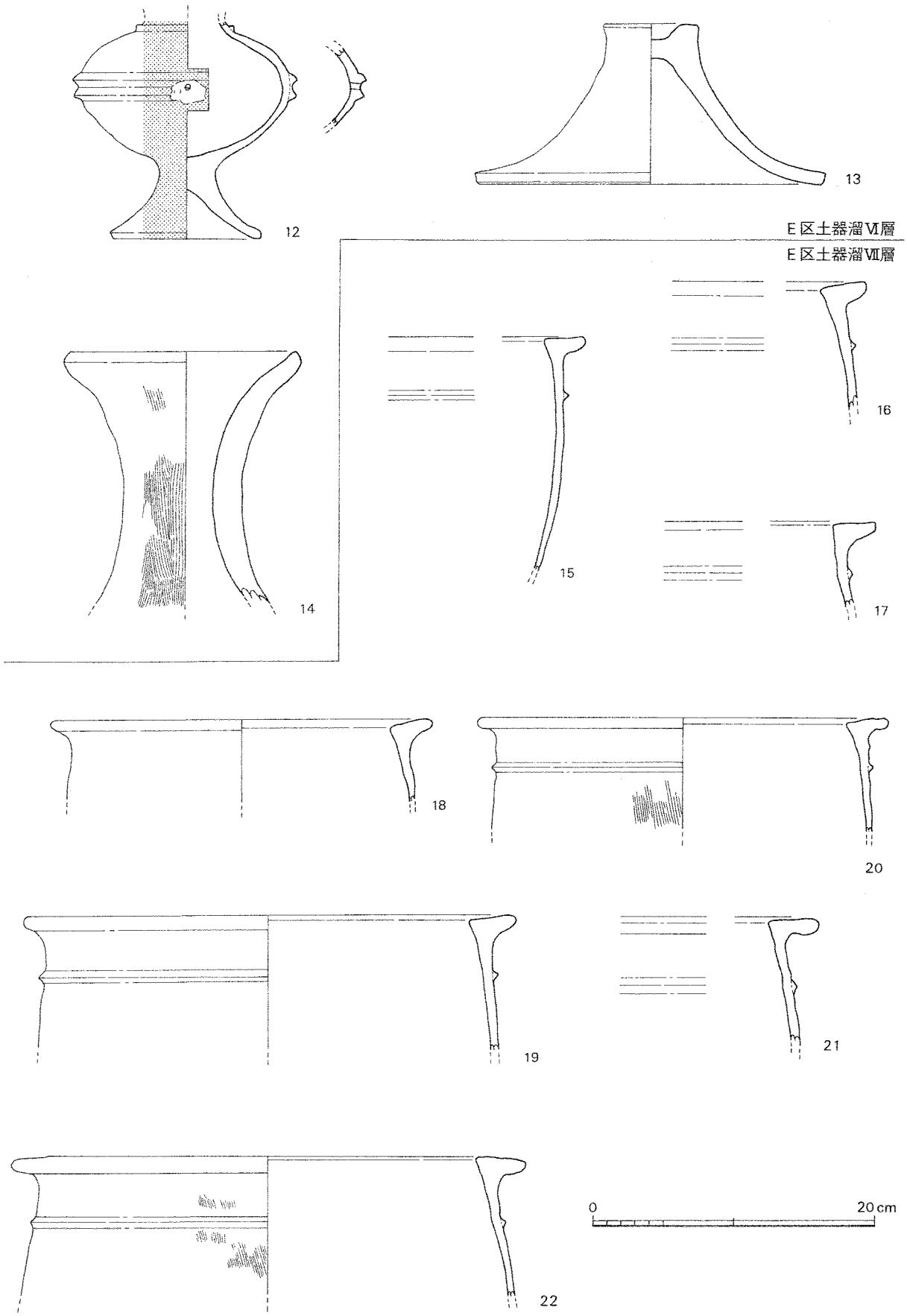
第32図　F区土器溜Ⅳ層出土土器（1/4）



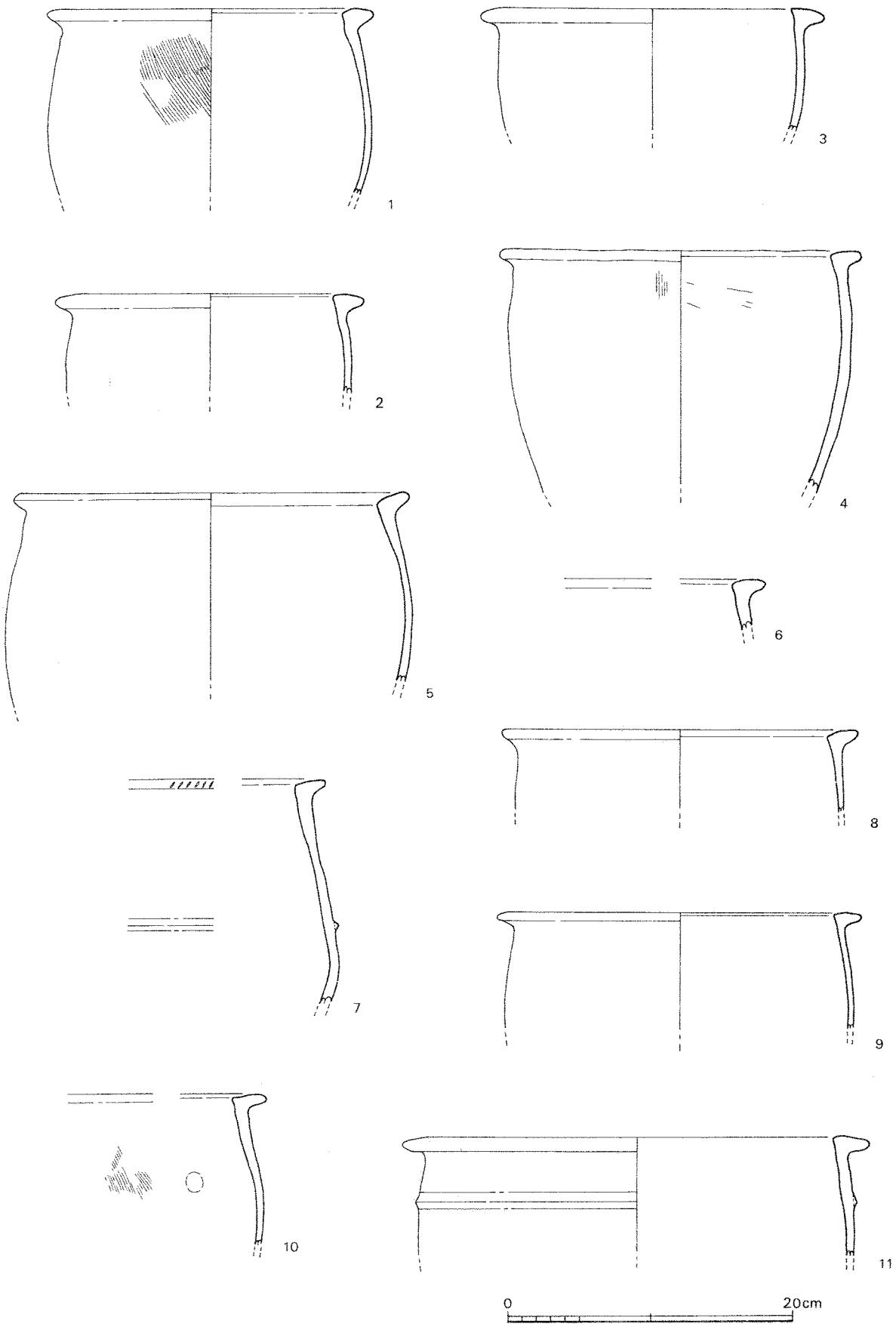
第33図　F区土器溜V層出土土器（1/4，1/6）



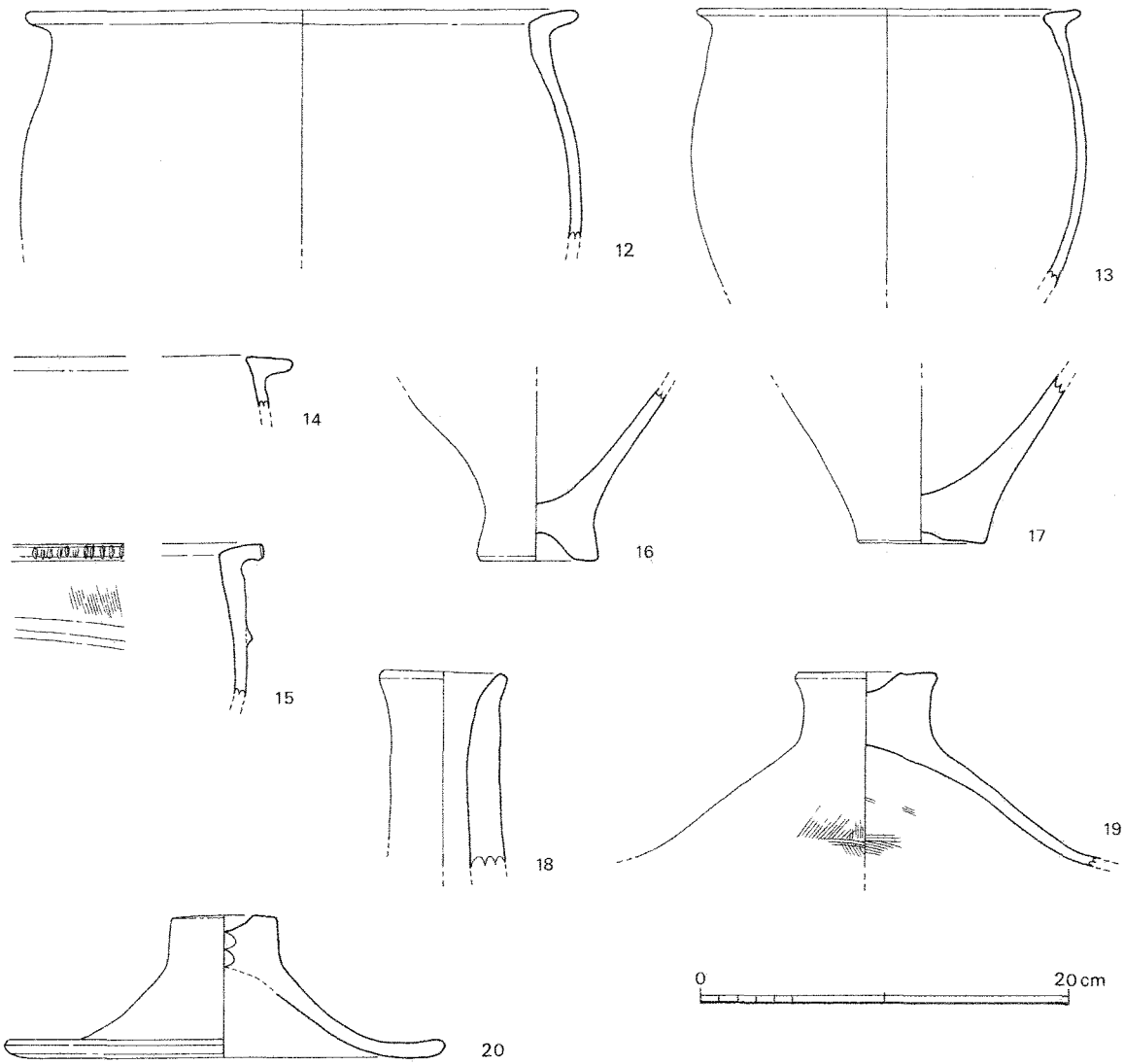
第34図　F区土器溜Ⅵ層出土土器①（1/4）



第35図　F区土器溜Ⅵ層出土土器②，F区土器溜Ⅶ層出土土器（1/4）

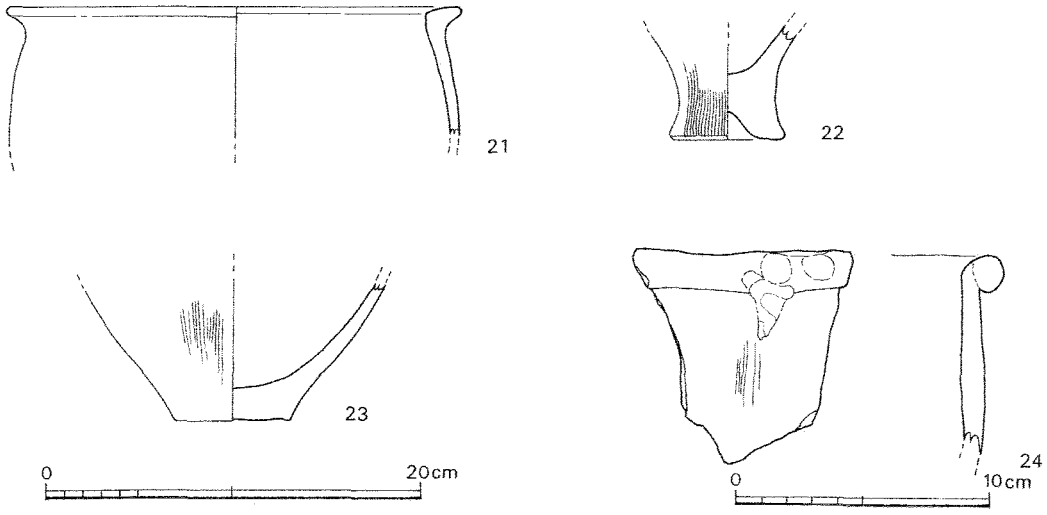


第36図　C区落ち込み１出土土器①（1/4）



C区落ち込み1

C区落ち込み2



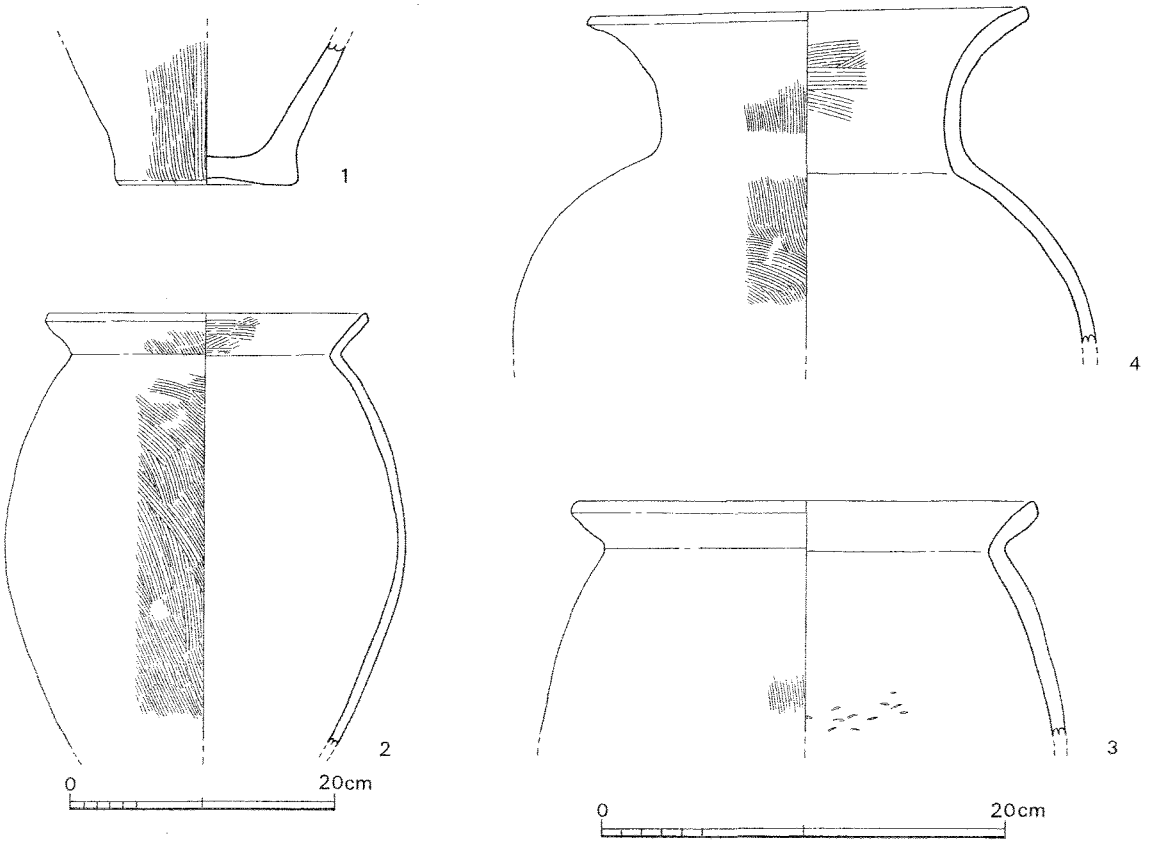
第37図　C区落ち込み1出土土器②，C区落ち込み2出土土器（1/3，1/4）

は内外面にハケメ調整を行う。9は屈曲部外面に指圧痕がみられ，屈曲部内面にはヘラケズリ痕とヘラ刺突痕が残る。色調は8が橙色，9がにぶい黄橙色である。胎土にはともに石英・長石・金雲母を含む。8が弥生後期後半の資料，9は朝鮮半島系の擬無文土器の系譜をひく甕の可能性がある。10・11は内湾気味に屈曲する口縁をもつ丹塗壺である。10は頸胴界に台形状の突帯をもつ。11は外面にタテミガキを施す。内面にはともにハケメ調整を行う。色調は10がにぶい黄橙色，11が灰白色である。胎土にはともに石英・長石・金雲母を含む。弥生後期前半の資料である。12は注口の台付丹塗壺である。断面三角形の2条の突帯間の注口が剥落した痕跡が認められる。孔は貫通している。にぶい黄橙色の色調で，胎土は石英・長石を含む。13は蓋である。にぶい橙色を呈し，胎土には石英・長石・金雲母を含む。14は器台である。外面はハケメ調整を行う。色調はにぶい黄橙色で，胎土には石英・長石・金雲母を含む。

以上，F区土器溜Ⅵ層出土土器は，弥生中期前葉の須玖Ⅰ式古段階～弥生後期後半の資料である。

⑬F区土器溜Ⅶ層出土土器（第35図）

15～22は逆L字形口縁の甕である。18を除き，胴部に断面三角形の突帯を1条つけている。20・22の外面にわずかにハケメが残る。色調は15がにぶい赤褐色，16が灰黄褐色，17・21が橙色，18が褐色，19が褐灰色，20がにぶい褐色，22がにぶい橙色である。胎土には17・20を除き，石英・長石・金雲母を含み，17・20は石英・長石・金雲母・角閃石を含む。



第38図　D区集石遺構試掘壙出土土器（1/4，1/6）

以上，Ｆ区土器溜Ⅶ層出土土器は，弥生中期前葉の須玖Ⅰ式古段階～弥生中期後半の須玖Ⅱ式の資料である。また，Ｆ区土器溜出土土器を取り上げ層位ごとに細かく検証してきたが，Ⅶ層を除き，各取り上げ層が弥生中期前葉・中葉～弥生後期の資料であった。これは，この土器溜が時間的推移のもとで形成された一次的なものではなく，別に形成されていた一次的なものが数度にわたり崩されて層位をなした二次的なものであることを示していると考えられる。今回この土器溜調査した中での最下層にあたるⅦ層の解釈については今後の検討課題である。

⑭Ｃ区落ち込み１出土土器（第36図・第37図）

１～３・６は断面三角形の口縁の甕である。１は外面にハケメ調整を行う。色調は１・２・６がにぶい橙色，３が橙色である。胎土には３が石英・長石，他が石英・長石・金雲母を含む。城ノ越式の資料である。４・５・７～15は逆Ｌ字形および鋤先形口縁の甕である。７・15は口縁端部に刻み目を施す。７・11・15は胴部に断面三角形の突帯を１条つけている。４・10・15は外面にわずかにハケメが残る。色調は４が褐灰色，５・６がにぶい橙色，７がにぶい赤褐色，８・12が明褐灰色，９・11・13が灰褐色，10・15がにぶい褐色，14が明褐色である。胎土には４・５が石英・長石・金雲母・角閃石，７・８・９・10・14・15が石英・長石・金雲母，11～13が石英・長石を含む。城ノ越式～須玖Ⅰ式の古段階の資料であろう。16・17は甕の底部である。16が淡い黄橙色，17が灰白色の色調である。胎土には16が石英・長石，17が石英・長石・金雲母・角閃石・赤色砂を含む。城ノ越式と須玖Ⅰ式の資料である。18は支脚である。橙色の色調で，胎土には石英・長石・金雲母・角閃石を含む。19・20は蓋である。19は内外面にハケメが残る。色調は19が褐灰色，20がにぶい黄橙色である。胎土にはともに石英・長石・金雲母を含む。須玖Ⅰ式古段階の資料であろう。

以上，Ｃ区落ち込み１出土土器は，弥生中期初頭の城ノ越式～弥生中期前葉の須玖Ⅰ式古段階の資料である。この落ち込みは，平成11年度特定調査Ｂ区の３号土壙の下層部分に繋がると考えられる。

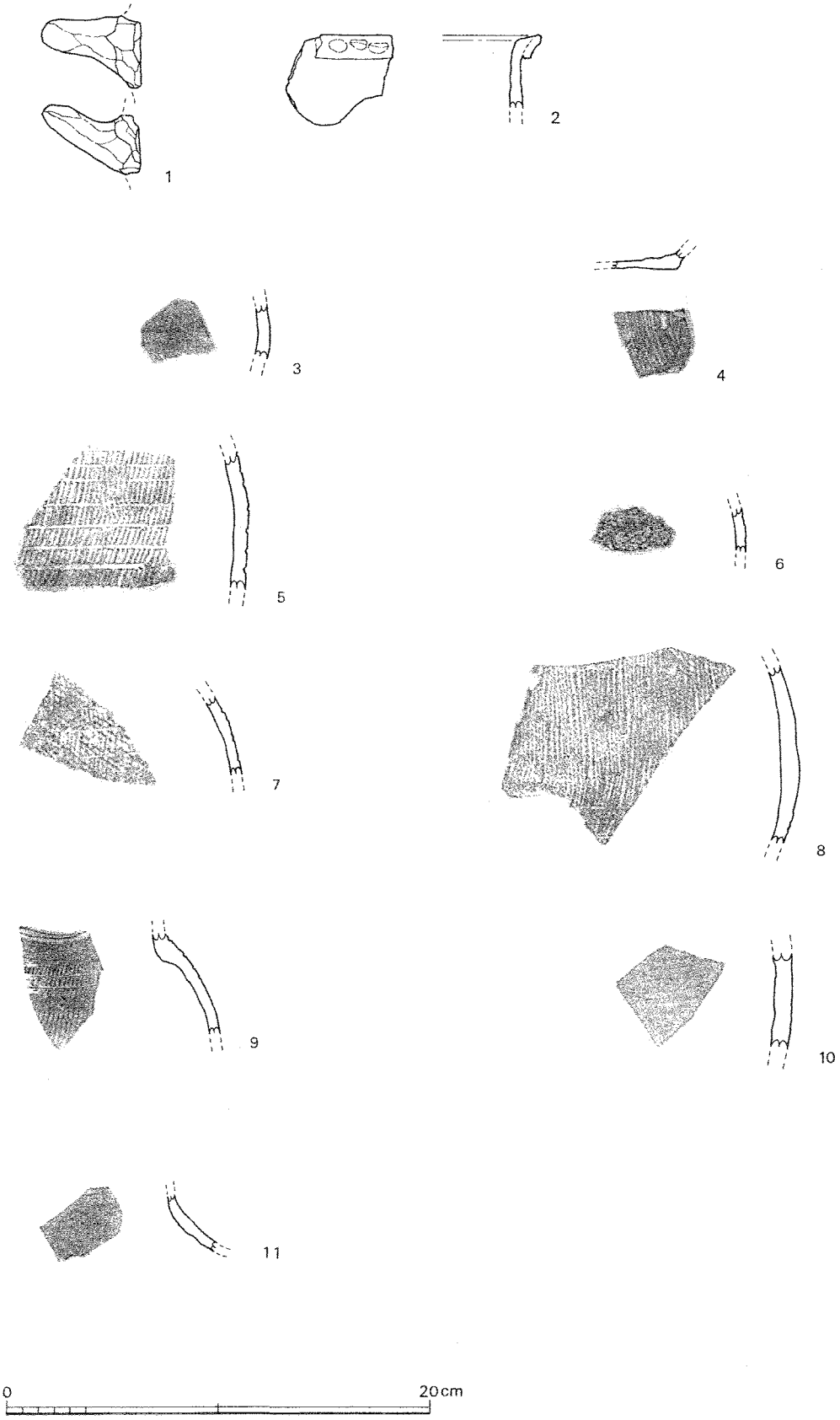
⑮Ｃ区落ち込み２出土土器（第37図）

21は断面三角形の口縁の甕である。赤褐色の色調で，胎土には石英・長石・金雲母を含む。城ノ越式の資料であろう。22・23は甕の底部である。いずれも外面にハケメ調整を行う。22が橙色，23が明赤灰色の色調で，胎土には22が石英・長石・金雲母，23が石英・長石・金雲母・角閃石を含む。城ノ越式と須玖Ⅱ式の資料であろう。24は朝鮮系無文土器の資料で，丸い粘土紐口縁の甕である。外面の一部に指圧痕とかすかにハケメが残る。灰黄褐色の色調で，胎土には石英・金雲母を含む。

以上，Ｃ区落ち込み２出土土器は，城ノ越式～須玖Ⅱ式の資料である。

⑯Ｄ区集石遺構試掘壙出土土器（第38図）

１は甕の底部である。外面はハケメ調整を行う。色調は明褐灰色で，胎土には石英・長石・金雲母・角閃石を含む。須玖Ⅱ式の資料であろう。５層から出土した。２・３は「く」字形口縁の甕である。２は内外面ともにハケメ調整を行う。３は外面のハケメをナデ消すが，わずかにハケメが残る。内面にはヘラ刺突痕が残る。２はにぶい黄褐色，３はにぶい黄橙色の色調で，胎土には２が石英・長石・金雲母・角閃石・赤色砂，３が石英・長石・金雲母を含む。４は朝顔形に開く口縁の広口壺である。



第39図　朝鮮半島系出土土器（1/3）

内外面ともにハケメ調整を行う。色調は淡い黄橙色で，胎土には石英・長石・金雲母を含む。２が弥生後期後半，３が弥生後期前半，４が弥生後期中頃の資料であろう。いずれも１ｂ層から出土した。

以上，Ｄ区集石遺構試掘壙出土土器は，集石遺構内の層である５層の出土土器は弥生中期後半の須玖Ⅱ式，集石遺構を覆うように堆積した１ｂ層の出土土器は弥生後期前半～弥生後期後半の資料である。

⑰朝鮮半島系出土土器（第39図）

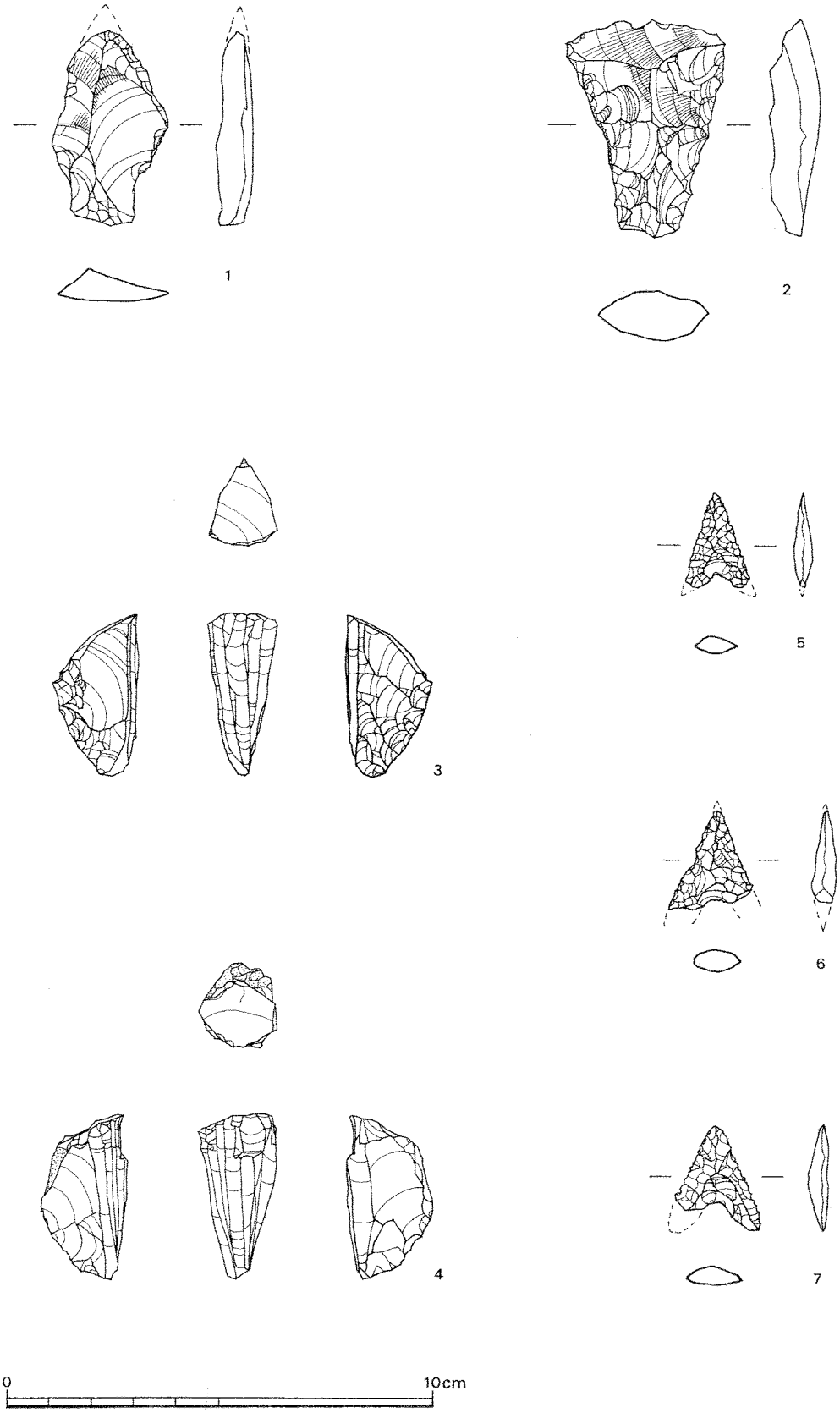
ここでは，前掲した遺構の他から出土した朝鮮半島系の土器をまとめて紹介する。

１は無文土器の牛角把手付壺の把手である。色調はにぶい黄橙色で，胎土には石英・長石・金雲母を含む。Ｂ15区Ⅲ層出土。２は無文土器の口縁で，粘土帯を貼りつけているものである。一部に指圧痕が残る。灰黄褐色の色調で，胎土には石英・長石・金雲母を含む。Ｄ３区Ⅳ層出土。３・４は楽浪系瓦質土器片である。３は無文の壺片と考えられ，ロクロによる回転ナデ調整されている。４は底部破片で，静止糸切り痕がみられ，わずかに残る胴部下端にはケズリを施している。いずれも褐灰色を呈する。３がＤ７区Ⅲ層，４がＤ３・６区Ⅳ層出土。５～８は三韓系瓦質土器壺片である。５は縄蓆文タタキを施した後に沈線を入れる。内面は当て具痕をナデ消す。６は格子目タタキを行う。７は格子目タタキの後に沈線を施す。８は縄蓆文タタキを施した後で一部に沈線を入れる。色調は５・６が灰色，７が黄灰色，８が褐灰色である。５・８がＦ７区Ⅴ層，６がＤ３区Ⅳ層，７がＤ３・６区Ⅳ層から出土した。９～11は陶質土器である。９はハケメと沈線を施す壺胴部片である。器肉はにぶい橙色を呈する。10は無文の壺胴部片である。平行タタキの後ナデ仕上げしている。内面も一部ナデの痕が残る。器肉は灰赤色を呈する。11はハケメを施す破片である。器肉はにぶい橙色を呈する。９がＢ17区Ⅲ層，10がＤ２・４・５区Ⅳ，11がＦ８区Ⅴ層出土である。

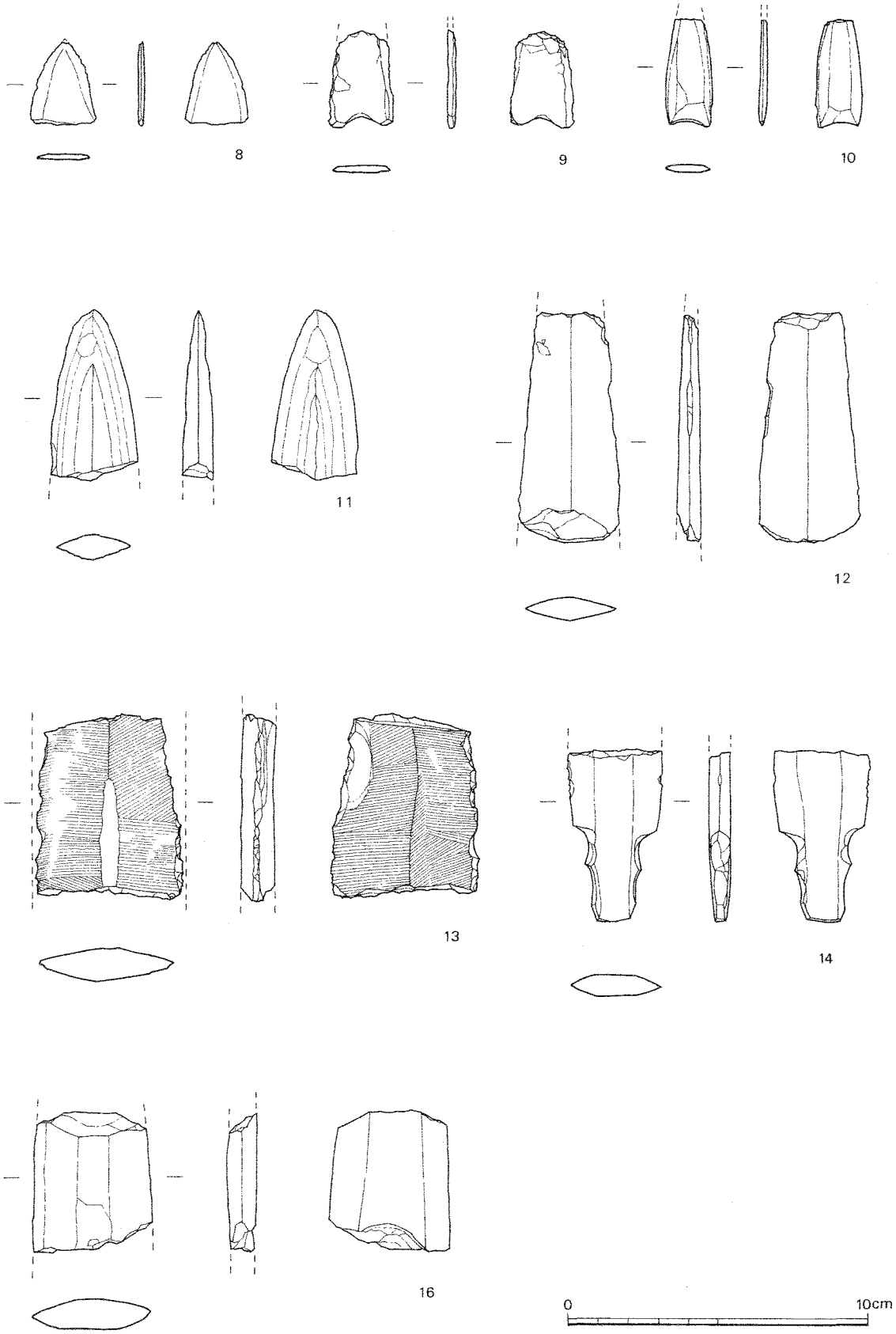
註１　柳田康雄1991「九州」『古墳時代の研究』６雄山閣

(2) **石器・石製品**（第40図～第49図）

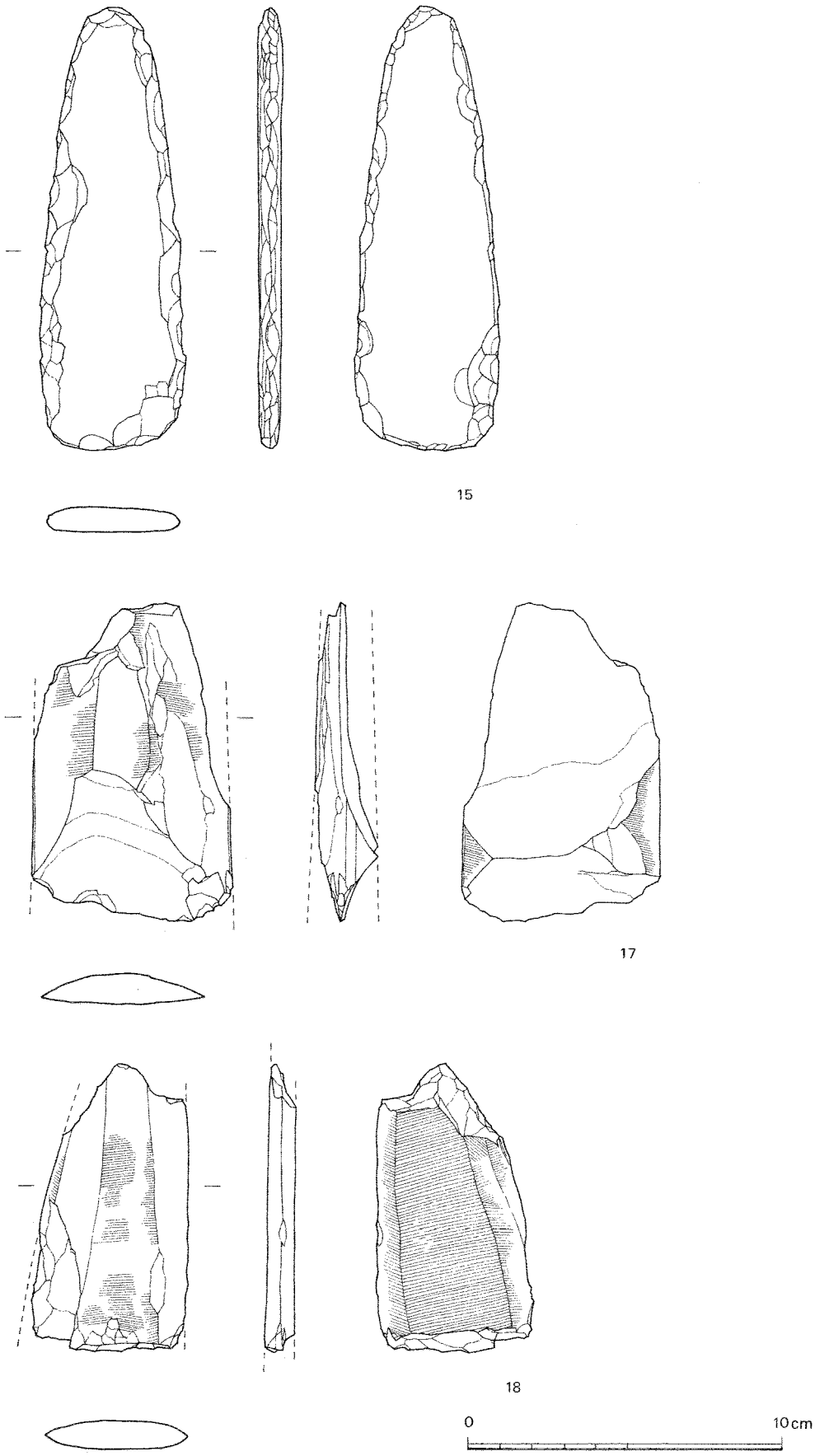
1は黒曜石製三稜形尖頭器である。重さ7.8g，B2区Ⅱ層出土。2は黒曜石製台形様石器である。重さ17.2g，C7・8区落ち込み10出土。3・4は黒曜石製細石核である。重さは3が9.1g，4が11.6g。3はD8区Ⅴ層，4はF6区土器溜Ⅰ層出土。5～7は黒曜石製無茎打製石鏃である。重さは5が0.7g，6が1.4g，7が1.1g。5はB区Ⅰ層，6はE1区Ⅲ層，7はD4区Ⅳ層出土。8～10は無茎磨製石鏃である。全て頁岩製。重さは8が1.5g，9が2.8g，10が2.9g。8はF区土器溜Ⅲ層，9はC3・4・5区落ち込み1，10はF区土器溜Ⅳ層出土。11～15は磨製石剣である。15は未製品。全て頁岩製。重さは11が15.0g，12が24.5g，13が50.4g，14が19.6g，15が93.1g。11はB16区1号濠Ⅰ層，12はB区3号土壙，13はD10区Ⅴ層，14はD9区Ⅲ層，15はD5区Ⅳ層出土。16～18は磨製石戈である。16は粘板岩製，17・18は頁岩製。重さは16が27.1g，17が100.9g，18が66.2g。16はC2区Ⅲ層，17はD7区Ⅳ層，18はC7区Ⅲ層出土。19～21は方柱状片刃石斧である。19・20は抉入。19・21は粘板岩製，20は頁岩製。重さは19が246.6g，20が221.1g，21が67.1g。19はC区2号土壙，20がF5区Ⅳa層，21がB2区Ⅲ層出土。22～27は石鑿である。22～25は粘板岩製，26・27は頁岩製。重さは22が43.6g，23が40.8g，24が12.4g，25が10.4g，26が34.6g，27が12.0g。22・27はB3区Ⅲ層，23はC4区Ⅲ層，24はB14区Ⅲ層，25はB区2号溝，26はB6区Ⅲ層出土。28・29は石製紡錘車である。29は穿孔無く未製品。28は頁岩製，29は砂岩製。重さは28が31.6g，29が16.0g。28はE1区Ⅲ層，29はB20区Ⅲ層出土。30は石斧の未製品である。頁岩製，重さ390.2g。B区2号溝出土。31～44は石鎌である。31・32・33・44は未製品。44は石庖丁に転用か。全て頁岩製。重さは31が51.6g，32が104.1g，33が61.0g，34が17.1g，35が64.1g，36が24.4g，37が31.3g，38が19.9g，39が15.7g，40が16.4g，41が29.2g，42が19.5g，43が29.6g，44が23.8g。31はE区，32はD8区Ⅳ層，33はC3区Ⅲ層，34はD9区Ⅳ層，35はD7区Ⅳ層，36はA2区Ⅱ層，37はC区1号濠，38はD10区Ⅴ層，39はD9・10区Ⅳ層，40はB区1号濠Ⅱ層，41はD7区Ⅲ層，42はD4区Ⅳ層，43はC5区Ⅲ層，44はC7・8区落ち込み10出土。45～51は石庖丁である。45・46・51は未製品。46が粘板岩製，残りは頁岩製。重さは45が36.3g，46が34.3g，47が21.3g，48が47.7g，49が25.9g，50が22.4g，51が38.0g。45はC区1号濠Ⅰ層，46はC区1号濠，47はC4・6区落ち込み6，48はD3・6区Ⅳ層，49はC2区落ち込み2，50はB区20号土壙，51がD7区Ⅴ層出土。52～69は砥石である。66～69は破損後凹石に転用。53・55・59・60・66・68は頁岩製，他は砂岩製。重さは52が185.3g，53が113.8g，54が118.0g，55が273.4g，56が1020.5g，57が992.3g，58が854.4g，59が188.0g，60が1009.4g，61が1738.7g，62が439.4g，63が304.1g，64が436.6g，65が818.2g，66が421.8g，67が930.4g，68が646.2g，69が638.7g。52・56・57はB区2号溝，53はC2区Ⅲ層，54はC区落ち込み1，55はC区落ち込み10，58はB区1号濠，59・60・68はF区土器溜Ⅳ層，61はF区土器溜Ⅶ層，62・67はF区土器溜Ⅲ層，63・64はD7区Ⅳ層，65はD区Ⅵ層，66はD10区Ⅲ層，69はF区土器溜Ⅰ層出土。70は多孔質玄武岩製の支脚形石製品である。重さ900.5g，D5区Ⅳ層出土。71は凝灰岩製の石錘未製品である。重さ2253.0g，D区集石遺構出土。



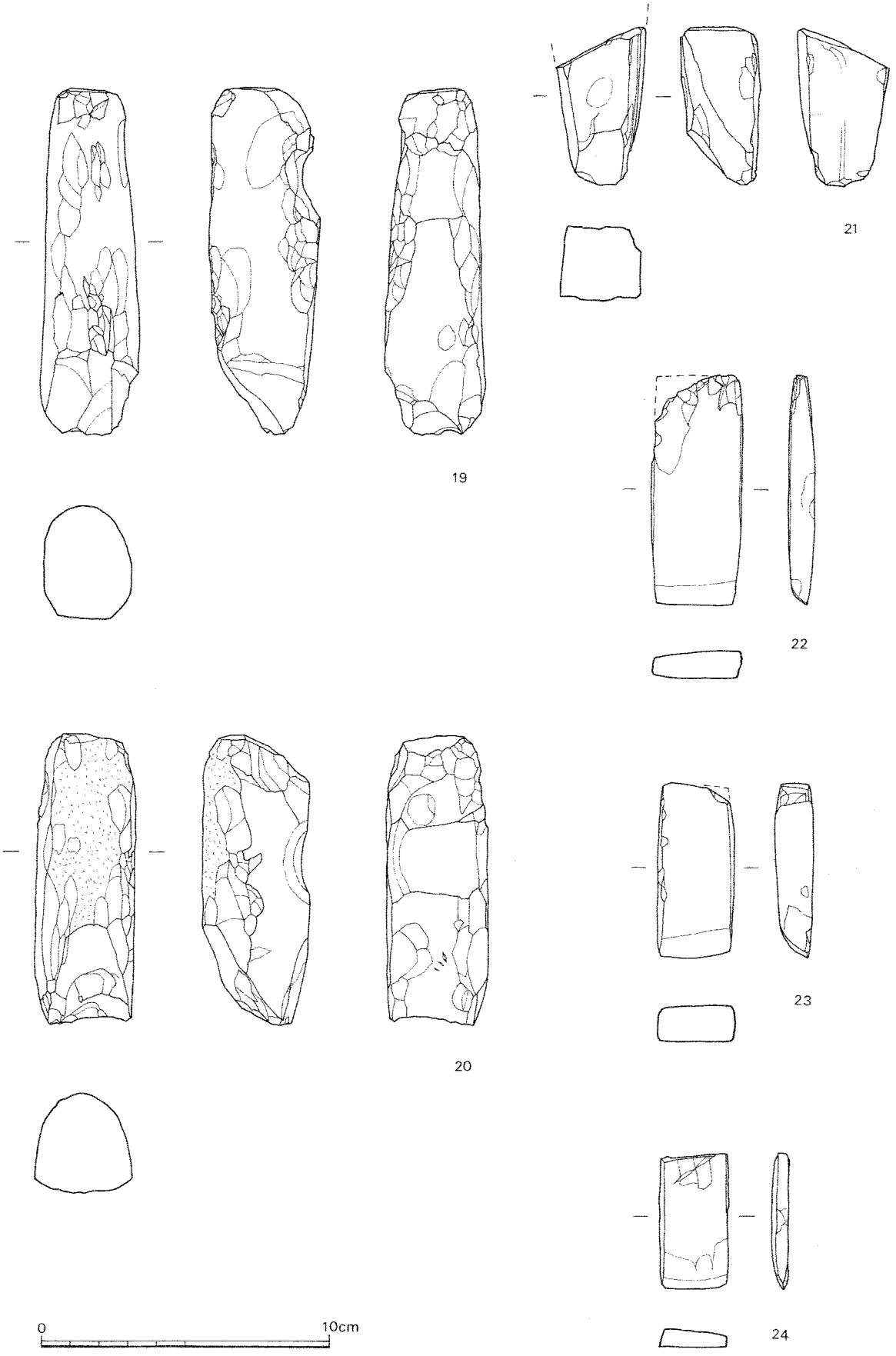
第40図　石器・石製品①（2/3）



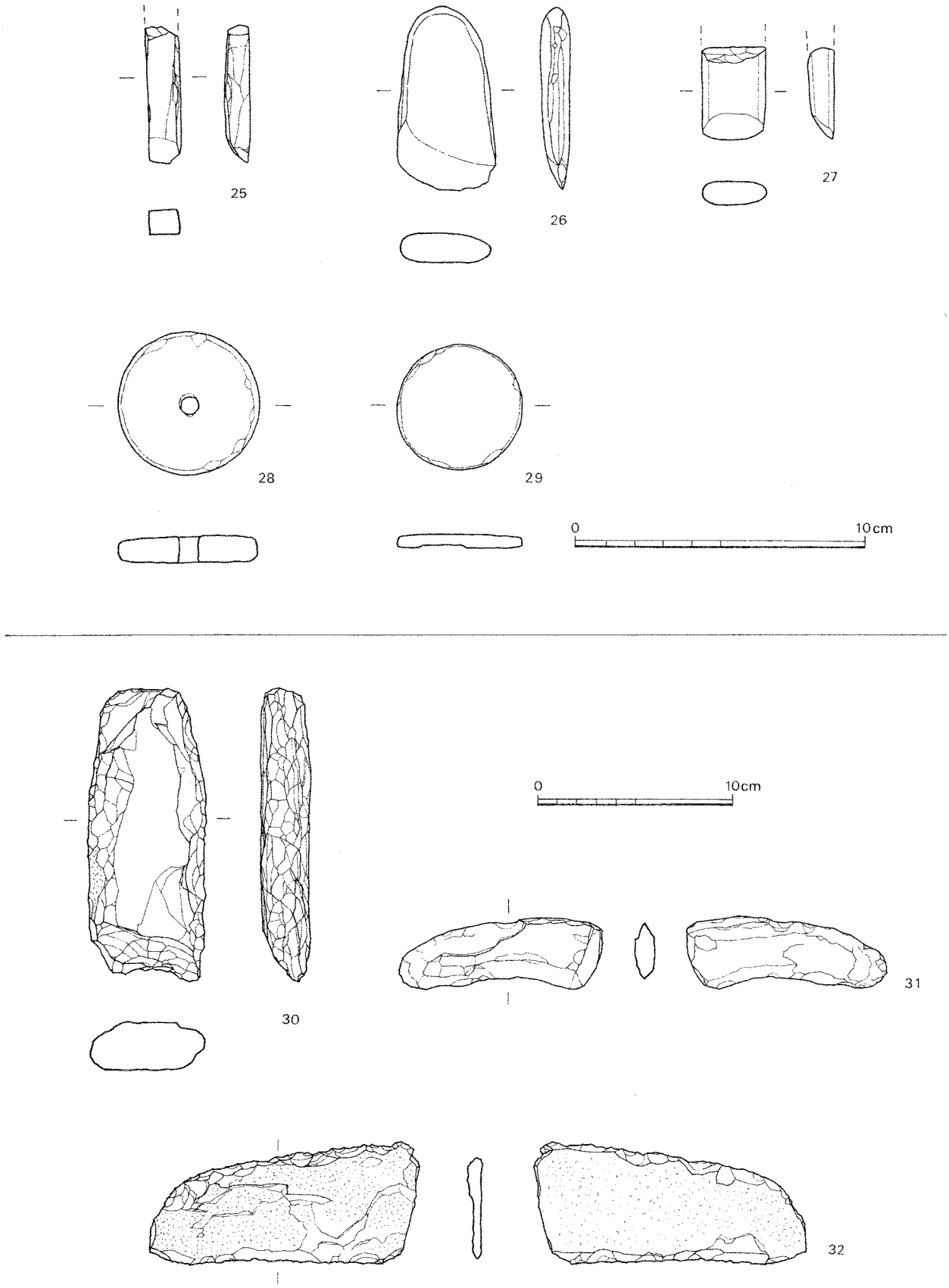
第41図　石器・石製品②（1/2）



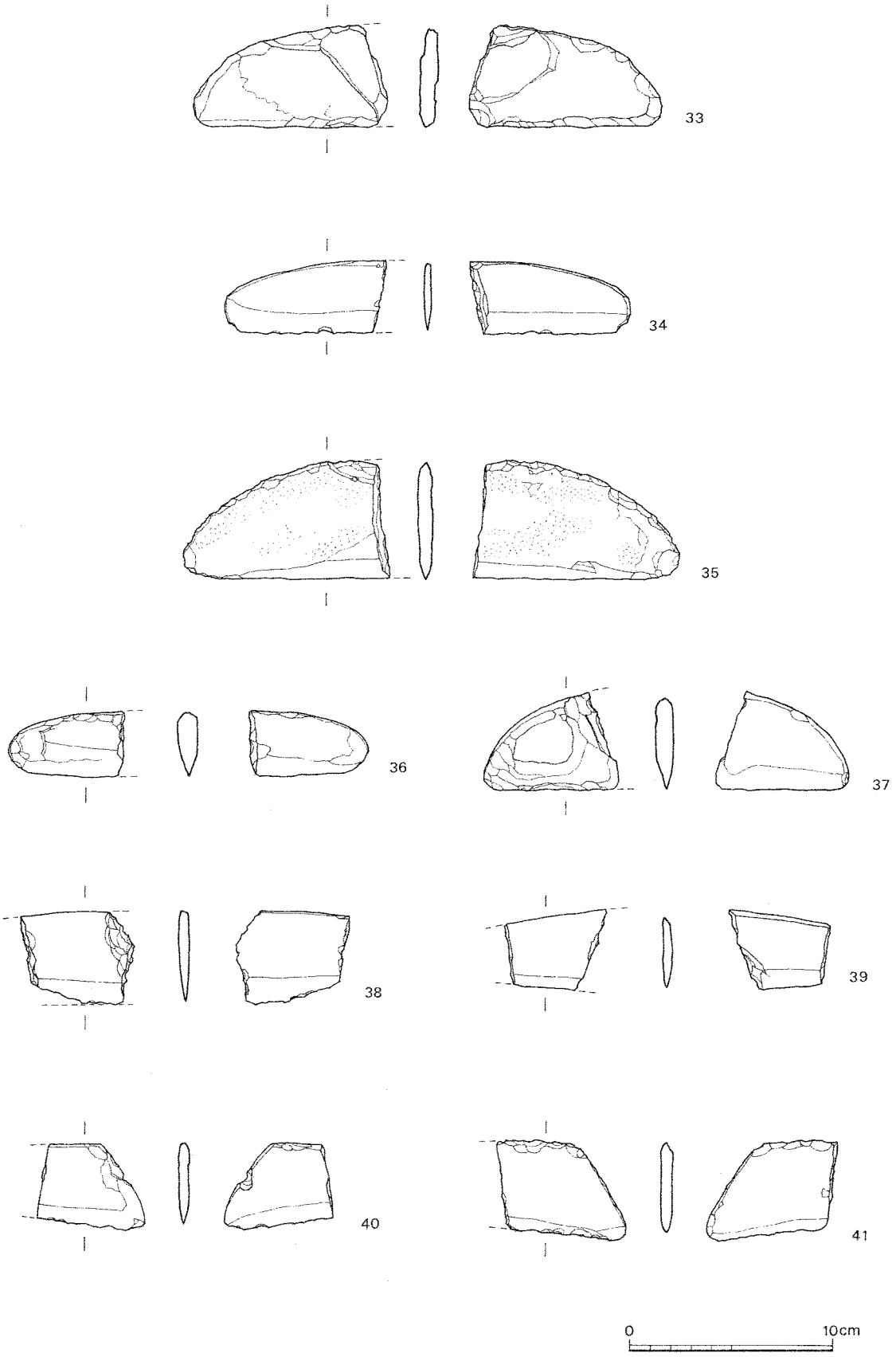
第42図　石器・石製品③（1/2）



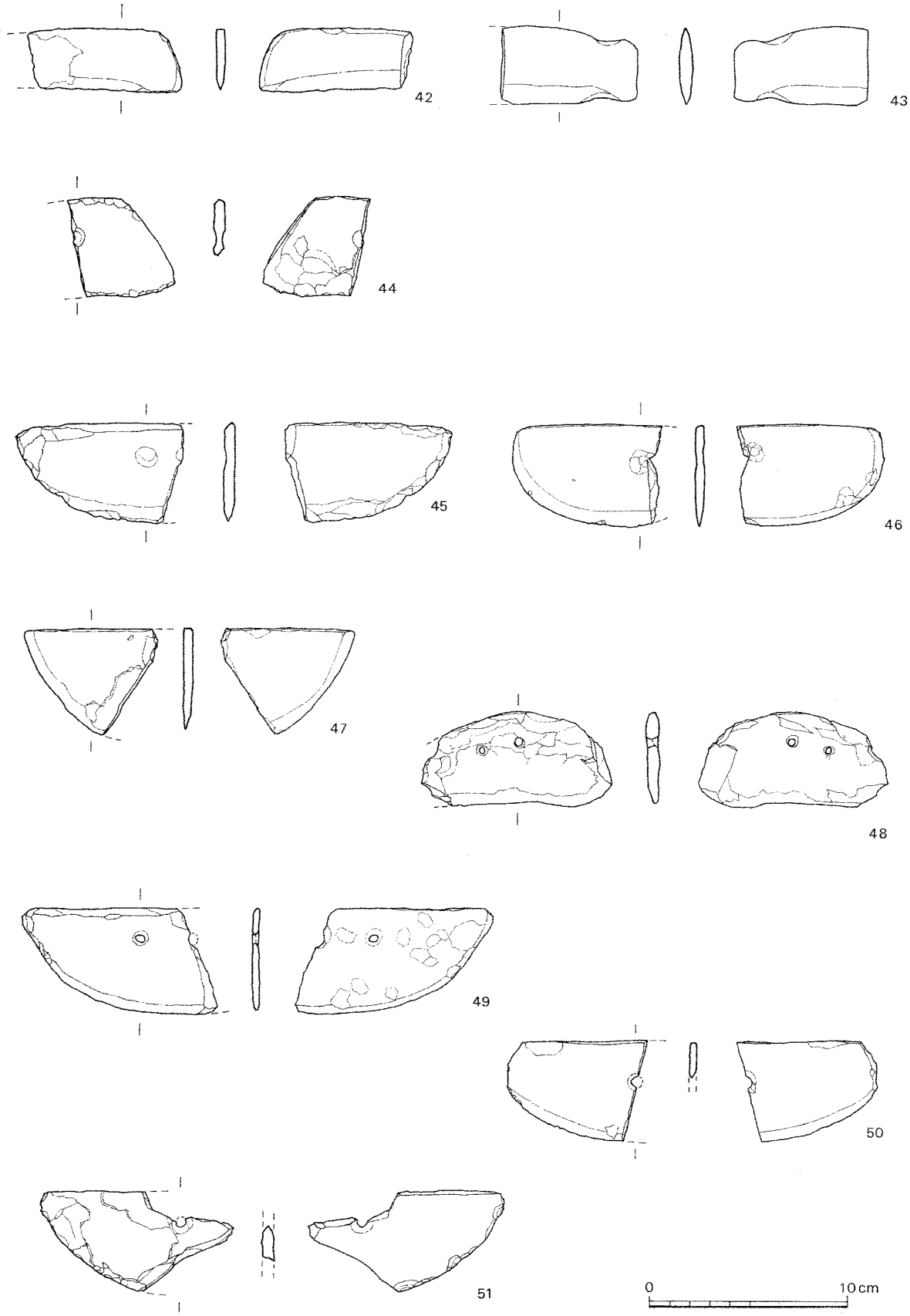
第43図　石器・石製品④（1/2）



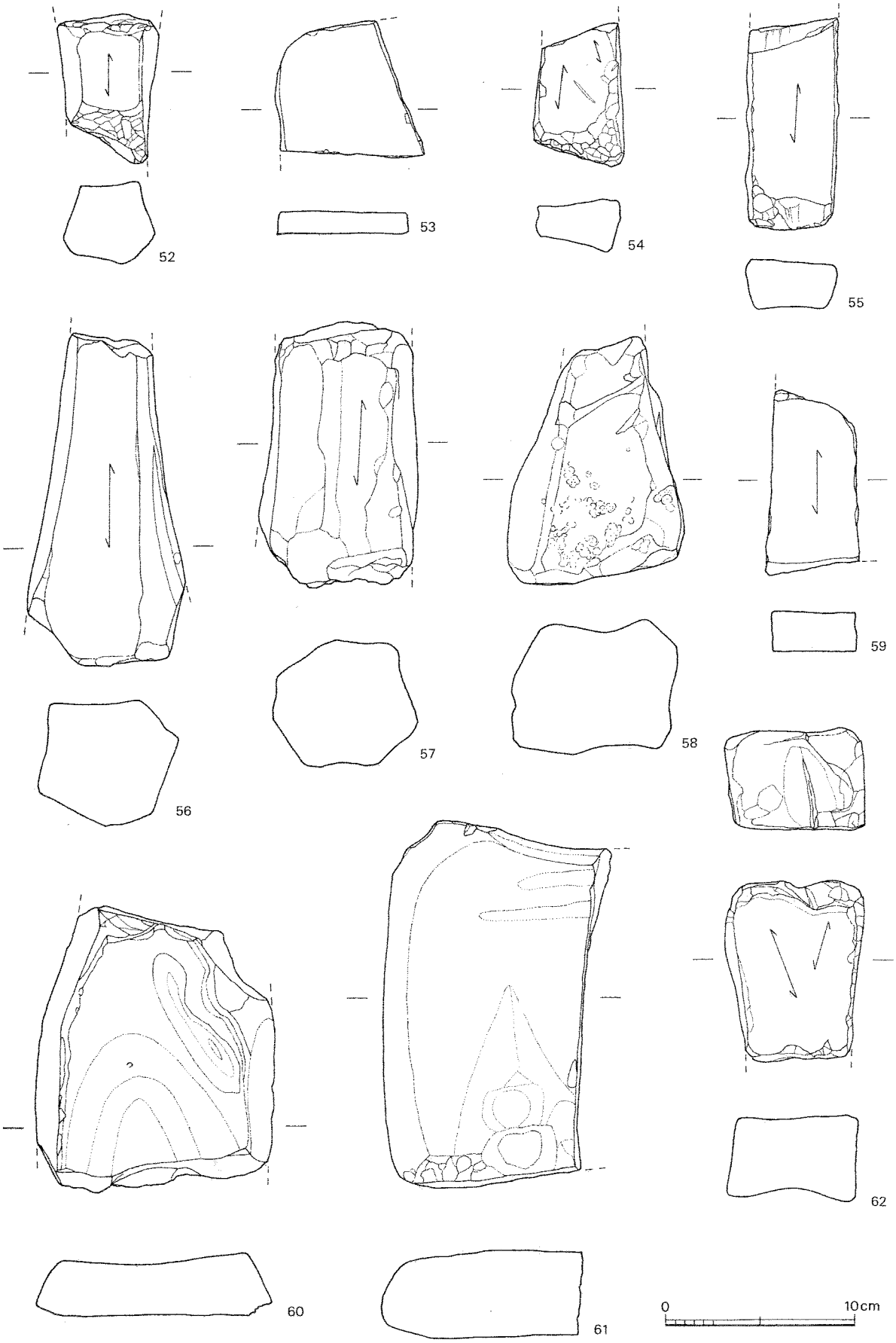
第44図　石器・石製品⑤（1/2, 1/3）



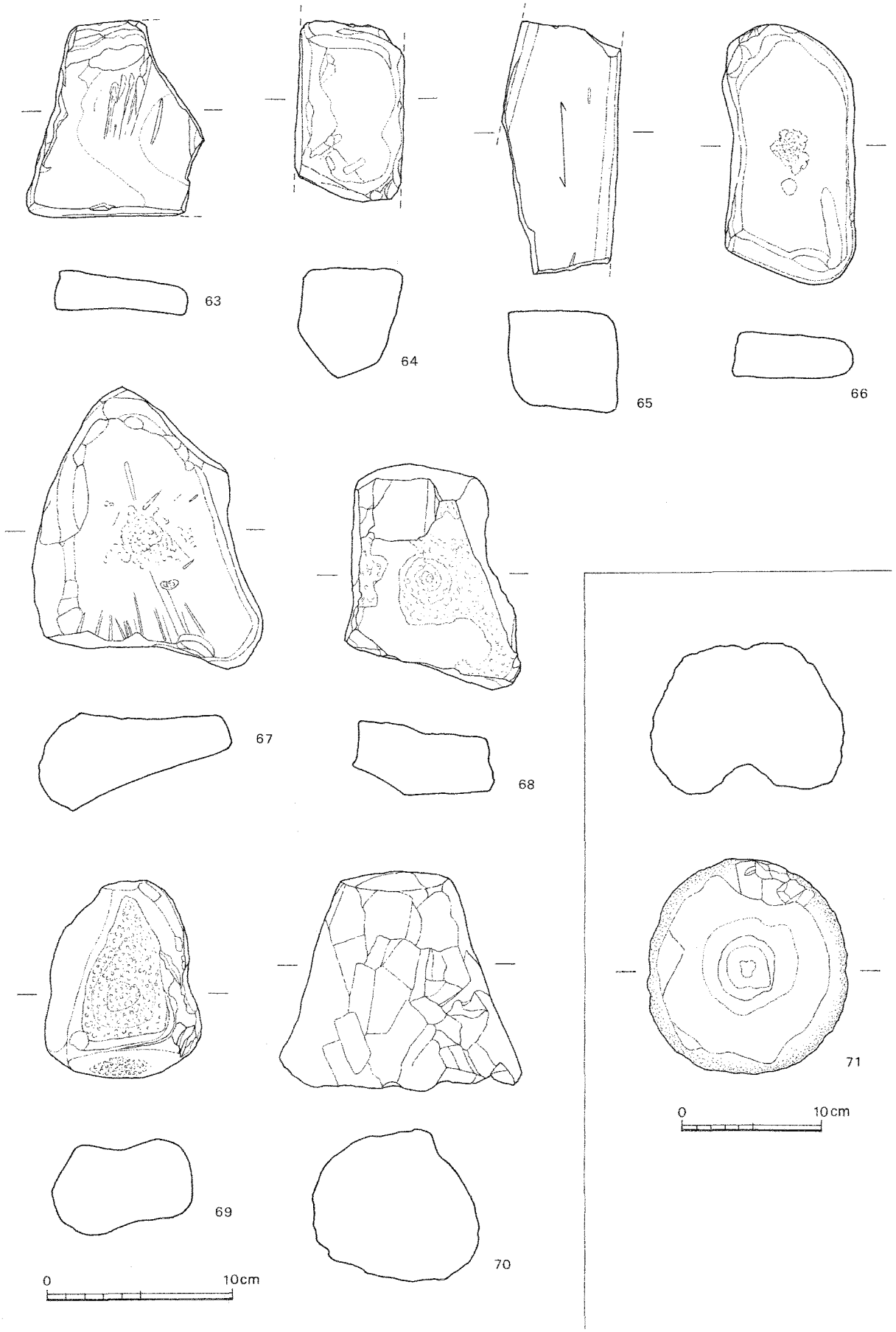
第45図　石器・石製品⑥（1/3）



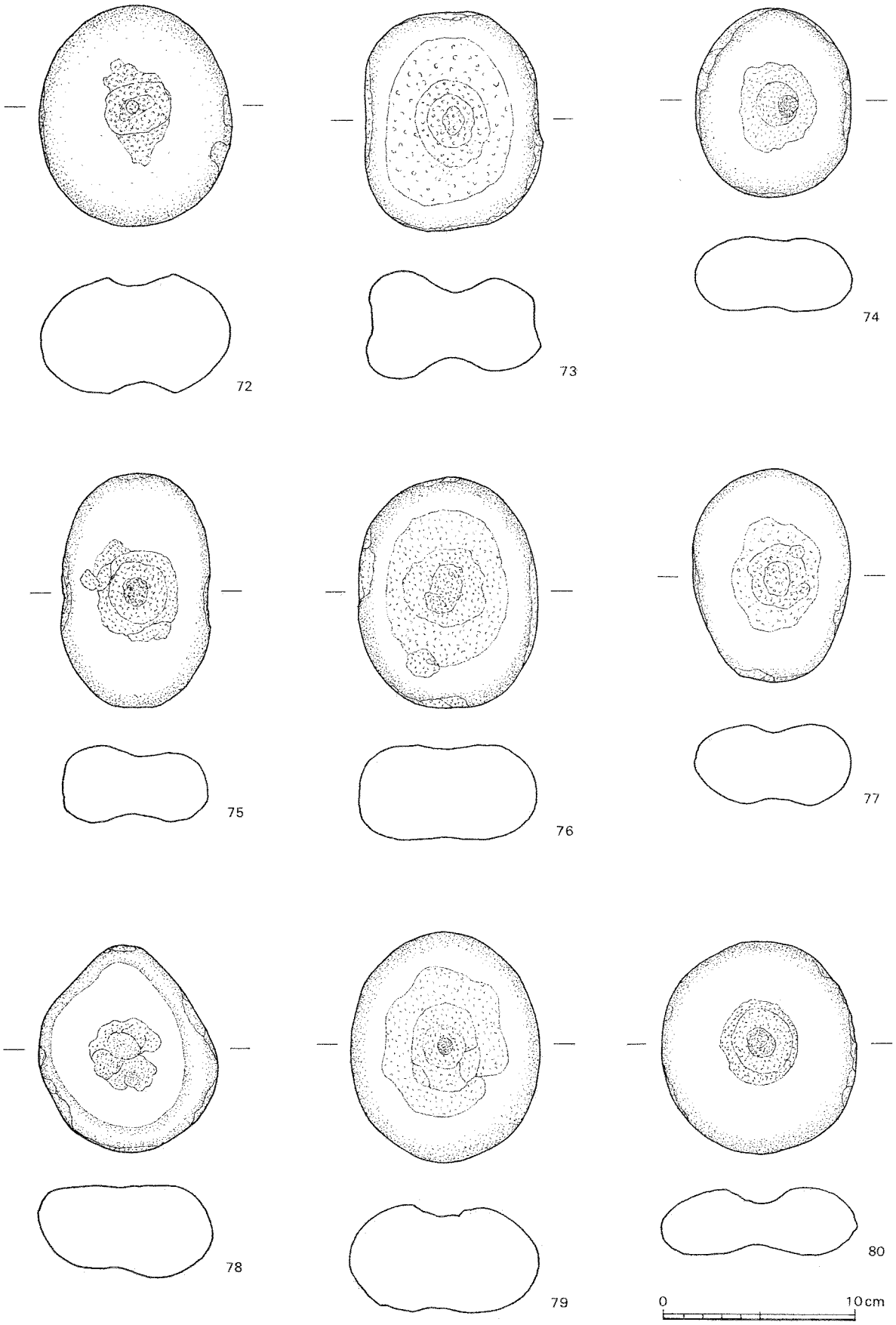
第46図　石器・石製品⑦（1/3）



第47図　石器・石製品⑧（1/3）



第48図　石器・石製品⑨（1/3，1/4）



第49図　石器・石製品⑩（1/3）

72～80は玄武岩製の凹石・敲石・磨石である。重さは72が1150.8ｇ，73が968.2ｇ，74が512.2ｇ，75が624.1ｇ，76が981.4ｇ，77が614.5ｇ，78が706.8ｇ，79が1030.7ｇ，80が553.6ｇ。72はＣ区落ち込み10，73はＤ５区Ⅳａ層，74はＦ区土器溜Ⅲ層，75はＣ区１号濠，76はＤ10区Ⅴ層，77はＡ区１号溝，78はＤ区Ⅵ層，79はＤ10区Ⅲ層，80はＢ区６号土壙出土。

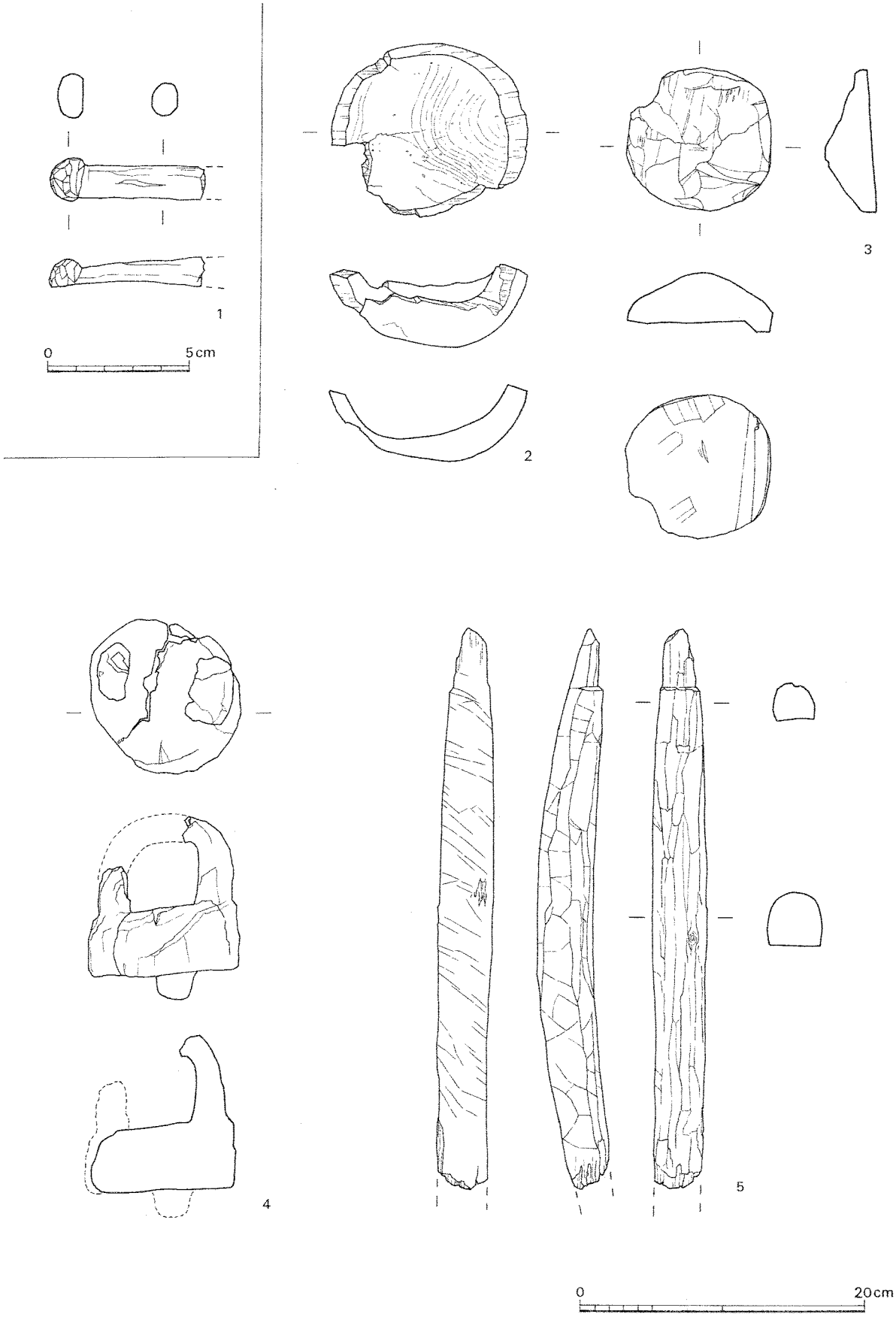
(3) 金属製品（第65図）

１は大泉五十である。青銅製で，法量は長径28.15㎜，短径27.65㎜，厚さ2.45㎜，重さ5.5ｇである。中央に8.60㎜×8.65㎜の方孔があり，上に「大」，下に「泉」，右に「五」，左に「十」の文字を鋳る。中国の王莽により紀元７年初鋳され，新（紀元８～23年）の時代に使用された。Ｅ区Ⅱ層，近世～近代の水田攪乱層から出土した。以前に原の辻遺跡に入っていたものが混入したと考えられる。これまで学術的には，福岡市の鴻臚館跡で10世紀後半の土壙から出土した１例が知られていた。原の辻遺跡では，これまで前漢の五銖銭と新の貨泉（６例）が出土しており，大泉五十の出土によって中国の古代貨幣が３種類そろったことは，日本で初めての事例である。２は青銅製の銅鏃である。長さ32㎜，幅８㎜，厚さ４㎜，重さ2.2ｇを測る。Ｃ４区Ⅲ層から出土した。

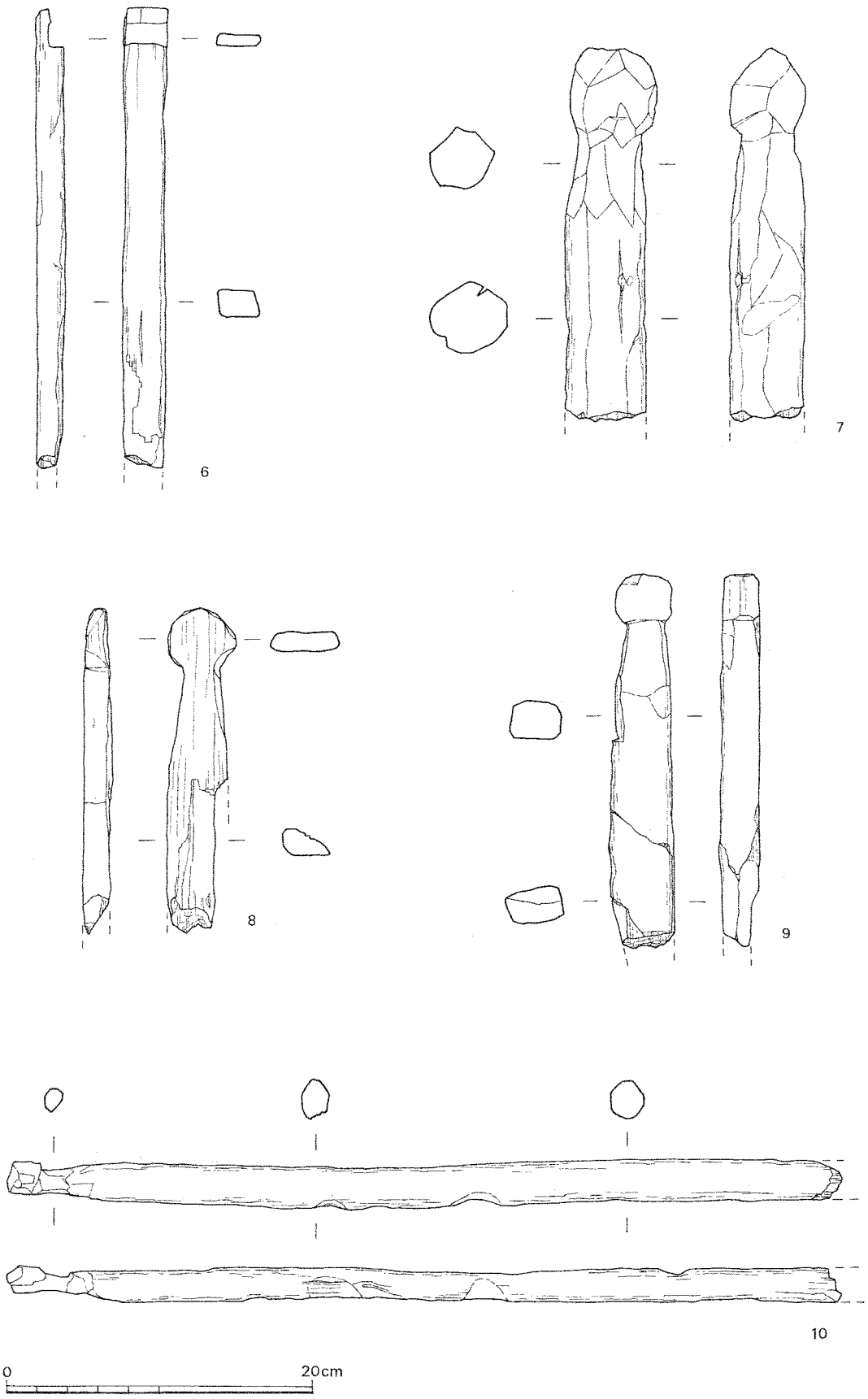
(4) 木製品（第50図～第64図）

木製品は，平成10年度から今年度まで実施した特定調査により，旧河道や濠等から各種多数の出土がみられた。ここではそれらをまとめて紹介するが，時間的な関係上杭など一部のものについては省略した。なお，過年度の遺構については原の辻遺跡調査事務所報告書第16・19集を参照頂きたい。

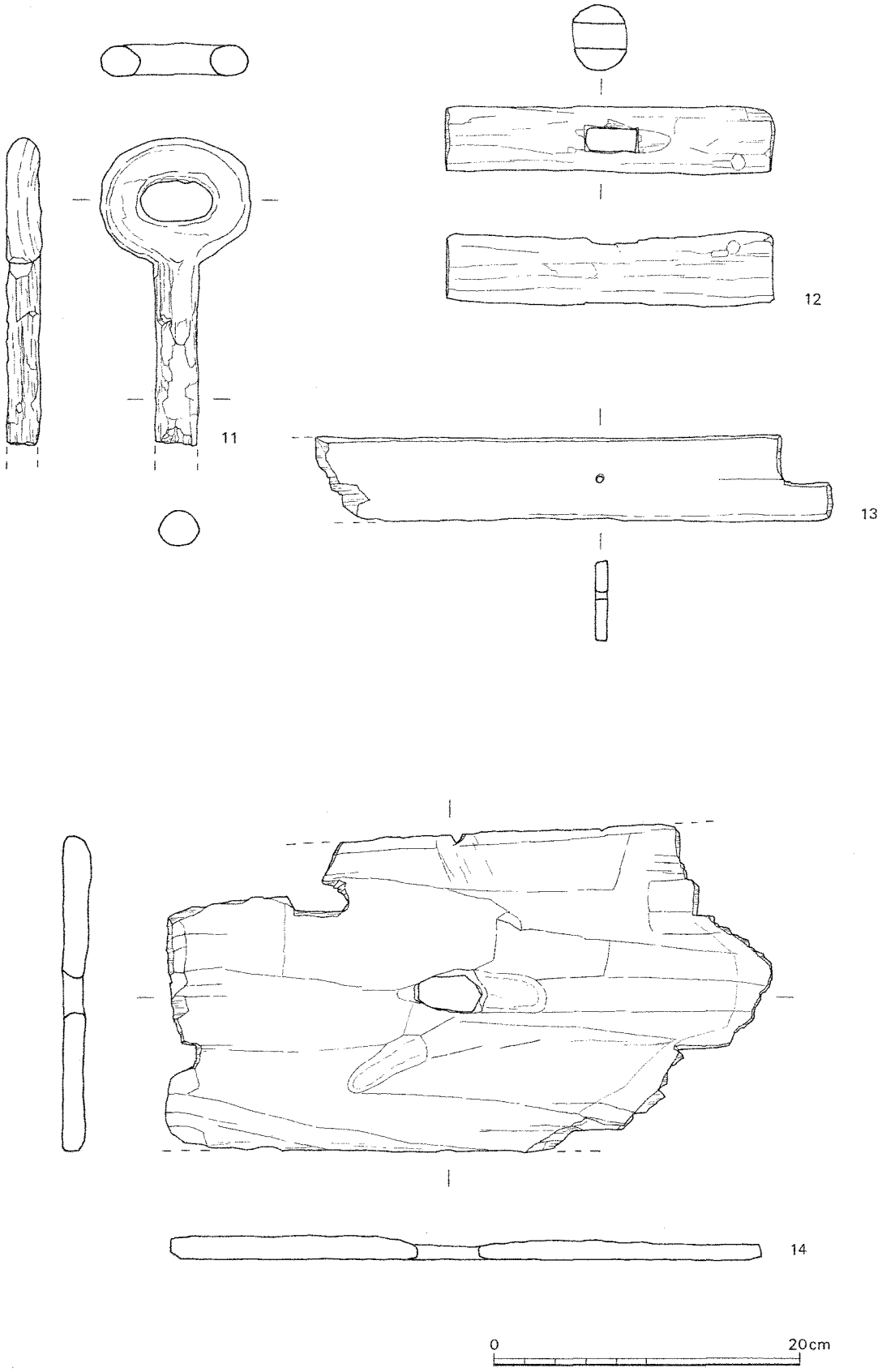
１は機織り具の経巻具である。陽物形（男根形木製品）の可能性も考えられる。現存長5.5cm，幅1.5cm，厚さ１cmを測る。平成11年度Ｂ区１号旧河道出土。２は柄を欠損した杓子である。最大径14cmを測る。平成11年度Ｅ区３号旧河道出土。３は何らかの未製品と思われる。最大径10cmを測る。平成11年度Ｅ区土器溜出土。４は留め具であろう。平成11年度Ｅ区２号旧河道出土。５～10は何らかの部材と思われる。５が現存長39cm，幅４cm，厚さ４cm，６が現存長30cm，幅３cm，厚さ２cm，７が現存長24cm，幅５cm，厚さ５cm，８が現存長21cm，幅4.5cm，厚さ２cm，９が現存長24cm，幅４cm，厚さ2.5cm，10が現存長54cm，幅2.5cm，厚さ２cmである。５が平成11年度Ｅ区２号旧河道，６・７が平成11年度Ｂ区１号旧河道，８が平成11年度Ｅ２区Ⅱ層，９が平成11年度Ｅ16区Ⅲ層，10が平成11年度Ｅ区３号旧河道から出土した。11～14は用途不明のものである。11が現存長20cm，環状部最大径10cm，厚さ２cm，12が長さ21cm，幅4.5cm，厚さ５cm，13が現存長33.5cm，幅5.5cm，厚さ0.9cm，14が現存長38.5cm，幅20.5cm，厚さ1.5cmを測る。いずれも平成11年度Ｅ区３号旧河道から出土した。15～19は竪杵である。15が長さ101.5cm，16が長さ113cm，17が現存長45cm，18が現存長41cm，19が48.5cmである。15が平成10年度Ｅ区５号濠，16・19が平成12年度Ｂ区１号濠，17・18が平成11年度Ｅ区３号旧河道から出土した。20は又鍬の一部である。平成11年度Ｅ区２号旧河道から出土した。21・22は横杵と考えられるが，21は杵部先にも柄が折れたような痕跡があり，別の可能性もある。21が現存長26.5



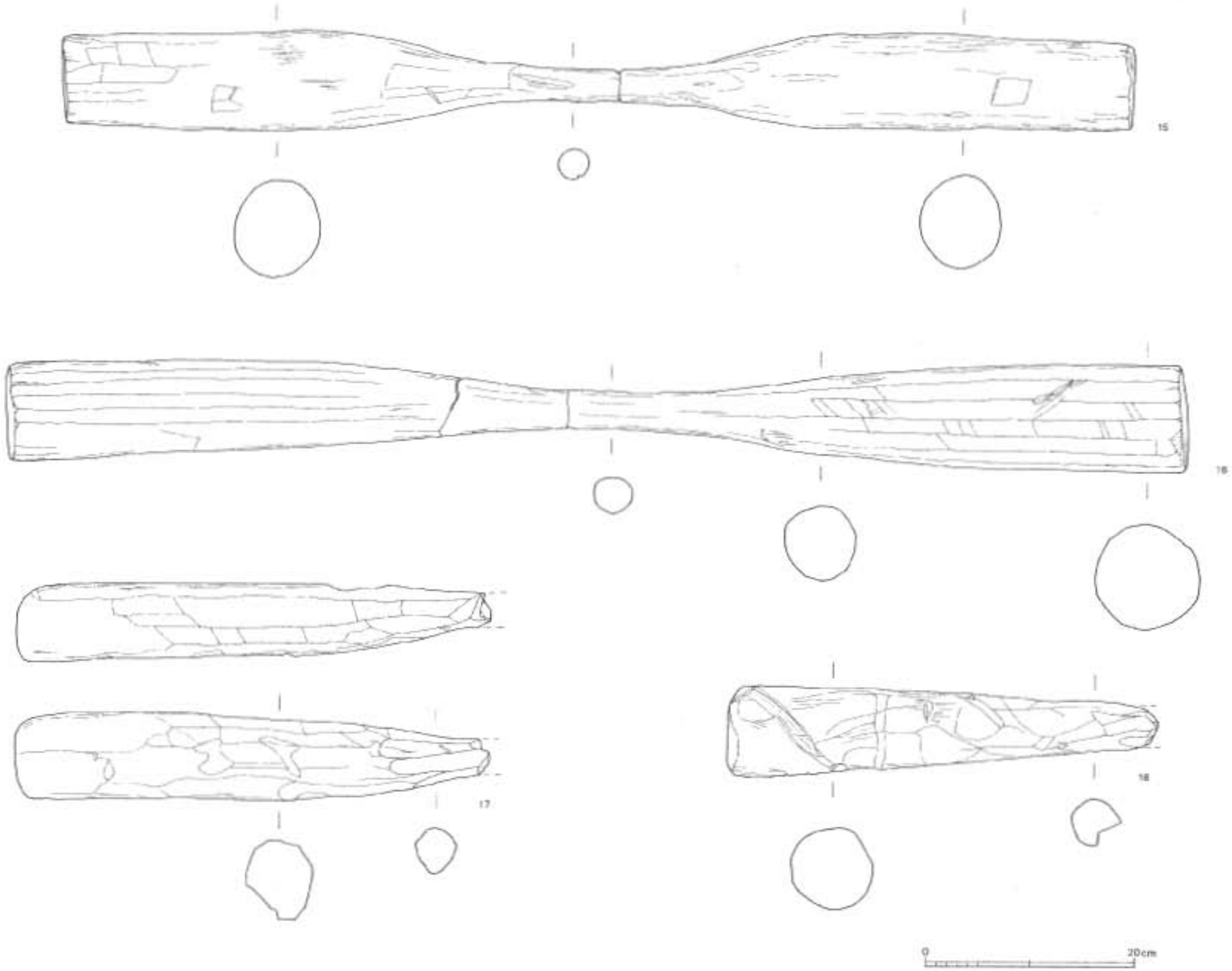
第50図　木製品①（1/2，1/4）



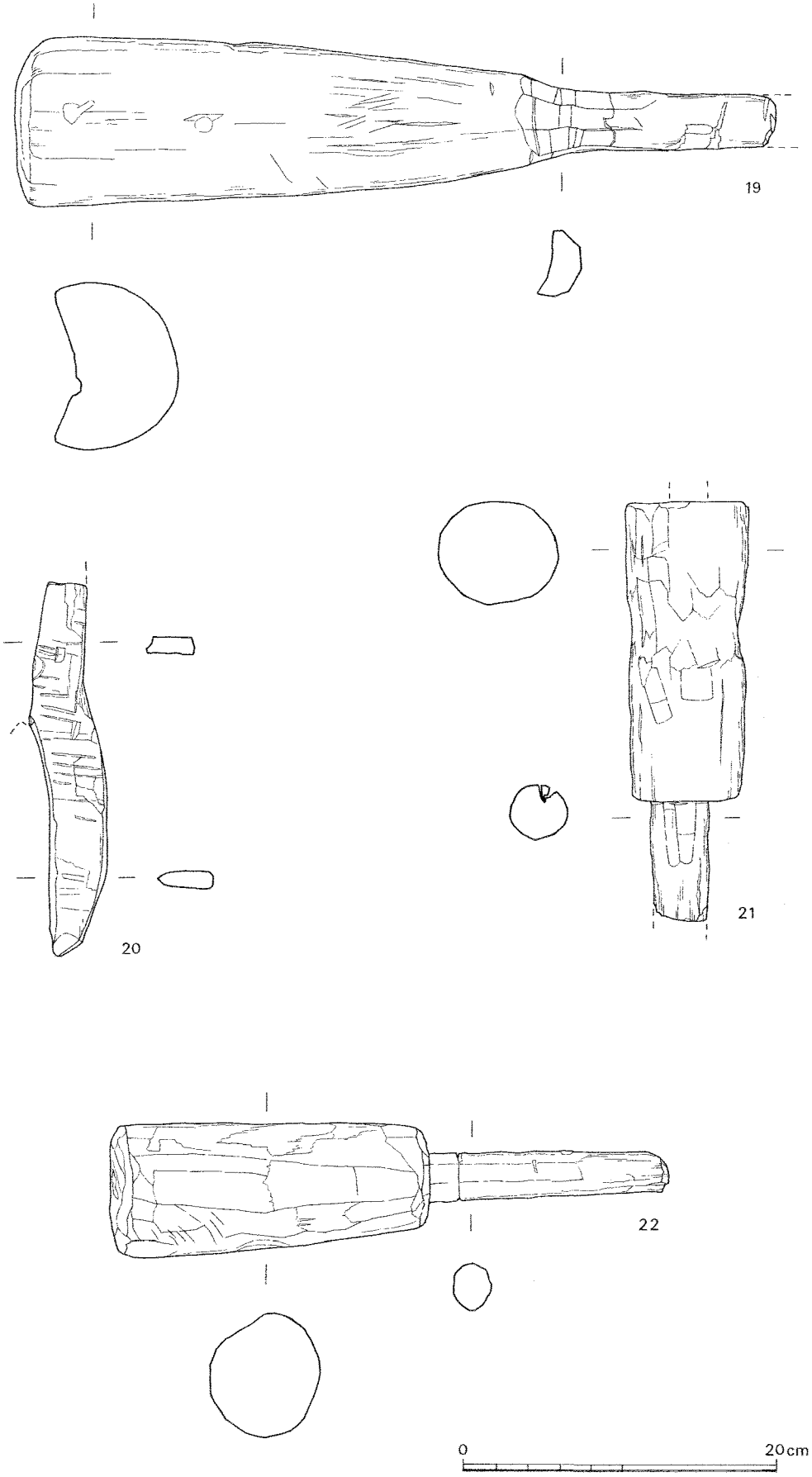
第51図　木製品②（1/4）



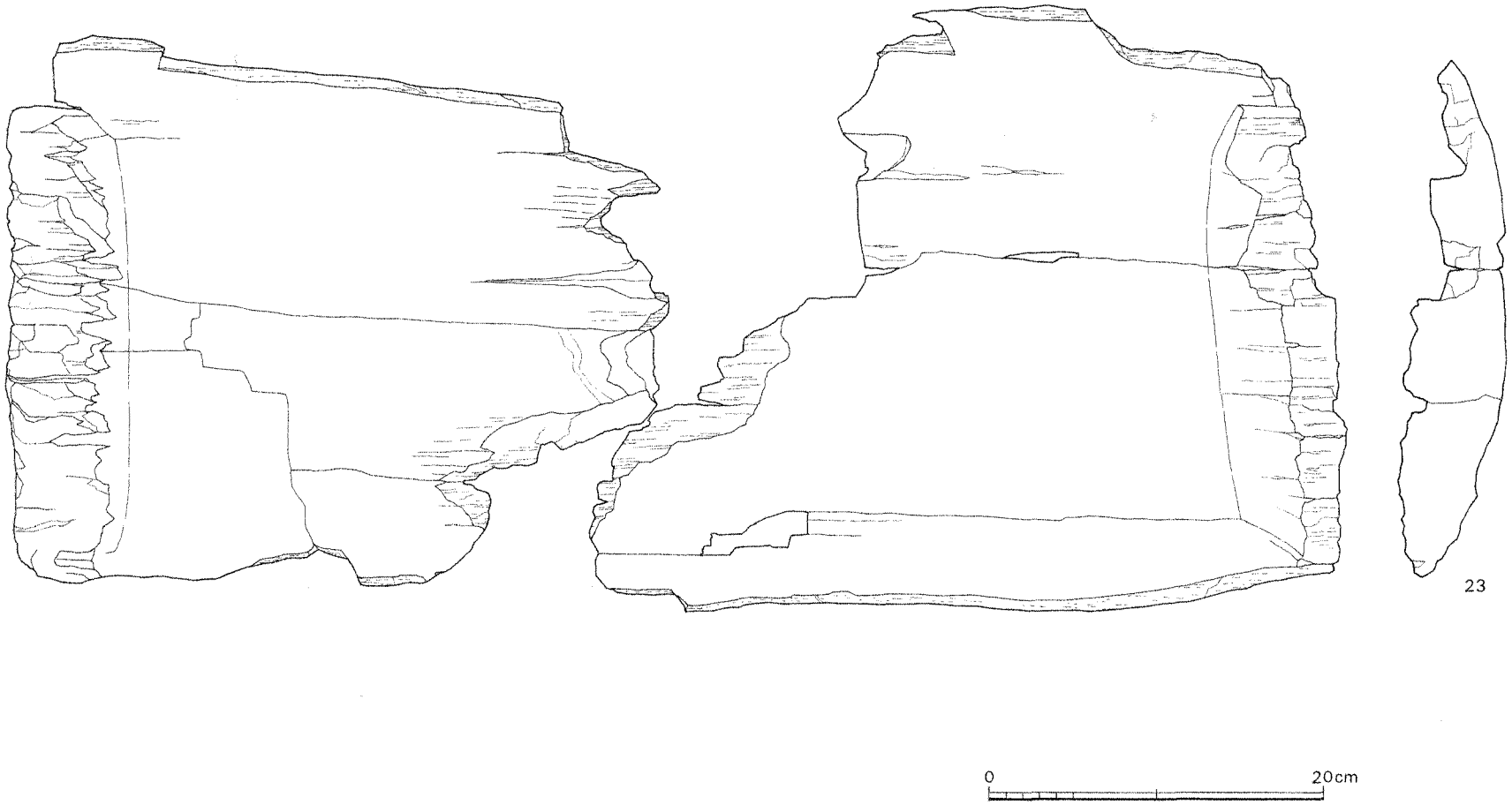
第52図　木製品③（1/4）



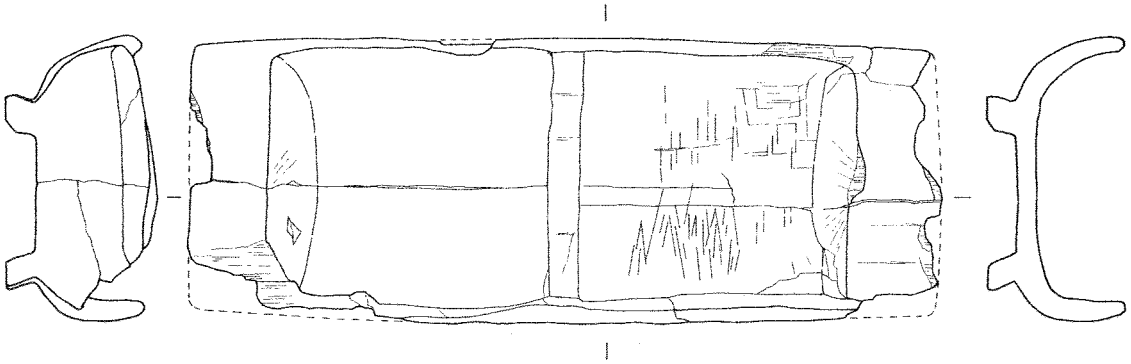
第53図　木製品① (1/4)

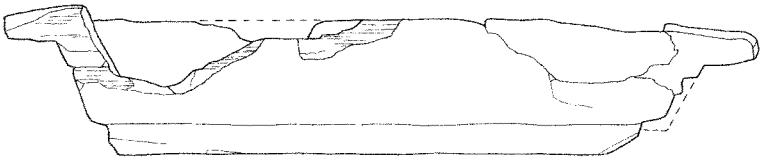


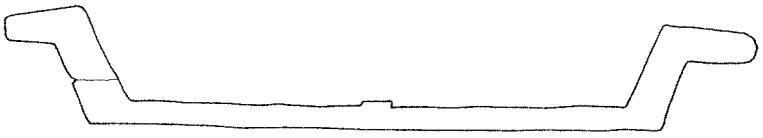
第54図　木製品⑤（1/4）



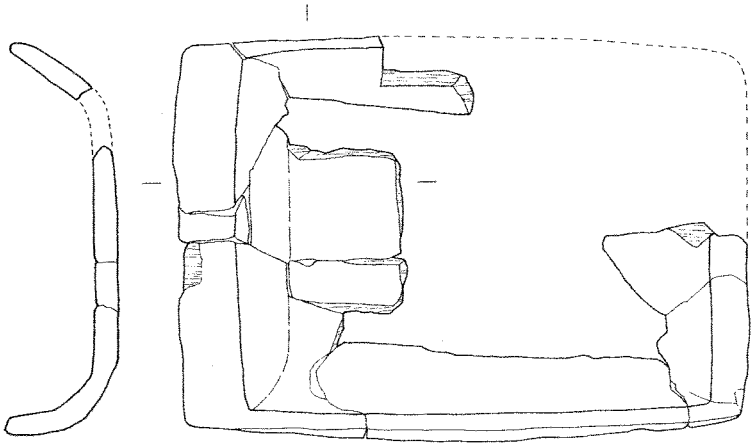
第55図　木製品⑥（1/4）

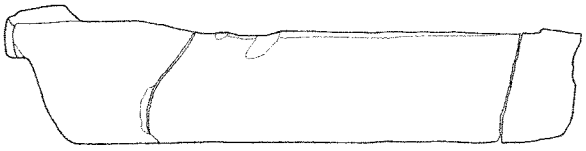






24

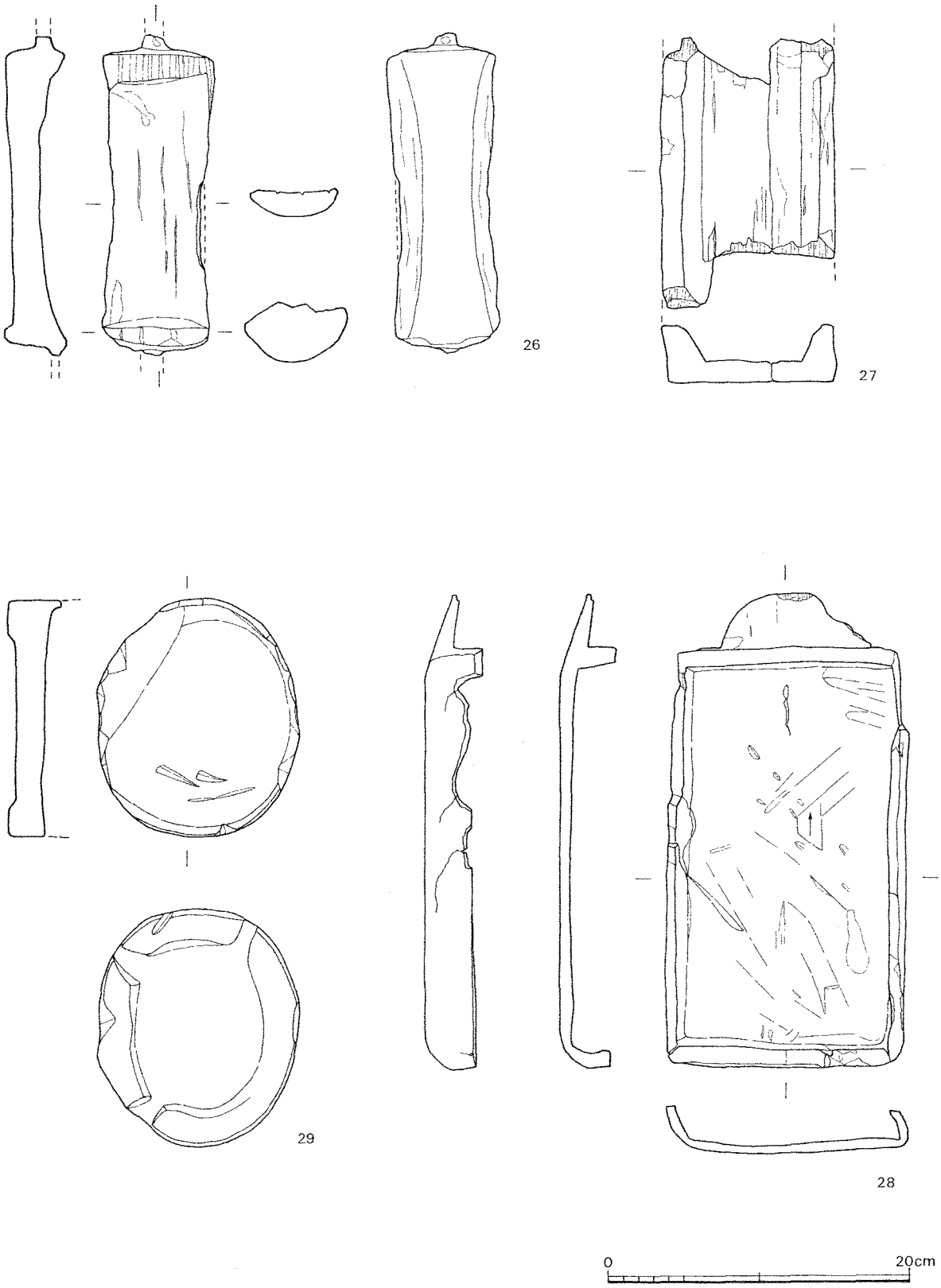




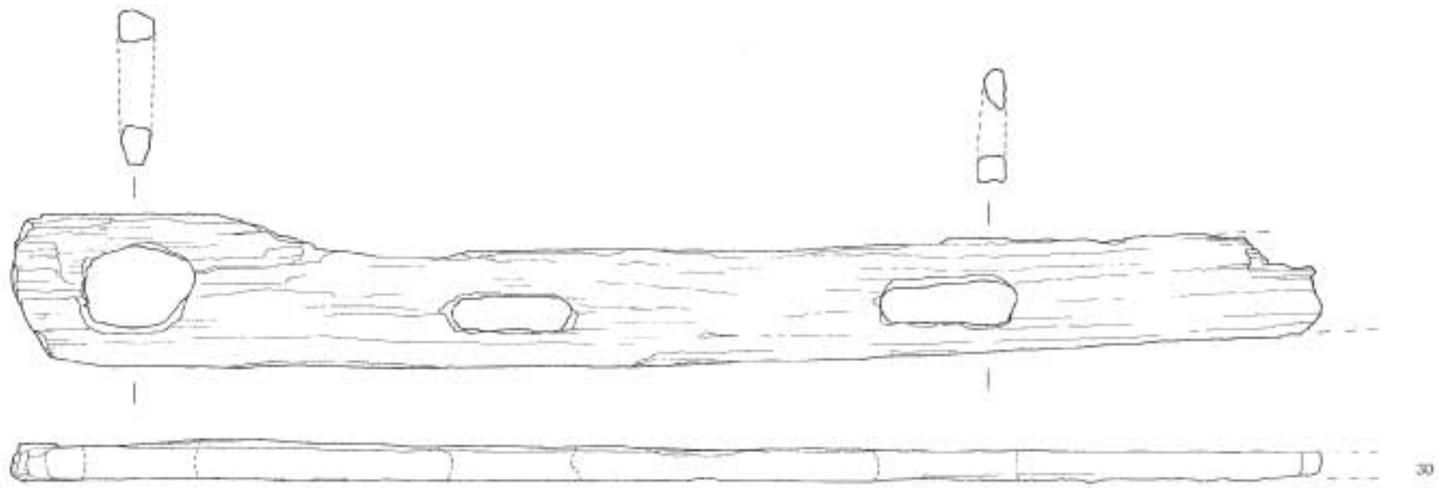
25

0 20cm

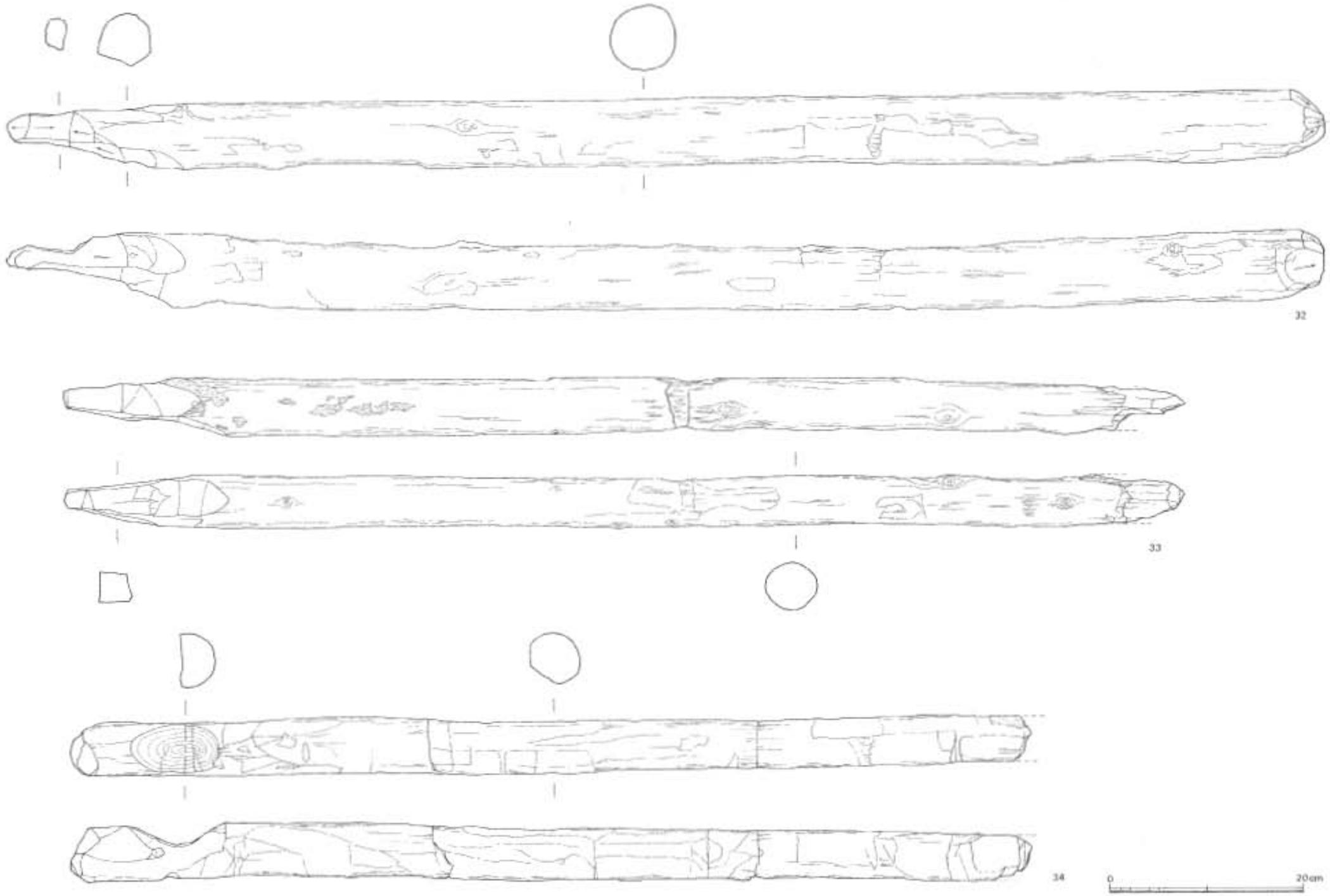
第56図　木製品⑦（1/4）



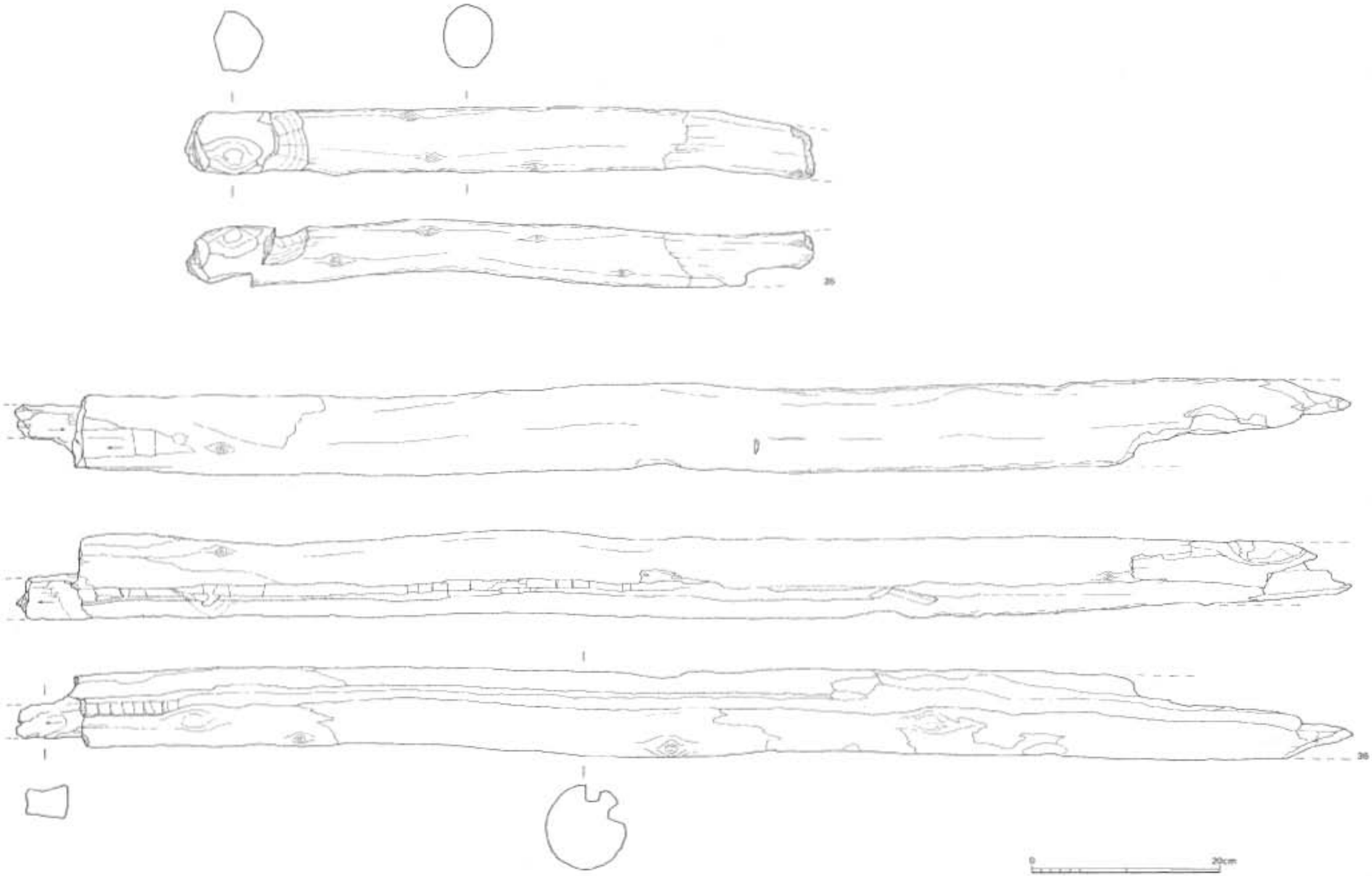
第57図　木製品⑧（1/4）



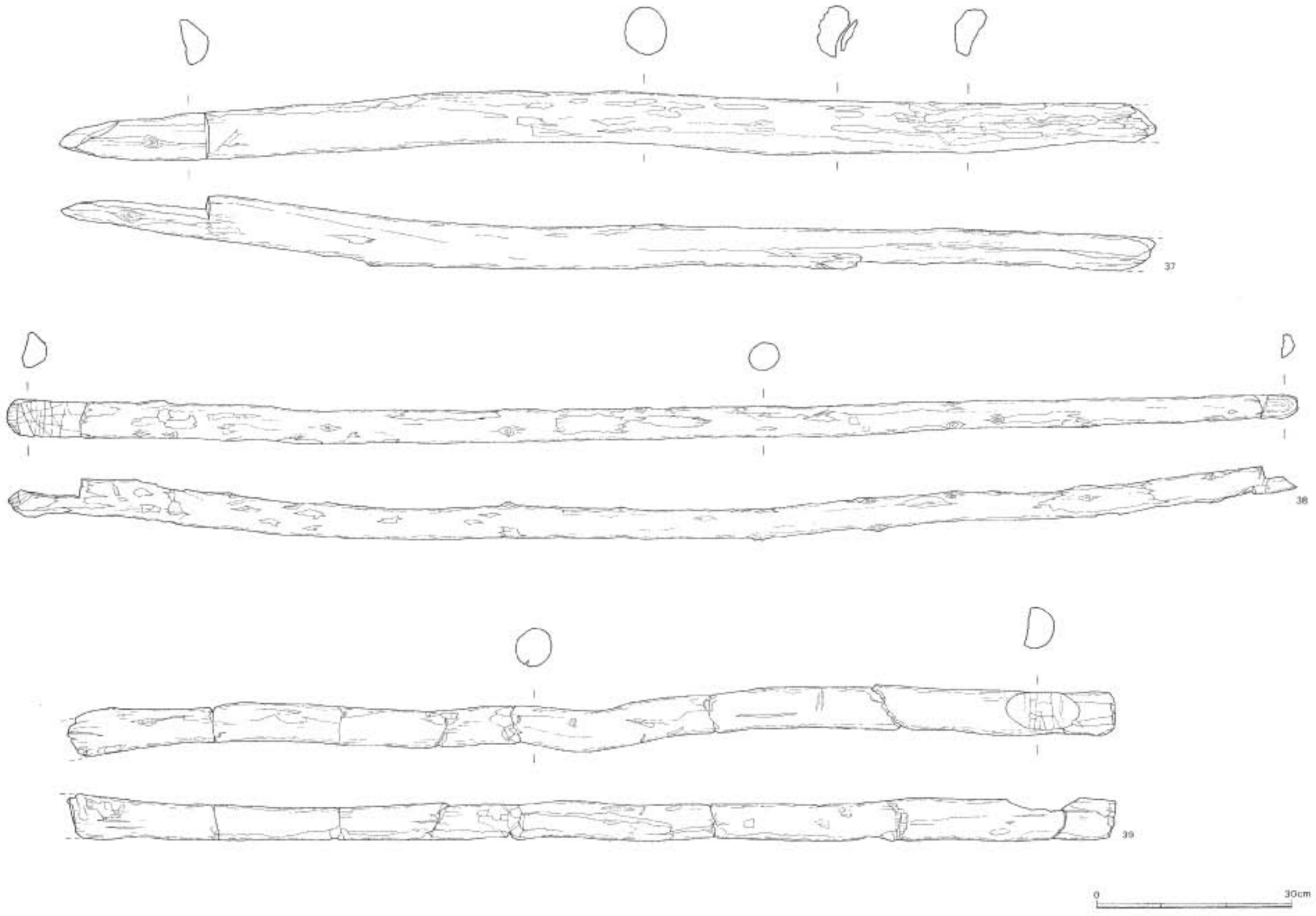
第58図　木製品⑧（1/4）



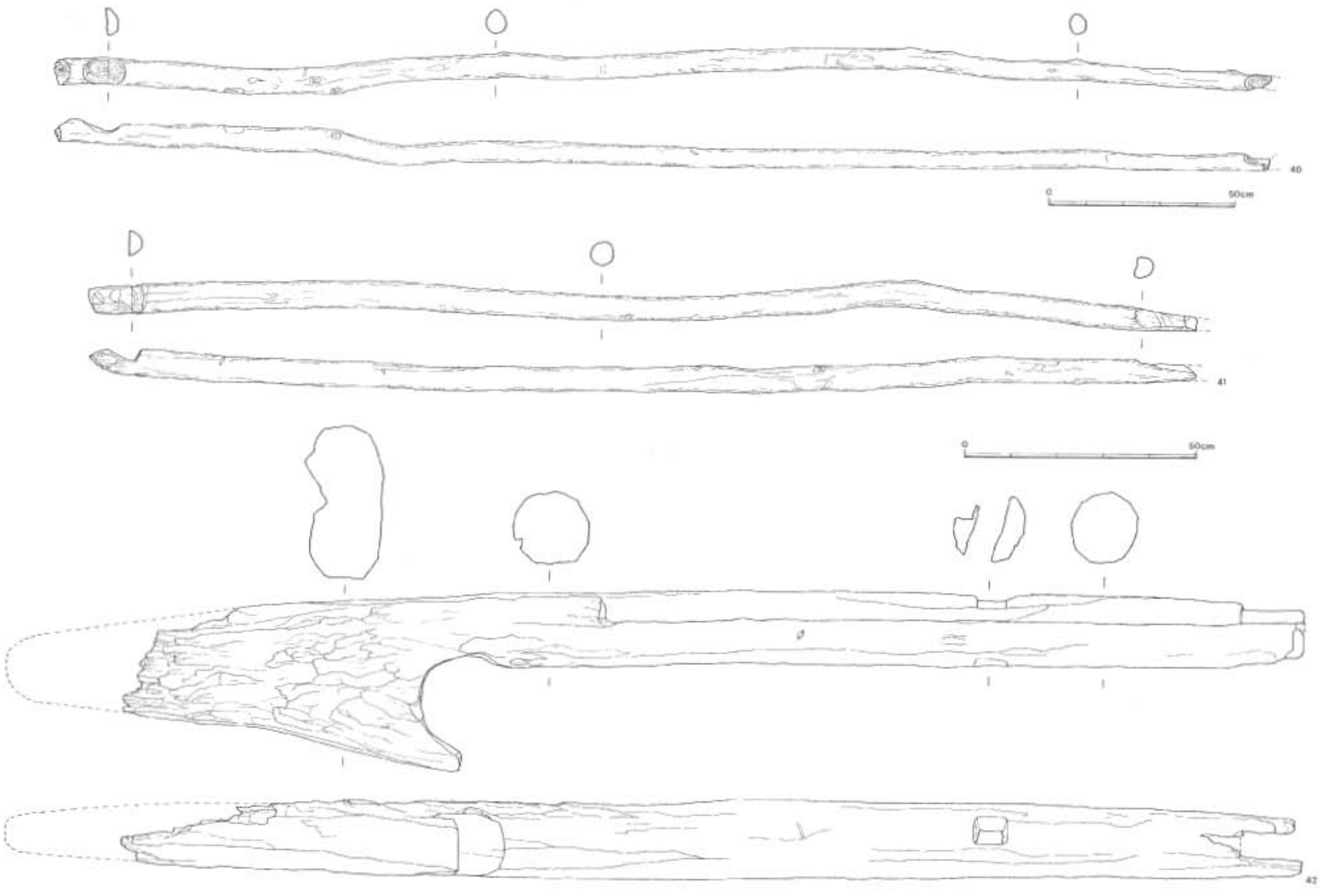
第59図　木製品⑲（1/4）



第60図　木製品① (1/4)

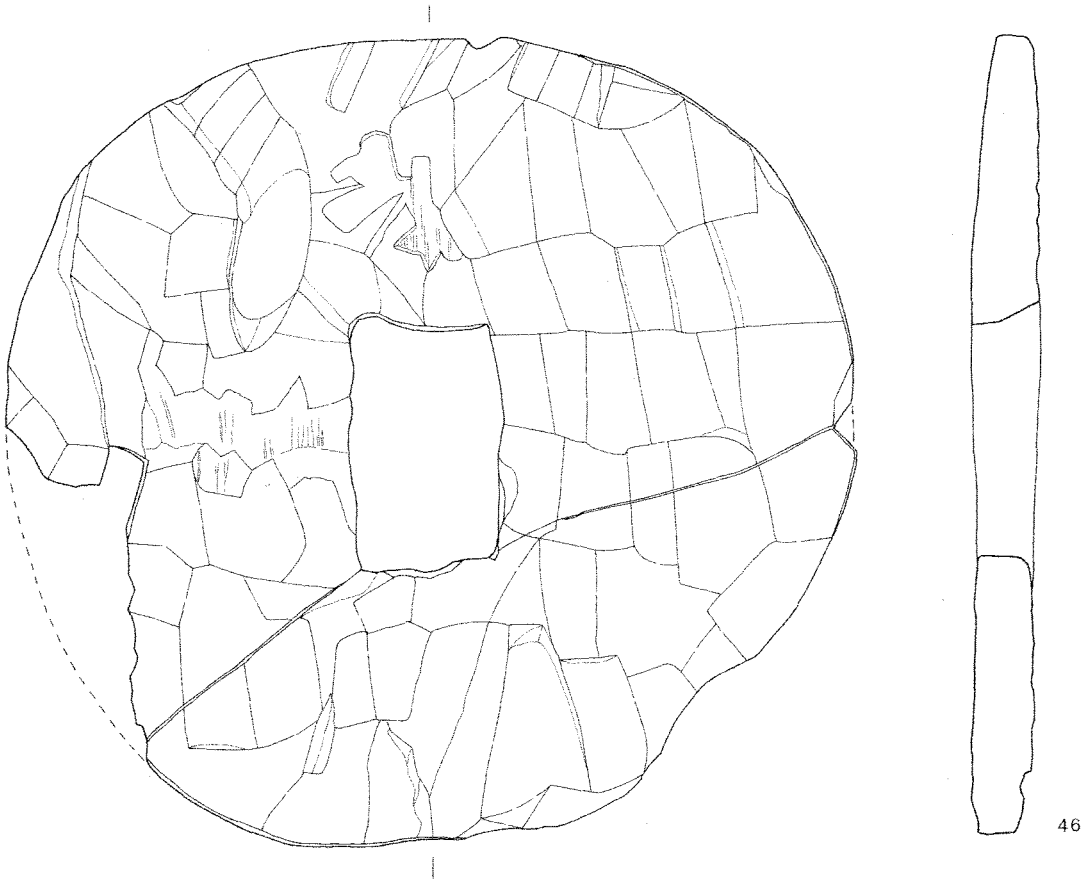


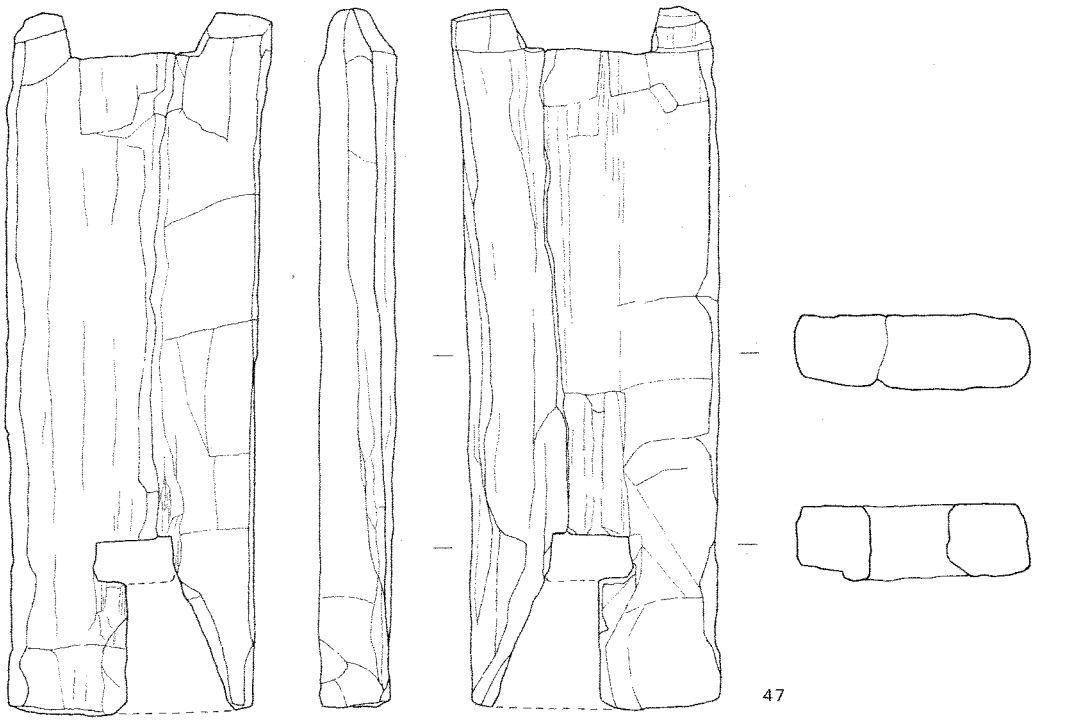
第61図　木製品② (1/6)



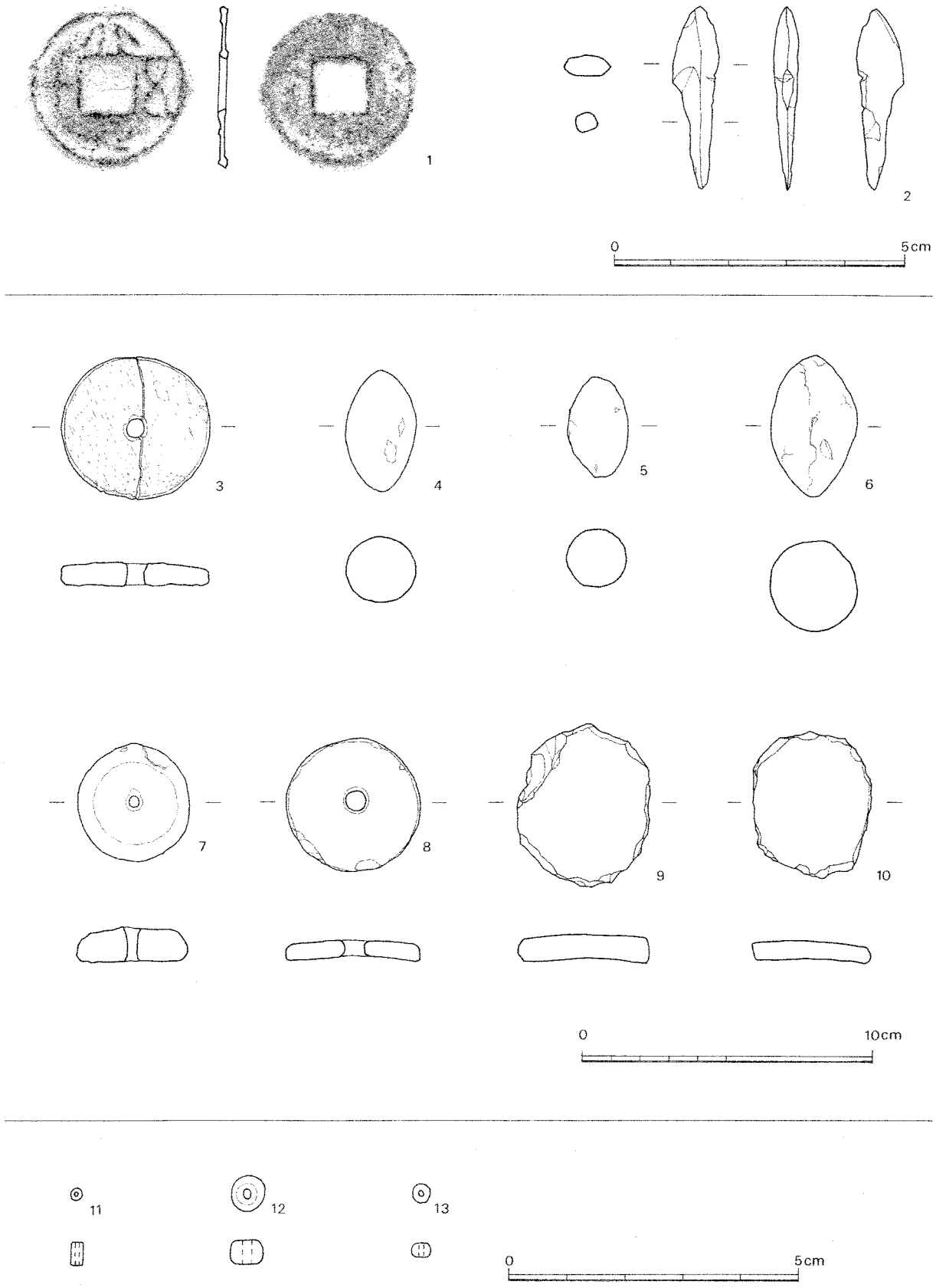
第62図　木製品⑬（1/8、1/10）

第5図　A区・B区遺構配置図（1/100）





第64図　木製品⑮（1/4）



第65図　金属製品・骨角器・土製品・装飾品（1/1，1/2）

cm，22が長さ36cmを測る。ともに平成11年度Ｅ区３号旧河道から出土した。23～29は槽及び何らかの器の一部と考えられるものである。24は長さ40cm，幅15cm，高さ８cm，28が長さ31cm，幅16cm，高さ４cmである。23が平成11年度Ｅ区３号旧河道，24が平成10年度Ｂ区２号濠，25～29が平成11年度Ｅ区３号旧河道から出土した。30～43は建築部材と考えられる。42は船材の可能性もある。30は現存長86cm，幅10cm，厚さ2.5cm，31は長さ101.5cm，幅19.5cm，厚さ6.5cm，32は長さ135.5cm，33が現存長115.5cm，34が現存長91cm，35が現存長67cm，36が現存長141cm，37が169cm，38が長さ198cm，39が現存長161cm，40が現存長329cm，41が現存長235cm，42が現存長253cm，43が現存長98cmである。30・31・34・37・38・40・41・42が平成11年度Ｅ区３号旧河道，32が平成11年度Ｅ区３号溝，33・36が平成11年度Ｂ区１号旧河道，35・39が平成11年度Ｅ区２号旧河道，43が平成10年度Ｂ区２号濠から出土した。44は長さ60.5cm，幅11.5cmが残存した梯子である。平成11年度Ｅ区３号旧河道から出土した。45は蔀戸の留め具と考えられる。長さ14.8cm，幅6.5cm，厚さ2.8cmを測る。平成11年度Ｂ区１号旧河道から出土した。46はネズミ返しである。長径44.5cm，短径42.5cm，中央に12.5cm×7.5cmの方孔をもつ。平成11年度Ｂ区１号旧河道から出土した。47は用途不明のものである。長さ37cm，幅13cm，厚さ４cmを測る。平成11年度Ｅ区３号旧河道から出土した。

(5) 骨角器（第65図）

３は鯨骨製の紡錘車である。長径4.6cm，短径4.5cm，厚さ0.8cm，重さ13.6ｇである。Ｃ７・８区落ち込み10から出土した。

(6) 土製品（第65図）

４～６は紡錘形の土製投弾である。４が長さ4.2cm，幅2.4cm，重さ21.6ｇ，５が長さ3.5cm，幅2.1cm，重さ12.2ｇ，６が長さ4.9cm，幅3.0cm，重さ37.3ｇを測る。４がＢ区４号土壙，５がＥ区Ⅴ層，６がＦ３区Ⅳｄ層から出土した。７・８は土製紡錘車である。８は土器片を転用したものである。７が長径4.1cm，短径3.9cm，厚さ1.2cm，重さ20.5ｇである。８が長径4.7cm，短径4.6cm，厚さ0.6cm，重さ13.3ｇである。７はＥ８区Ⅳｂ層，８がＤ５区Ⅲ層から出土した。９・10は土器片の周りを丸く面取りした円盤状土製品である。重さが９は26.7ｇ，10が16.5ｇを測る。９がＤ３区Ⅳ層，10がＤ９区Ⅴ層から出土した。

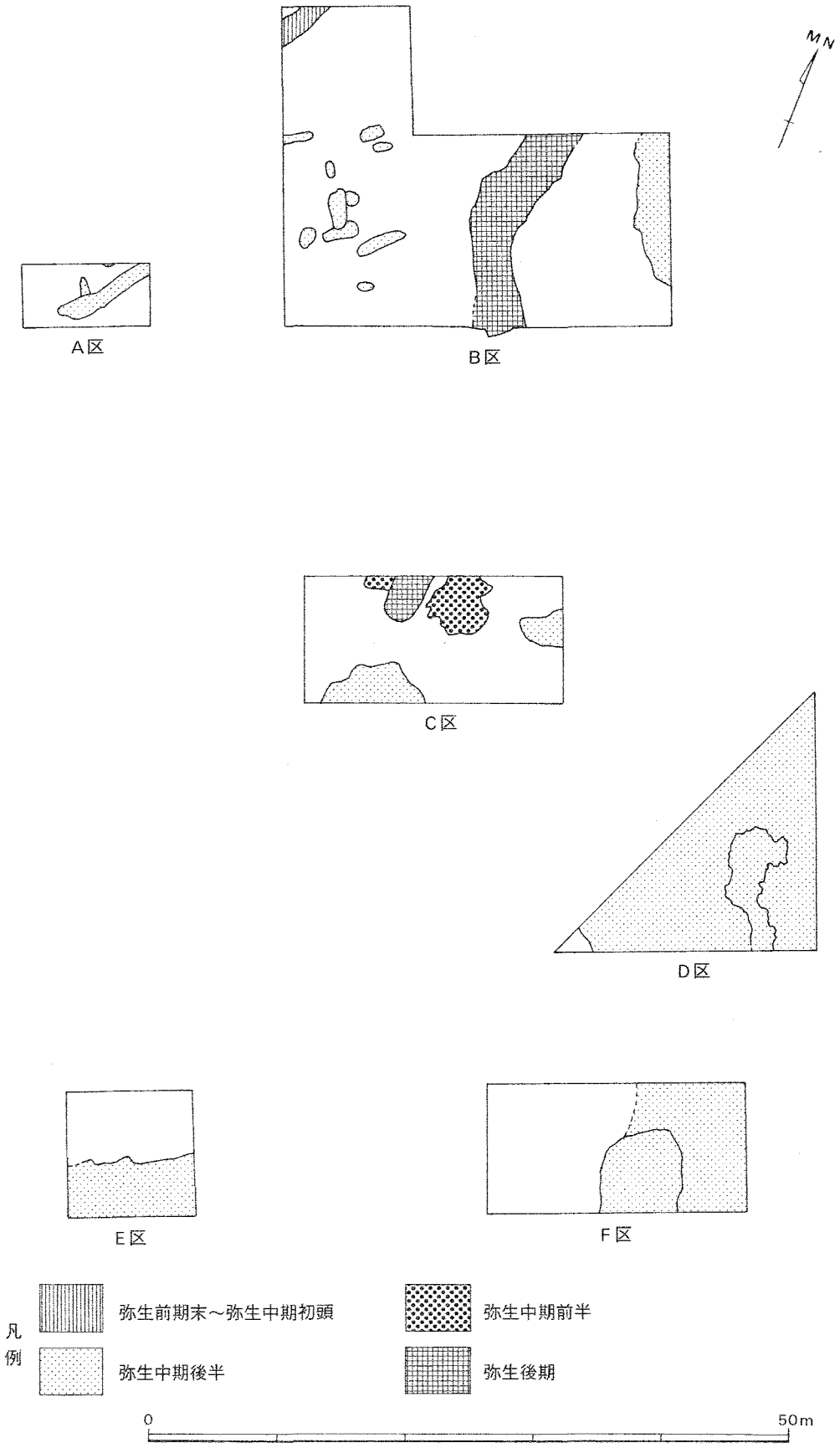
(7) 装飾品（第65図）

11は濃緑色の碧玉製管玉である。長さ４㎜，径２㎜で，Ｆ６区Ⅳａ層から出土した。12・13は藍色のガラス玉である。12が長さ４㎜，径６㎜で，Ｂ16区１号濠Ⅰ層から出土した。13は長さ2.5㎜，径３㎜で，Ｆ５区土器溜Ⅵ層から出土した。

4．まとめ（第４図・第66図）

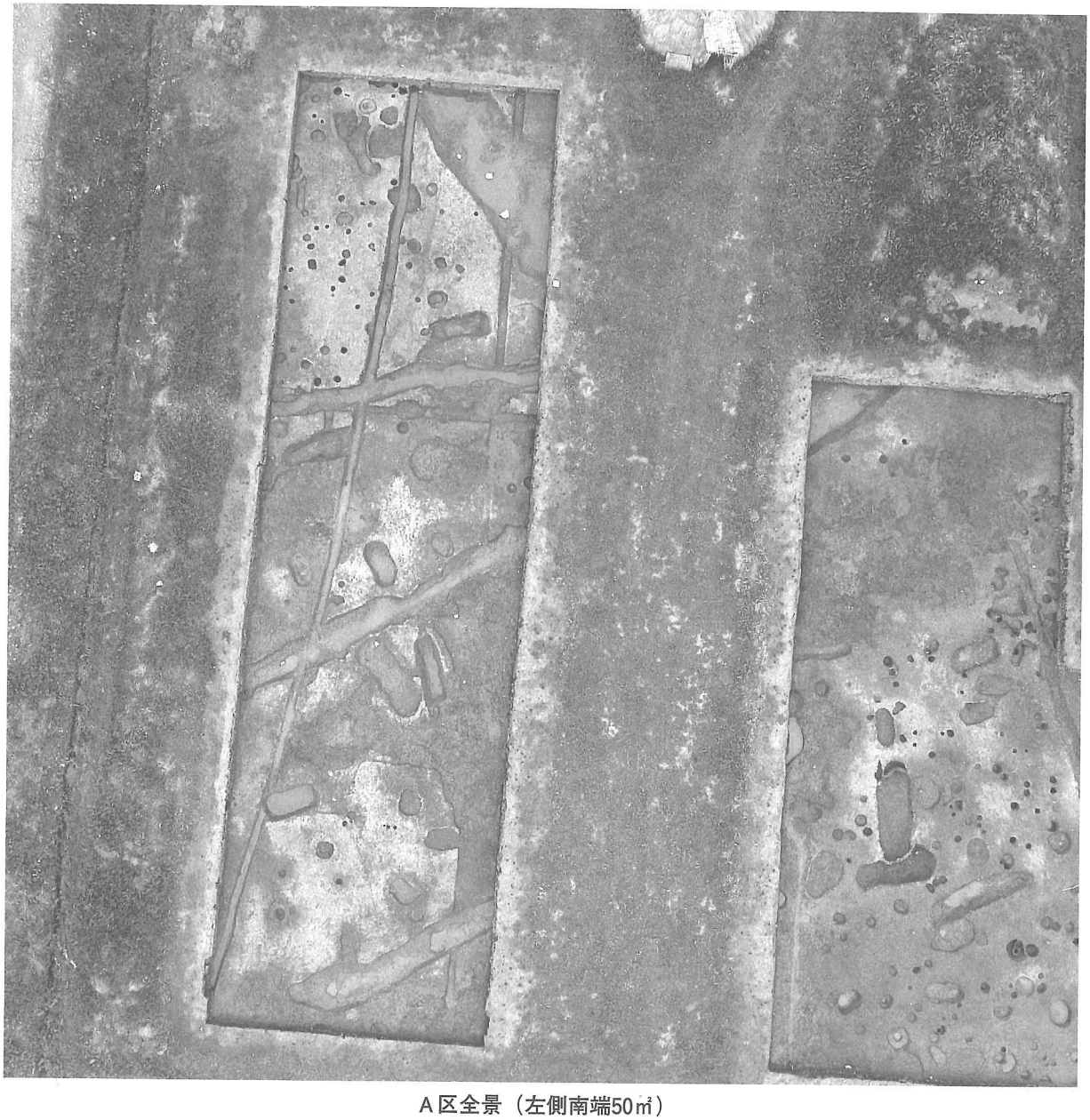
最後に平成12年度環濠等状況調査の成果について簡単にまとめてみたい。遺構では，旧河道２条，濠１条，溝２条，土壙数10基，土器溜１，集石遺構等を確認した。以下，検出した遺構の内容をもとに，過去の調査結果を踏まえて，今回の調査地区の状況の時期的変遷を考察する。

原の辻遺跡では，弥生前期末に居住が始まったことがこれまでの調査で明らかになっているが，今回の調査地区のＢ区においても改めて検証された。弥生前期末～弥生中期初頭の遺物を伴う２号溝の確認がそれである。Ａ区・Ｂ区・Ｃ区はいずれも同じ微高地内にあったと考えられる。北は幡鉾川本流にあたる旧河道，東は１号旧河道，南は２号旧河道，西は平成10年度船着き場付近水路等状況調査での１号旧河道と，周りをすべて旧河道に囲まれた微高地である。これまでの調査で，地山の削平状況等からこの微高地は北西から南東に向かって傾斜していた可能性が高いと考えられる。２号溝は，平成10年度特定調査や今年度の原の辻遺跡発掘調査事業の調査で，北西方向と南西方向に伸びることがわかっている。さらにこの溝の北には５ｍほど離れて同じ時期の溝がもう１条沿うように走っていることも確認された。これらの溝の走る方向は微高地の傾斜を横切っており，地形との関係が考えられる。この微高地内では，弥生前期末の遺物を伴う遺構がこれら２条の溝以外に確認されていないが，恐らくは溝の北西側，微高地内ではより高く旧河道との比高が高い場所の南側斜面から，弥生前期末以降居住が始まったと推測される。溝の南東側であるＡ区・Ｂ区で確認した土壙は，時期が確認できたもののほとんどが弥生中期後半のものであった。時間的経過とともに居住域が拡大したことを示すものであろう。さらに南に移ると，土壙や柱穴状小穴は漸次減少傾向がみられ，平成11年度の特定調査Ｂ区ではまだ確認できたが，今年度のＣ区ではほとんど確認されなかった。この調査区付近が居住域の南限と考えられる。また，河道を挟んで隣接する北西側の微高地には，同じ時期に朝鮮半島系の人々の集住域と考えられる場所があり，南西には河道を挟んで弥生中期の船着き場があるため，この微高地では，渡来した人々との民間レベルでの交渉・交易が行われた可能性も考えられる。前漢時代の五銖銭と三翼鏃，朝鮮系無文土器，楽浪系土器等の大陸や朝鮮半島からもたらされた遺物が数多く出土しているからである。船着き場に面する南西地区は未調査であるので，今後の調査が期待される。微高地の南東端に位置する土器溜は，弥生中期前葉～弥生後期後半の資料を出土していることと，二次的に形成されたものであることを確認した。平成11年度特定調査による出土品から，付近に祭儀的施設の存在が推測されたが，地山が後世の削平をうけており確認できなかった。弥生後期に入ると微高地内における居住域は放棄され，今回確認した１号濠も含めて５条に及ぶ濠が設けられたと考えられる。過去から今回の調査に至るまで，これらの濠以外に弥生後期の遺物を出土した遺構は，この微高地内では確認されていない。平成11年度特定調査で確認した弥生後期における多重環濠の掘り直しとともに，「倭国大乱」関連の軍事的緊張状況を反映したものであろう。この弥生後期の変容は，多重環濠の掘削と船着き場の築造によって一支国王都としての整備が行われた弥生中期前半とともに，原の辻遺跡における二大画期といえよう。



第66図　時期別遺構配置図（1/500）

図　　版



A区全景（左側南端50㎡）

図版 2

B 区全景

C区全景

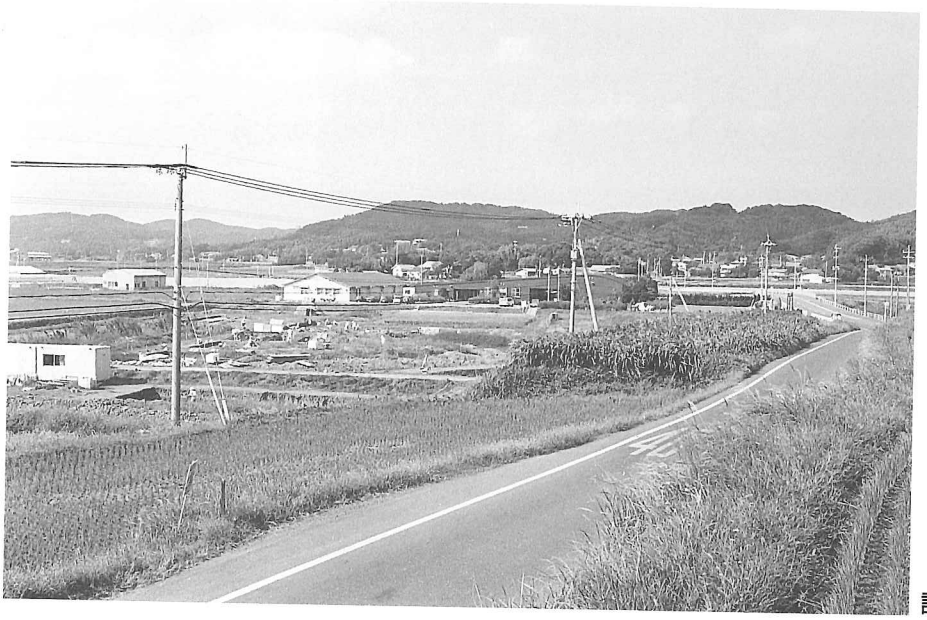
図版 4

D区全景

E 区全景

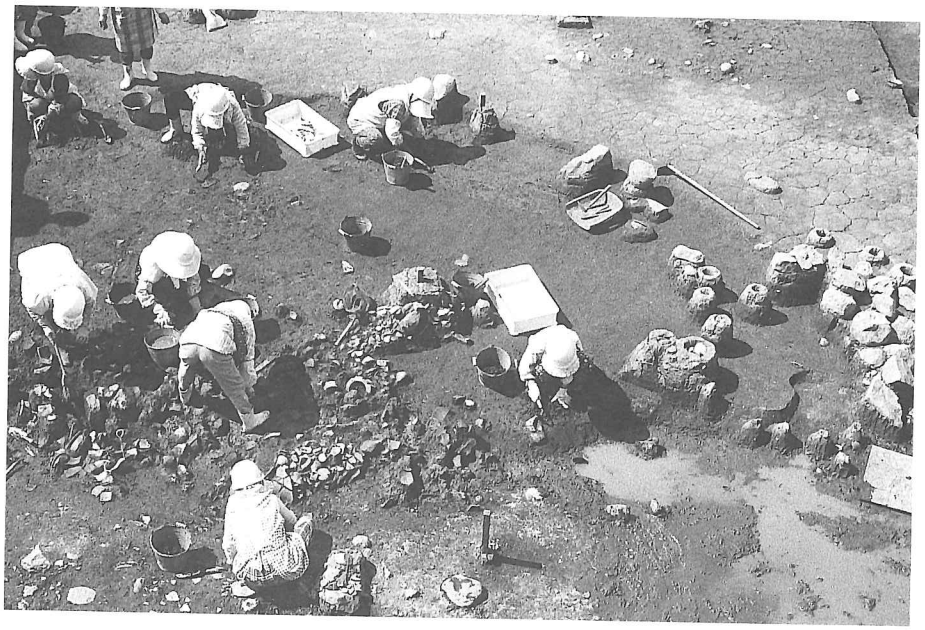
図版 6

F 区全景



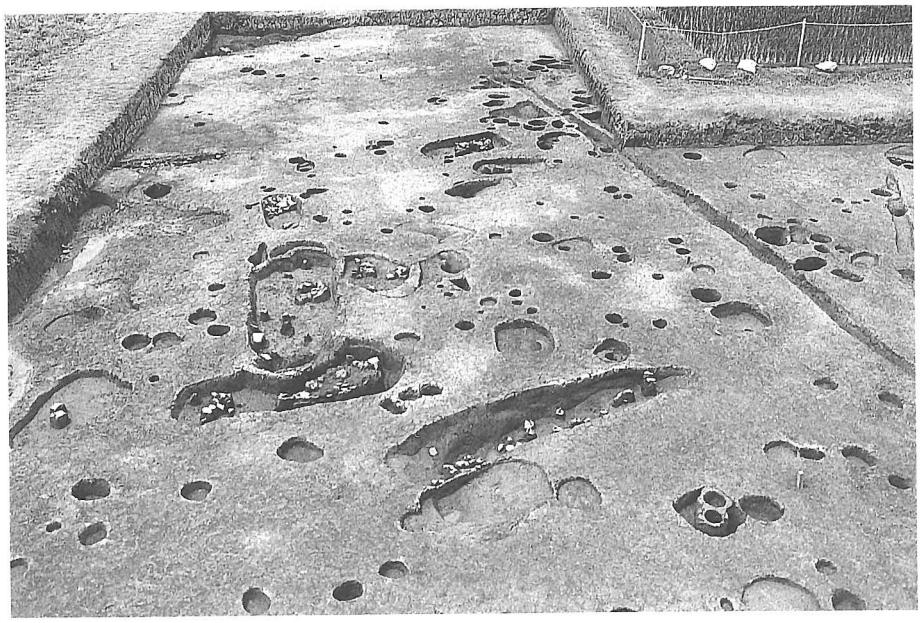
調査区遠景

B 区調査風景



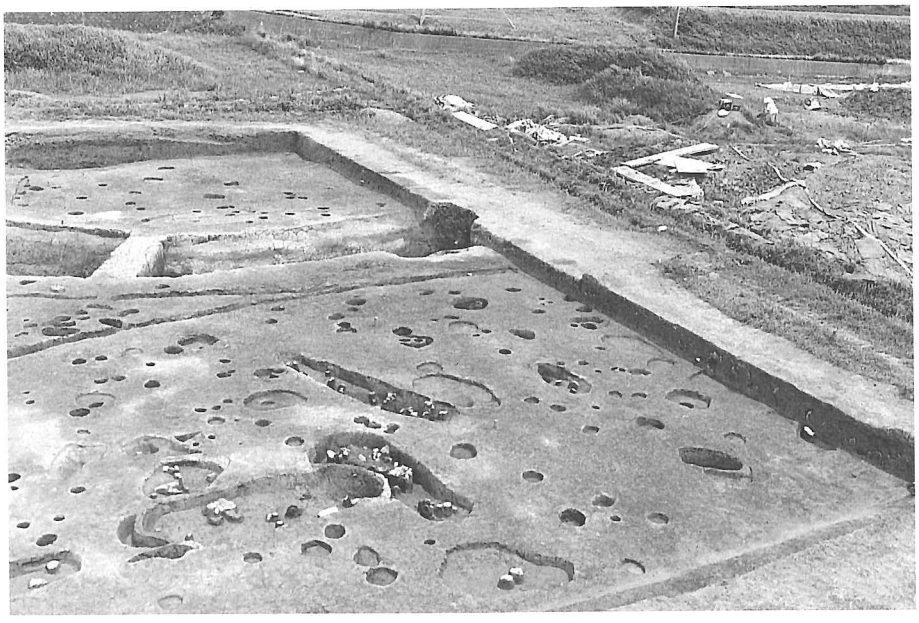
F 区調査風景

図版 8



B区北部（南から）

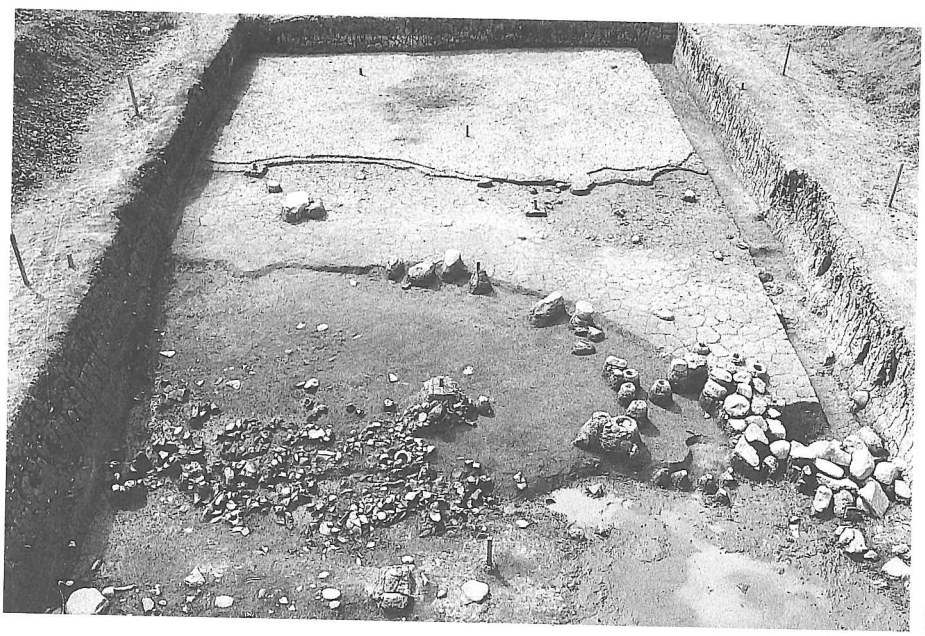
B区東部（西から）



B区南部（西から）

C区西部（東から）

C区東部（東から）



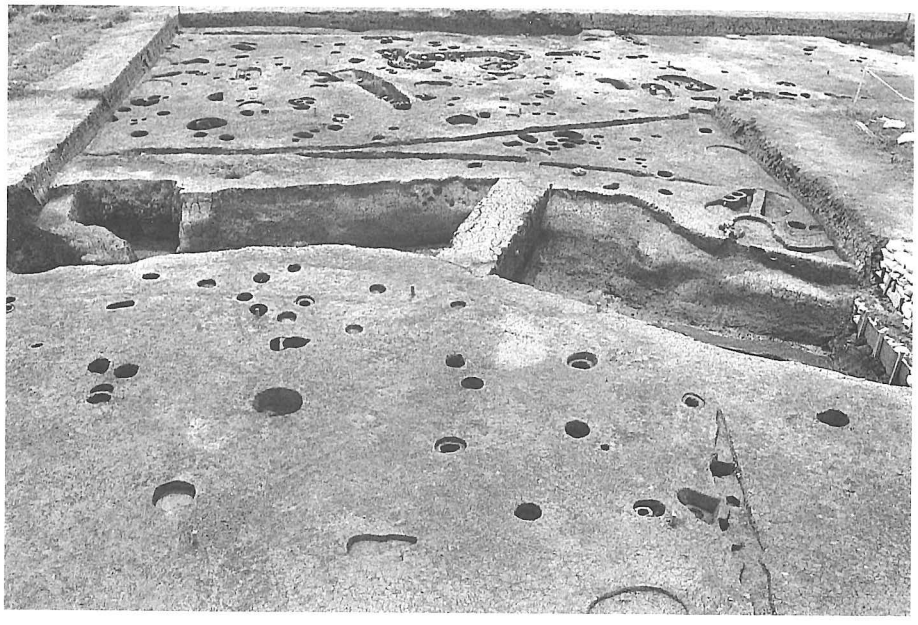
D区全景（東から）

図版10

D区
1号旧河道西岸付近

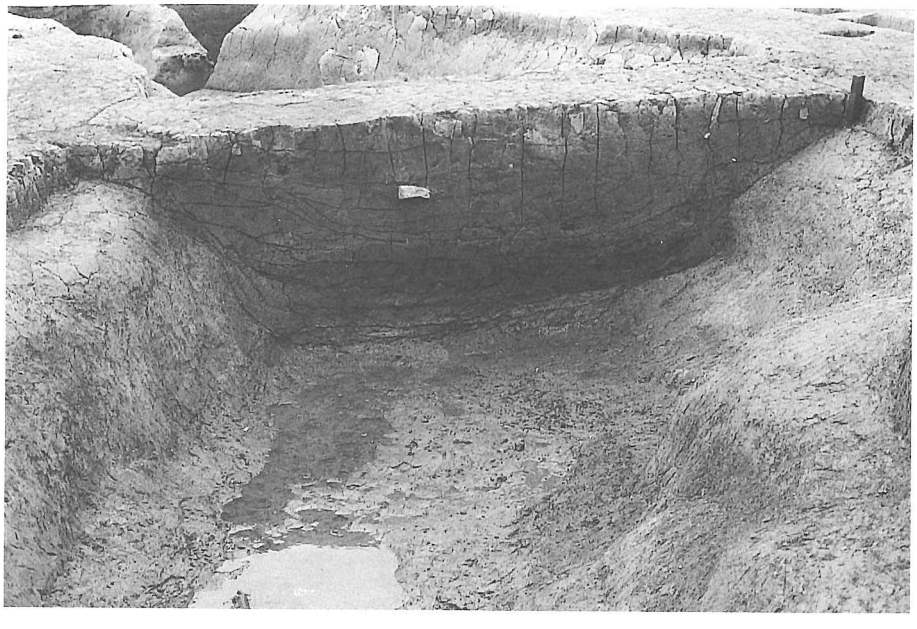
F区
1号旧河道全景(東から)

E区2号旧河道
遺物出土状況



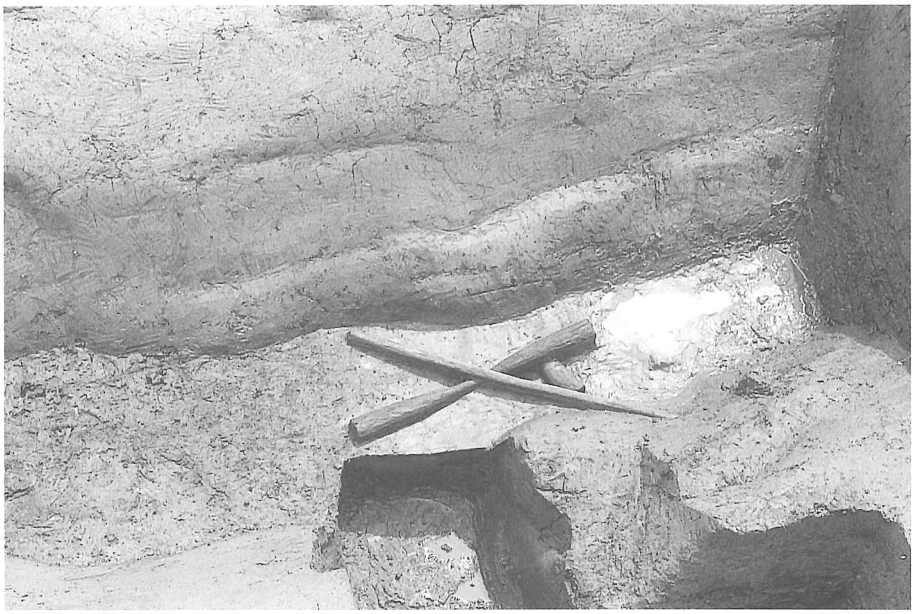
B区
1号濠全景（東から）

B区
1号濠全景（南から）



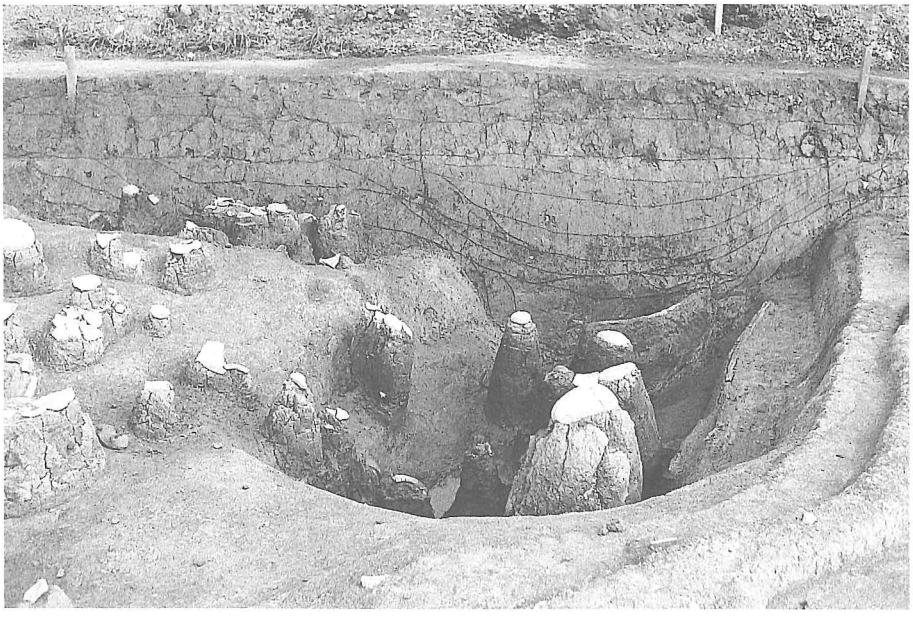
B区
1号濠断面土層

図版12



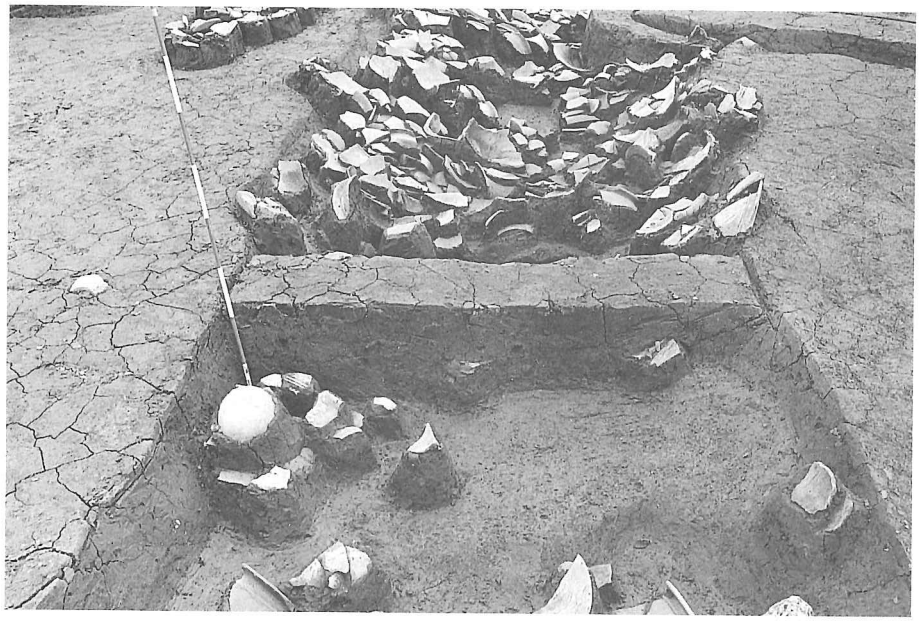
B区１号濠
遺物出土状況

C区
１号濠全景（北から）

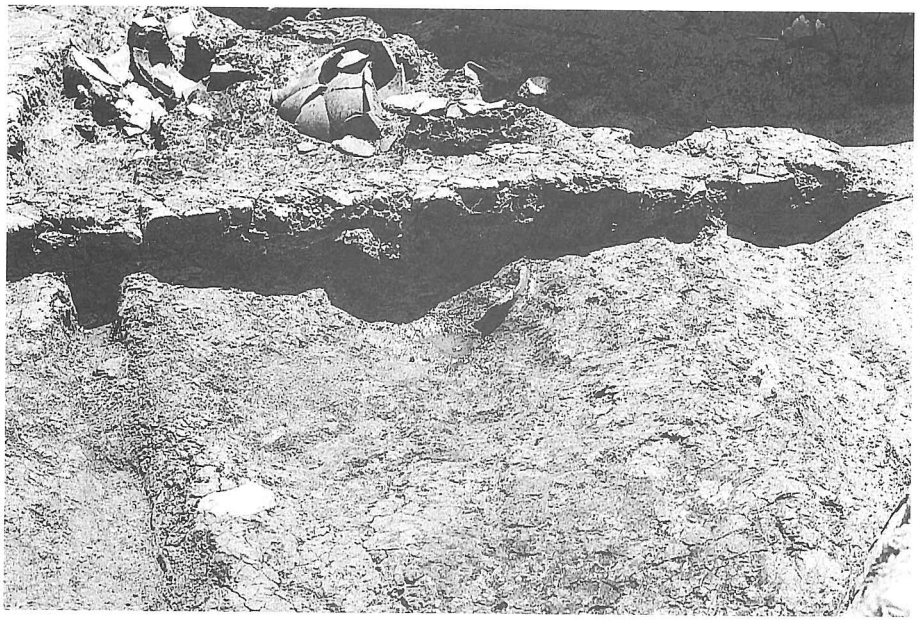


C区１号濠
遺物出土状況

A区
1号溝全景（東から）



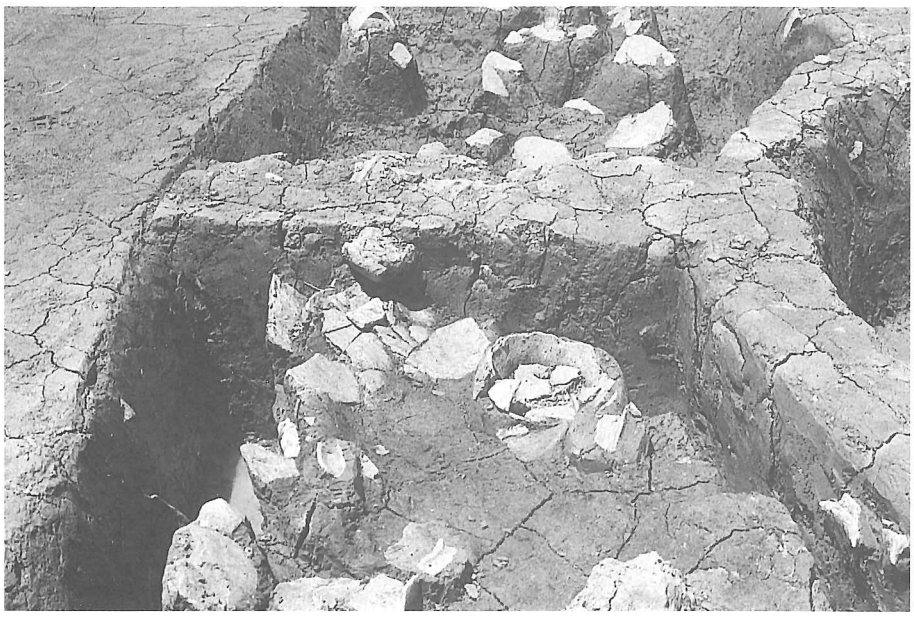
A区1号溝
遺物出土状況



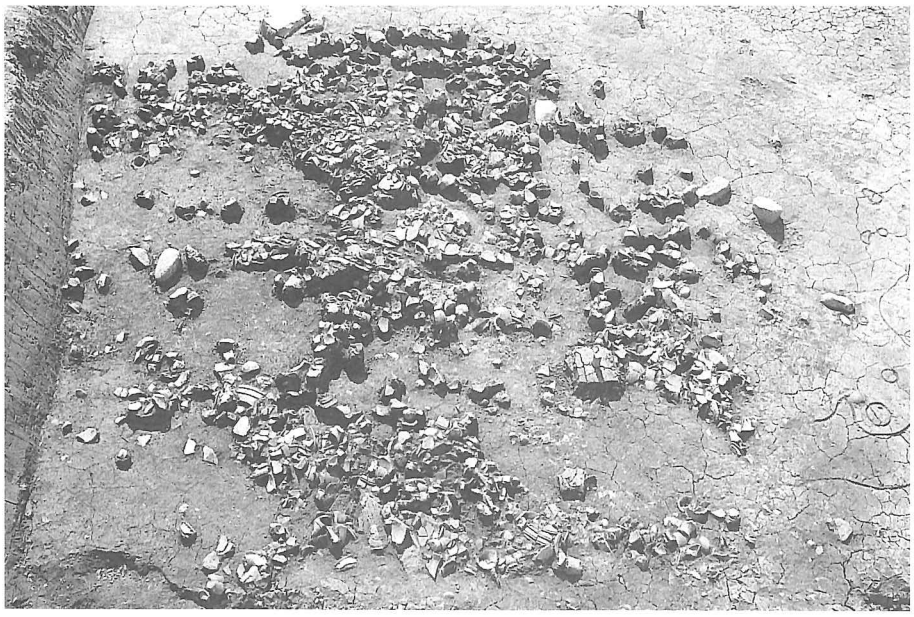
B区2号溝
遺物出土状況

図版14

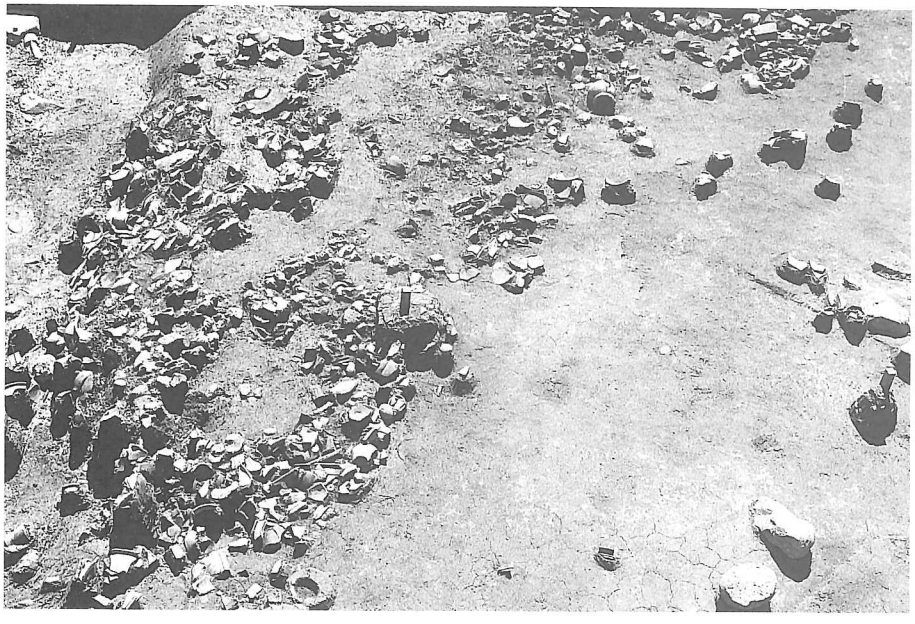
B区3号土壙
遺物出土状況



B区5号土壙
遺物出土状況



F区
土器溜全景（東から）



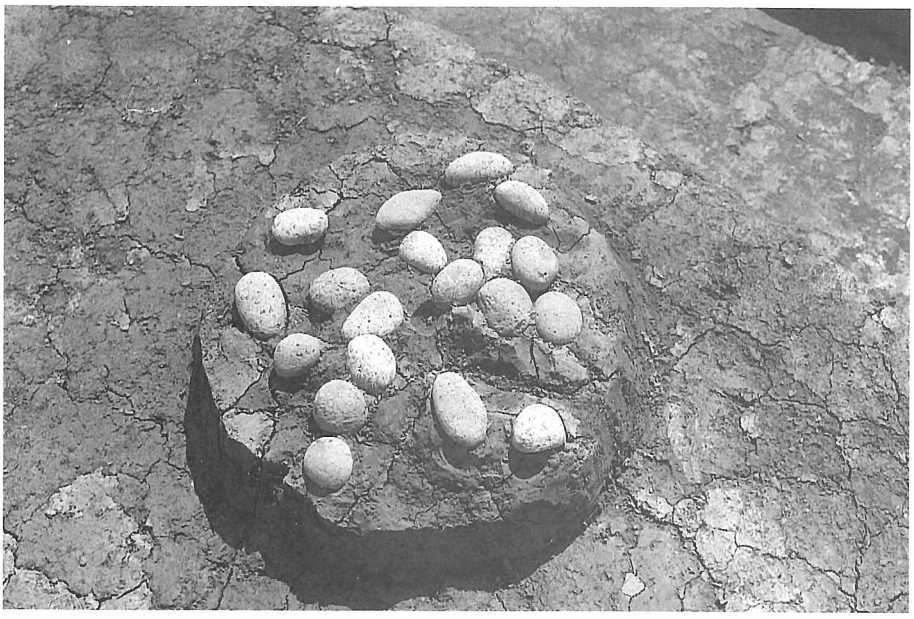
F区
土器溜全景（北から）

D区
集石遺構全景（東から）

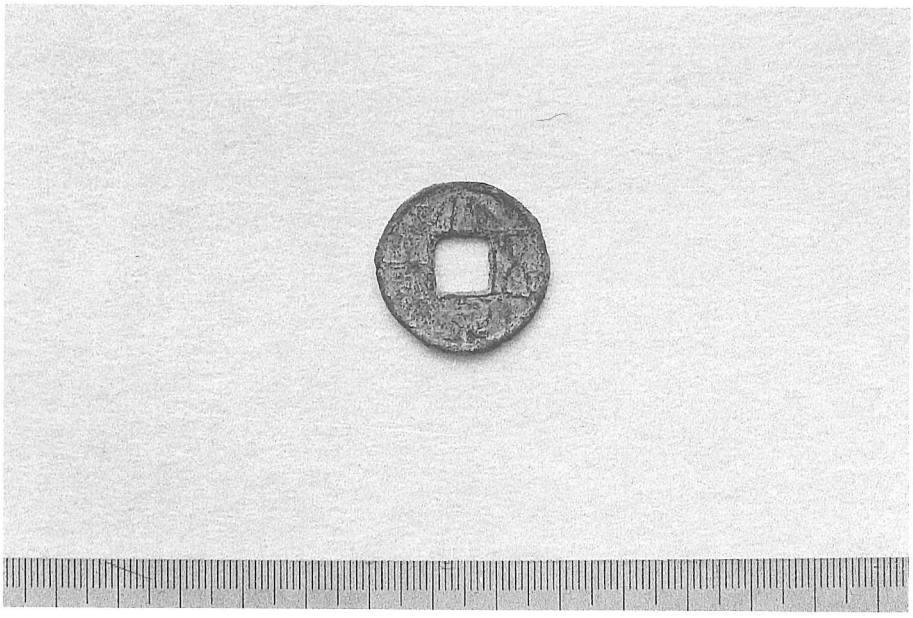
D区集石遺構
遺物出土状況

図版16

D区
集石遺構試掘壙（東から）



B区
Pit 1 小礫出土状況



出土大泉五十

報告書抄録

ふりがな	はるのつじいせき
書名	原の辻遺跡
副書名	原の辻遺跡特定調査事業発掘調査報告書
巻次	Ⅲ
シリーズ名	原の辻遺跡調査事務所調査報告書
シリーズ番号	第21集
編著者名	杉原敦史・藤村　誠
編集機関	長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所
所在地	㊡811-5322　長崎県壱岐郡芦辺町深江鶴亀触1092番地1　TEL09204(5)4080
発行年月日	西暦2001年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
原の辻遺跡（はるのつじ）	長崎県壱岐郡（ながさきけんいきぐん） 芦辺町深江（あしべちょうふかえ） 鶴亀触（つるきふれ）	42423	93	33°45′34″	129°45′6″	20000518 ～ 20001020	1,300m²	特定調査

収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原の辻遺跡	集落・包含地	弥生時代 古墳時代	旧河道2条 濠1条 溝2条 土壙 土器溜 集石遺構	弥生土器 朝鮮系無文土器 楽浪系瓦質土器 三韓系瓦質土器 陶質土器 土師器　須恵器 打製・磨製石器 木製品 大泉五十　銅鏃 管玉　ガラス玉	

原の辻遺跡調査事務所調査報告書第21集

原の辻遺跡

2001. 3. 31

発行　長崎県教育委員会
長崎市江戸町2番13号

印刷　株式会社　昭和堂印刷